
居候日記

narrow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居候日記

【ΖΖコード】

Ζ3362S

【作者名】

narrow

【あらすじ】

子供の姿をした彼の正体は悪魔。

不慮の事故によって主従契約を交わしてしまった、主人の部屋に住み着いている。

主人は若い女性であり、本来の姿であった時の悪魔に恋をしていた。悪魔の方も、一緒に暮らすうちに彼女に惹かれ始めていた。

妨害する兄、見守る天使…

悪魔と人間の恋は実るのか？

ドタバタしたりバトつたりシリアスに悩んでみたりなオカルティック
クラブコメ！

1 八つ当たり。（前書き）

使い魔日記の続編にあたりますが、こつちから読んでもたぶん大丈夫です。

1 ハツ恋たり。

ウチには、もうすいぶん前から子供の姿をした自称”悪魔”が、住みついている。

最初、バーでべろんべろんに酔っ払って出合った当時、彼はびっくりするほど背の高い、大人の男だった。

その彼に、あたしは恋をした。

ほとんど、見た目に一目惚れしたようなカタチだった。

それが、いろいろあって、あたしの方から誘つてこの家で一緒に住むようになり、いろいろあって彼は子供の姿に変わってしまった。姿がかわったのは、“悪魔”としての力を失つたせいらしく、あちこちにちらばつたその力を、見つけては回収している。

そんな彼とついこの間まで、あたし達はこの狭いワンルームで、うまくいっているのかいなか、なんとも言いがたい共同生活を送っていた。

ついこの間まで、とこうのも、今のあたし達はたぶん、結構うまくやれていると思うから。

俺はお前のイチバンになりたい。

この言葉をきっかけにして、時に他人よりも冷たかつた彼は、ほんの少しだけ優しくなった。

たぶん。

だけど、前みたいに意地悪されたり、振り回されるのは全然かわらなくて、なんだかあたしの反応を楽しんでるだけなんじゃないかって気もする。

だから、イチバンになりたい、なんて言つても、むこうがあたしをどう思つてるとかはちょっと謎。

だけど、あたしは信じたい。

だって、好きなんだもん。

一緒にいて、嫌な思いもたくさんしたけど、あまり笑わなくて、

どこの悲しそうな瞳をしたあのを、どうしても嫌いになれなかつた。

それどこのか、時間がたつほど、あの瞳が気になつていつた。

こいつのことをどう思つてゐるのか、よくわからない態度に心を引つかき回されて、どんどん後戻りができなくなつて。

一緒にいるのに、あの人のことは、意地悪だつてことと、食べ物の好み以外、ほとんどにもわからない。

それでも、いつかあの瞳の理由がわかつたら、その悲しみをなくしてあげられたら、その時、本当のあの人に会える気がする。

そうしたら、きっともつと好きになる。

だから、彼がイチバンになりたい、つて本当に思つてくれたなら、もしかしたら、いつかは。

でも今は、きっとまだまだそんな日は遠いみたい。

そんなあしたたちの日常は、たとえばこんなふう。

(続)

『桃苑』駅から、歩いて20分くらい。

便利でもなければ、特に不便でもない場所に立つ、小さいアパートがあつた。

入り口には、金のプレートでできた鐘の絵を添えて、飾り文字で“Happy Bell Heights”とある。そのハッピーベルハイツ、303号室にはイソウロウ（居候）がいた。

今日も留守を任せている彼は、まだ小学生くらいの幼い少年だ。その彼は、イライラした口調で電話をしていた。

「だから、どうして断れない？ 兄貴と俺とどっちが大事なんだ？ も・ち・ろ・ん、お前があいつを取るなら俺にも考えが・・・何？ 選べないとお？ いいだろう、覚悟しろ。・・・やだつて、お前・・仲良く？ 無理だ。・・・・しつこいな、わかったわかった、わーかーつた！ 少しは会わせる！ それでいいな？」

結局、相手の言うとおりにするハメになつたようだ。

『やつた、ありがと零さん！』

電話の向こうではしゃいだ若い女は、この部屋の主、レイこと鳴なる神鈴。かみれい

話の内容は、彼女の兄が今日これから泊まりに来るということ。部屋の主であるハズの彼女が、わざわざ居候にその許可を求めているのだ。

そんな事をするのも、居候の態度がヤケにでかいのも、彼女が居候に惚れてしまつていてるせいだ。

とはいえる、決して彼女は危ないお姉さんではない。

今は小さなカラダで、女の子みたいにキレイな顔をして、欠点といえば少々顔色が悪いくらいのこの子供は、元からこうだったワケ

ではない。

そもそも人間ですらない。

自称“悪魔”。

自称とはいえ、それらしい翼や芸当を過去にレイも田の当たりにしていて、ウソとはいきれない。

レイと初めて出会ったとき、彼は異様にひょる長いカラダと、長い黒髪とを持つ、黒ずくめの服を着た不気味な男だった。

青年というには落ち着きすぎていて、中年というには若く見える、その陰気な男にレイは何故か強くひかれた。

それからしばらくして、レイの方から押し切るようにして始まつたこの同居生活を、初めのうち彼は受け入れていなかつた。

ただ、逆らえなかつたのだ。

レイに会うまで、名もないただの“悪魔”だつた彼は、彼女の聞き違いで“零”という名をつけられていた。

二人はそのとき気づかなかつたがそれは、つまり名前を与えることは“悪魔”にとって主従契約を意味していたらしく、それ以降零はレイに逆らえなくなつた。

交渉の余地はあつても、相手の言つことがまるでもう一人の自分の意思のように感じられるため、長い抵抗はできない。

あまりハッキリと彼女に逆らえば、体が動かなくなつたり、ひどい時にはその力、魔力であり生命力を奪われた。

今まで零は、願いを叶える契約を通して、人間をエサにして生きてきた。

その自分が、人間の言いなりになる状況は、彼にとつて受け入れがたかつた。

よつて彼は、ある時レイの使い魔という境遇から抜け出そうとする。

どれだけ自分が恐ろしいかをレイにわからせ、向こうから関係を断ち切ろうとするようしむけたのだ。

結果は失敗で、主人に逆らい、死を意識するほど恐怖を与えた

使い魔は、その力のほとんどを失い、小さな子供の姿に変わってしまった。

生きてはいられたが、悪魔らしいことは何一つできない。

そうなつてしまつては、すさまじく無欲な主人の下で、ただの家政夫として生きるのもやむをえなかつた。

そういううちに、主人のささやかな協力もあり、零はほんのわずかずつ回復していく。

一方、彼から抜き取られた力は、空気とけてみたり、あちこちで小さく固まつてそれぞれ別の魔物となつたりしていた。

零を本体とするなら、彼より生まれ、時に彼の姿を借りるそれは“影”に似ているかもしない。

その“影”たちは、時に自主的に零を探して戻つたり、己が本体だとばかりに敵対したりしながら、結局は零の元へ大なり小なり帰つてきた。

ある程度力が戻ると、それは零の外見にも反映した。

少し成長した今の彼なら、一時的になら元の（大人の）姿に戻ることも、人間を惑わせたり、魔物、たとえば“天使”や他の“悪魔”などと派手なバトルを繰り広げることもできた。

が、家政夫の日常生活にそんなものは必要なく、他の魔物や“影”にでも出会わぬ限り零はただただひたすらめちゃくちゃ態度の悪い家政夫に徹していた。

それというのも、だんだんと、この生活もそんなにイヤじやない、と思い始めたせいだ。

(続)

確かにはじめはイヤイヤだった。

しかし、彼はやがて気づいた。

この生活、この部屋の居心地のよさに。

レイといふ時間の中、ゆるやかにただよつおりあわせ。

それを、いつしか気に入つていたことに。

なら、この生活も、あの女も俺のもの。

そう決めた彼はずうずうしくも主人であるレイに、彼女の“イチバン”になりたいと要求をし、自分の意思でここを居場所と決めたのだった。

一方、レイにしてみれば、願つたり叶つたりというか、どんと来い、である。

何と言つても好きな相手であるし、イチバンになりたい、と言ついていても、いまいち“好き”とは違う感じのする彼の気持ちを、もつと自分に向かせるためには一緒に過ごす時間は多いほうがいい。ましてや、それを彼が望んでくれるならばいうことなしだ。

好かれたい、そう思うがゆえに彼にあまり逆らえず、また、その想いゆえの努力を毎日おこしたらないレイだったが、それが正解かどうかは誰にもわからない。

さて、レイの今までの努力が実つたのか、それでもないのか、彼女に対しては少しだけ気を許している零が、なぜ彼女そつくりのその兄をイヤがるのか。

まず、レイの兄、鳴神御雷^{なるかみみらい}は趣味ではないだろうが、時々女装をする。

過去に零がまだ大人の姿だったとき、レイの彼氏と間違えられ、女装姿の御雷に迫られたことがある。

妹命の兄が、二人を引き裂くつと画策したものだが、原因はそれではない。

女装はよく似合っていたから、零は特に気持ち悪いとも感じなかつたし、気になるほどの事はされていない。

次に、御雷はドアの上に重度のシスコンで、それはそれは入院治療が望ましいほどの悪いっぷりだが、それも理由にはならなかつた。悪魔というのは、心に闇を作りがちな病んだ（毎回女装で妹の彼氏を撃退するのだから、病んでいるのはまちがいなし）人間と相性がいいのである。

ただし、当初気にならなかつたそのシスコンも、レイに對して独占欲が芽生え始めてからの零にとつては、少々ジャマと言えるようになつてきた。

とはいって、それは毛嫌いの理由ではない。

そのうえさらに御雷は、性格がねじまがつた氣分屋だったが、それも悪魔の零にとつては、親しみすら覚えるような要素でしかない。では何がいけないかというと、欠点は妹と同じだった。

うざいである。

今の零は、見た目が可愛らしいとはいって、10歳くらい（に見える）の男の子である。

その零に、べたべたまとわりついてはビザに座らせてみたり、抱きついて寝たりと、ヘンタイじみた可愛がり方を繰り返すのだ。おまけに大抵酔つっていて、飲んだ帰りに寄つたり、レイの家で飲み始めたりと、パターンは違つても、零の知る御雷はいつも飲んでいた。

ピポーンピポーンピポピボピボ――――――――――――――――

そのウザい兄のおでましらし。

さきほどの電話から一時間ほどたつただろうか、ドアチャイムのこの鳴り方は間違いなく御雷だった。

頭のおかしい人間が、この部屋の住人にイヤガラセをしにきた可能性も、限りなく低いが考えられる。

零としては、後者のほうまだマシだ。

主人の兄に危害を加えるのは零にとって危険なことだが、他人な

「うまうまとでも始末できる。

そう、始末してしまえばいい。

御雷もそうできたらどんなにいいか、と思いながら、それが不可能であることを知っている零は、小さく舌打ちする。

どつこらしょ、のリズムで重い重い腰を上げ、零はドアを開けに行く。

ドアが開ききる前に、飛び込む勢いで御雷が入ってくると、零を抱きしめた。

「お待たせつ！俺だよ！！」

「・・・」

「じめーん、零さん。」

ハートつきのセリフを吐く男に、零はウンザリと黙つたまま、後ろにいたレイは苦笑。

そのレイに向かつて、零が訂正する。

「な・ゆ・た」

ハツとして、レイが言いなおす。

「あ、そだ なゆくんだよね！」

ややこしい事だが、大人の状態の零に会つたことがある御雷の前では、コドモの零は、なゆたと名乗つていた。

レイに零だけでもややこしいのに、三人目の“れい”が現れては混乱してしまう。

そして、零としては大人とコドモの零が同じ存在で、かつその姿を自由に切り替えられるなどとは知られたくない。

なぜなら、めんどうかい。

(続)

レイの相手だけでもたびたびウザいのに、悪魔の零を御雷に受け入れさせる手間なんて、考えたくない零だった。

レイ以外の人間とは、深くかかわる気もない。

だから、彼は外でもその偽名を使い続けた。

彼にとって、主人以外の人間は、名を教えるほどの価値もない。

といつより、口笛の状態を楽しんでいるのかもしれなかつた。どうやらのかは、彼にしかわからない。

とにかく、大きくても小さくとも、彼を零と認識

所で、なゆた、とは那由多であり、数の単位の一つだ。

零という名にちなんで、数がらみで本人がどうぞに名づけたもの

見二郎は彼を「ぬ太」と思つてゐた。

「なゆ」がどういう字なのか、とか、苗字はなんなのか、とかは現は御雷は彼を「なぬ力」だと思っていた

あまり気にならぬいりしい。

“なゆ太”を御雷はなゆたんと呼ぶ

御雷は相手の気持ちをあまり気にしない人格だ

「なゆたーん、モニカアイイナーモニにしたやうモニにう。

お兄ちゃん！れ、なぬぐんイヤかーてる！！タメヤーめーで

暴走する御雷を必死で止めるレイだが、止まりきるものでもなか

つた。

互いの力が近づくる

ノイの元鳥

、この無事の運びに感動する。」

押し付けられた。

軽く吸い付かれる感触に、零の無表情な瞳から、さりげに生気が失せていく。

それでも。

「いいんだ、レイ。俺はもう……慣れた。」

御雷が来ると決まつたときから、零は、このくらいの覚悟などとうに決めていた。

すでに儀式化された洗礼だ。

「ううう……」

やせ口をとがらせ、悔しそうになつなるレイの表情には、あたしは良くない、と思つてゐるのがりありと浮かんでいた。
しかし、誰もそれを見ていない。

「モー、おにいちゃん早く入つてよー。いつまで玄関にいんの？」

“儀式”の事は零が受け入れてしまつていて怒れない為、レイは違う理由で兄を叱ることで、とりあえずは氣をまきらわせたようだと、そんなこんなで騒がしく夜は更けていき、次の朝が来た。

「待てよレイ。」

ベッドから零の声がする。

「むり。もう行かないと。」

レイは声のする方を見ようともしない。

「またコレを置いていくつもりか？おいつー。」

「それ以上いわないでっ！お兄ちゃん起きちゃうし、あとよろしくいじめんねー！」

耳をふさぎ、レイはそそくさと出かけた。

「クソッ」

あいつ、だんだんずりずりへこへなりやがる、と思しながら零は姿を霧のように変えた。

そうしておいて、わからぬによつて御雷の腕の中から抜け出す。御雷に捕まつても、彼が寝ていれば、いつじて抜け出すのはカンタンだったが、あえてレイの前では同情を引いて、彼女になんとかさせようとしたのだ。

アテは、はづれてしまった。

毎度のことともいえたが、零としてはヘンタイの兄よりも自分をかばうべきだらう、といつも思っていた。

魔物であり、ヒト操ることなどたやすい零だったが、御雷にはそうできない理由があった。

それができればさつさとお引取り願うことも可能なだが、禁止されているのである。

主人であるレイの不在中も逆らえないくらいに、厳重に。以前、御雷のウザさに殺意を覚えた零が、彼にその力を使ったことがあった。

さすがに、主人の兄を殺してしまったわけにもいかないので、自分の幻を見せたのだ。

幻覚は、本人にしか見えていない。

誰も居ない空間に向かつてパントマイムを始めた御雷のよつすは、零にとつてはオモシロかったが、レイにとつてはかなりのショック映像だったようで、半泣きで止められた。

もう一度と兄におかしな事はしないでくれ、と涙をいっぱいにためた瞳で何度も頼まれた。

以後、零は御雷のなすがままだ。

自分でこの状況に追い込んでおきながら、時々御雷に嫉妬しているらしいレイは、気づいてないだけで相当のMなんじゃないか、と零はひそかに思っている。

なるほど、Sの御雷と仲良しなワケだ、と一人で納得していた。

そんな零は、SだのMだのという分類上において、自分が見下している存在の御雷と同じ場所に位置することを、今のところわかっていないなかつたりもする。

が、とにかく心の中でいくらバカにしていようが、御雷の横暴に逆らえない零の今の状況は変わらなかつた。

逆らえないから、余計に腹が立つ。

表情は何一つ動かさないまま、零は胸の内で一人グチつた。
だいたい、自分の話に耳も貸さなかつたあいつ（レイ）の態度も
気に入らない。

前はもう少ししゃんと謝るとか、すまなそうにしてみせるとか、
このカス（御雷）の相手をするよう頼み込むとかしてきていた。
それが何だ、さつきのアレは。

もしかして、俺がこのクズ（御雷）の相手をするのが当然だと
も思つてゐるんじゃないか？

俺よりもこの「ミミ」（御雷）の方が、あいつの中では順位が上なのかな？
だとしたら。

ここで零は、見たくもないから田をそむけていた御雷の寝顔をに
らみつけた。

油断しきつた寝顔は、よりいつそく妹に似ていて少し憎めない感
じがした。

無意識にふたたび田をそむけた彼は、自分はそのことに気づかなか
かつた、と思うことにした。

「イツは敵なのだ。

ムカつく寝顔だ、と心の中で毒づいてみる。

とにかく、このクソ（御雷）のせいだ氣分はサイアクだ。

零は、なんとか彼に復讐する方法がないか、気晴らしにならむ」と
はないかと、まだ今のところ静かな部屋で考えはじめた。

しばらくして、御雷が気持ちはよく田覚めるこひにせ、零の考えも
すっかりまとまっていた。

「なあ御雷」

目覚めた御雷は、冷蔵庫の中から勝手に出したジュースを飲んで
いたが、零の声に軽く吹いた。

「つ……え？」

零が、自分から御雷に話しかけることなどほとんどない。
おまけに、呼び捨てだ。

しかし、聞き間違いではないらしく、薄い灰色に見える瞳はまつ

すぐ御雷を見ている。

「何だよ、なゆ太。」

手で口元をぬぐいながら御雷が答えた。

「最近、レイがな・・・」

わざとらしく表情をくもらせた零の話に、御雷は身を乗り出して

きた。

(続)

「あたしとしては、お兄ちゃんと零さん、仲良くしてほしいんですけどねー、あ、このお皿さげちゃいますね。」

レイの仕事場は、アルバイトとして働くケーキ店“Renconトルトル”だ。

親しげに話しかけている相手の客は、長い金髪をした、外人と見える青年。

「でも、零くんベタベタされるのキライそだしねえ、難しいんじゃない？」

ふにゃふにゃとした話し方ながら、スラスラ流れる言葉遣いだけを聞くと日本人としか思えない。

「スズキさんも、そう思います？」

「残念だけど。まあ、とりあえずは彼の不満がバクハツしないよう、お兄さんが来たあとはゴキゲンとつてあげるとかしたほうがいいんじゃない？会わせないようにするのが、一番だとは思つけどねー。」

スズキと呼ばれた、どう見ても外人ふうの彼は、やはりふにゃっとしたしゃべり方で答える。

「うーん、ゴキゲンつていつても、甘いものも毎回あくワケじゃないしなあ。」

「食べたくないわけじゃないだろうけど、零くん、基本的に人間キレイだから“人間らしく”なっちゃうのがイヤなんですよ。あ、でもホメてあげるのとか地味にキくんじゃない？いつがーいと調子乗りなんだよね、彼。」

零がどんな姿であつても彼を認識できる、古い知り合いとは、この男だった。

レイよりは零に詳しい彼は、かといって決して多くはない零情報

を駆使してレイにアドバイスをする。

「一人につましくってほしい、というのが彼、スズキのスタンスだ。
「あ、たあしかにい。・・・でか、もちよつと作戦会議したいな
あ、なんて。」

そんな彼を第一の兄のように頼るレイは、ついついオネガイする声になってしまひ。

「あはは、まあ、いじじや話すつていつもきみ仕事中だもんね。
なら、後で僕のバイト先のほうへくる? 夕方にはあがつちやうでしょ
?」

王子様のようにさわやかなスズキの微笑みは、レイ以外の多くの女性を魅了した。

「え、仕事場じや、あたしジャマですよね?」

あくまで、レイ以外だ。

「あ、ヘーキヘーキ。ぜんぜん気にしないよ、みんな優しいから。

優しかろうがそうであるまいが、全然まわりを気にしないのはスズキのほうで、责任感ある仕事仲間にとつては本当に迷惑だったが、レイにそれがわかるわけもなかつた。

「じゃ、お邪魔しちゃいますね!」

「おつけ

笑顔をかわして、作戦会議の約束が成立した。

「じゃ、あとで。」

「はあい!」

数時間後に会つことにして、一人は別れた。

(続)

中古ゲーム・マンガ・CDのプレイブ、と書かれたカンバンをかげた店の前に立つのは、全身黒い服に身を包んだ男の子と、キレイなお姉さん。

「ここにいるワケね？その不審人物は。」

決して低くはなく、聞きよつによつて中性的にも聞こえる声は、女装した御雷のものだ。

「ああ。けつこうレイにまとうりついて、ウゼえんだよな。」
何か思い当たることでもあるよつて、見た目に合わない低く不機嫌な声を出したのは零。

レイと仲のいいズスキに御雷をけしかけて、適當などうで男とバラして笑つてやろう、という計画なのだつた。

もちろん、その目的は御雷にも秘密だが。
御雷に直接、復讐するのは難しい。

でもウサは晴らしたい、といつワケだ。

やつあたり、とも言ひ。

「じや、いきましょうか。」

ふあさつ、つと髪をかきあげて、過剰に女らしく御雷が言つた。
答えることなく、零はニヤリと笑つた。

数歩あるくと、自動ドアが開く。

「つしゃあせー」

うわの空なのこ、なぜか感じ良くな響く男の声が出迎えた。

「いらっしゃいまつせー」

元気のいい女の子の声がおいかける。

カツカツと小気味よい靴音を立てて、御雷がカウンターに近づいていく。

「あつの一づ。」

ありもしない胸を意識させるような、見えそうで見えない絶妙な角度でカラダを傾けつつ、ねちやあつとした甘い声で御雷がカウンターの中にいる男を呼ぶ。

「はーい・・・」

ボンヤリした返事をしながらも、長い金髪の向こうの彼の目は、ゲーム画面に集中している。

動作チェック用の機械で、ゲームを楽しんでいるのだ。

後ろでは、運動不足そうな、これも長髪の青年がそのプレイを応援していた。

店員らしいのにまつたく働いていないカウンター内の一人の代わりに、名札も何も、店員らしいアイテムを身につけていない少女が前に出てきた。

「いらっしゃいませ！なんか探してんスか？」

明るい髪色がよく似合つ元気そうな女の子で、言葉づかにはなつちゃいないが、アイソよくニコニコと話しかけてくる。

零と御雷は彼女を無視した。

「スズキ、おいスズキ！」

零がイライラと呼びかける。

「待って今大事！」

スズキはうるさそうに止める。

「あのう、ダメ・・・ですか？」

どこかで聞いたことがある話し方。

レイに似ている、と認識する前にスズキはそちらを向いていた。

そこに立っている、レイそつくりな女性の姿に彼の手が止まった。

デレレヅデデデンツ

ゲームオーバーらしい音がして、後ろで見ていた男が、ありえねええ、と言いながら奥へ引っ込んだ。

「レイちゃん？・・・じゃ、ないよね」

声が全く違う。

なのに話し方も見た目もそつくりだ。

「レイの姉のお、ミライつていります。」

「あ、・・・そつくり、ですね、僕は・・・」

スズキが名乗ろうとすると、先にミライのほうから彼の名を口にした。

「スズキさん、ですよね？妹から聞いてます。とっても、仲良しだって。」

とっても、とこりあたりに妙に力がこもっていて、少し違和感があつたが、レイにそつくりなミライの笑顔に、釘付けになっているスズキは氣づく余裕などなさそうだった。

その笑顔が妹に比べると「くらか邪悪なことにも、なぜなら零とレイを応援してはいるものの、本当はスズキもレイが好きなのだから。

そのことはレイも零も知っているが、レイは別に気にしていない。スズキが、割り込む気はないと言宣言しているからだ。

零は、そんなスズキとレイがちょくちょく一人だけでいるのが（バイト先で少し話す程度でも）気に入らない。

それなりに整った顔立ちとスタイルで、誰にでも優しくいつも笑顔でいるスズキと、見た目こそ美少年とはいえたまだコドモで、態度はデカいわ意地は悪いわの零では、いつ逆転されるかわかつたもんじゃないのである。

それでも反省することなく、ただスズキを邪魔者だと思っているあたり、救いようがない。

「ところで、どこかでお会いしませんでしたっけ？」

御雷が少し顔を近づけてスズキをのぞきこむ。

以前、女装でないときにチラッと会っているのだが、お互い名乗つてもおらず、御雷にいたつてはヒドい一日酔いで、よく覚えていないのだった。

もちろん、スズキはそのヨッパライと、目の前にいるレイそつくりな女性（？）が同一人物だとは思いもよらない。

不意打ちに頬を赤らめながら、スズキはかすかに首を横に振った。

(
続)

「・・・スズキさんの田ひてえ、すげーキレイですねえー。」
カウンターに身を乗り出して、むりこスズキに顔を近づけ、うつ
とりとした目をしてみせる御雷。

キスを誘っている、ようく見えるのはきっちり計算ずみ。
レイの口真似も忘れない。

その性質は小悪魔なんてカワイイラシイものではなく、悪魔そのも
のだが、残念ながら今のところ御雷は正真正銘、人間だ。
さつきから邪魔をしないように背景と化している零は、何の表情
も浮かべとはいのだが、良いやるよ、とでも思っているふうに
見える。

実際、たしかにそう思っていた彼は、その光景に軽くタメイキを
つく。

自分がしかけた事とはいえ、あんなにハマるスズキがあまりにも
情けないのだ。

面白い光景ではあるし、予想通りでもあるのだが、長い長い腐れ
縁の中で、多少相手を認めていた。

それが、オカマ相手にあのザマでは少々あきれてしまつ。
と、ここで状況にちょっとした変化がおきた。

「ちよっヒアンタ！スズキさんに何してくれてんだよー！」
さつき無視された女の子だ。

せいいつぱいドスをきかせた声を出し、御雷をにらみつけている。

「きやつ、じー、じめんなさい・・・

これっぽっちも気にしちゃいないくせに、縮こまつて見せる御雷
の演技は、やはりなかなかのものだった。

このまま三角関係めいた寸劇を見物するのも面白いが、当初の目
的からはそれてしまつ。

軌道修正すべきか零が考えていると、おだやかでない声をきかつ

け、奥からもう一人の青年が出てきた。

「そーこちゃん、どした？お客さんにそんなクチきいぢやダメつしょ？」

「うつせになー、あつちいけよヒサシーあの女スズキさんにへんなことしようとしたんだよ！」

ヒサシと呼ばれた、オタクっぽいさつきの長髪青年は、女の子、そーこちゃんをなだめようとしている。が、青年のほうがだいぶ年上に見えるのに、全く相手にされいない。

それどころか、そーこ の剣幕に押されてしまい、口をつぐんでしまった。

「ちよつと、ケンカしないで、僕は大丈夫だから、ね？ほら、そーこちゃん、怖い力オしないで、ね？」

「だつてだつて、スズキさんあの女あ！」

「ミライさん、でしょ？ちよつと失礼だよ。」

やはり少々手を貸すべきか、と零は後からわりこんだ二人を排除しようとしたが、ふと妙におとなしい御雷が気になった。見れば彼は、真剣なまなざしで、スズキを見つめていた。

おだやかな笑みを絶やさず、不満を訴える そーこ をやんわりとなだめ続けているスズキを、しばらくながめたあと、突然御雷は言った。

「なゆ太、帰つぞ。」

「何だと？」

低くつぶやいた御雷の声は、男丸出しだったが、幸いスズキはそーこ をなだめていて聞いていなかつたようだつた。

お取り込み中でこちらの様子に気づいていないスズキたちに、さつさと背をむけて御雷は出て行こうとする。

後を追いながら、零は問いただした。

「おい、御雷、どうした？こんなアッサリ引き下がるなんてお前らしくないだろ。」

いつもしつこいと思っているのが遠まわしいにじんでいるが、御雷には云わらない。

「なゆ太はさ、オコチャマだからわかんねーかもしんねーけど、
お兄ちゃんが、さ、マイソナタナビー二郎う。

お兄ちゃん、今日はスヌードだと思ふ。」
零を見下ろして、すこしゆがんだ力オで笑つた御雷は、なんだか

泣きそうに見えた。

その表情は、彼には珍しく邪気のない、妹のために自分の痛みをこらえている、優しい兄そのものだつた。

「・・・キメえ顔。もういい、この役立たず。」

そのキメえ顔を見て、御雷の気が変わらないことを悟った零は、

冷たい言葉を吐き捨て、先に出で行ひつとした。

力なく笑う御雷をおいて。

そんな零の田の前で、彼に反応したわけでもなく店のドアが開く。

「あいつのハゲ」

ちょうど店に入つてくる所で、はちあわせた。

۱۷۰

失敗したとはいえ、スズキに御雷をけしかけた現場で、レイと遭
遇してしまった零。

ちよつとい、ピンチだ。

零の後ろの大問題に、レイが気づく。

「お兄ちゃん」

「あ、レイちゃん、お兄ちゃん……ん?...」

上から、レイ、御雷、スズキ。

ほとんど同時に飛び交ったこれらの声で、彼らは自分に不利に傾いた状況を感じ、零は文字通りその場から姿を消した。

御雷の腕から逃げたときのようだ、姿をかたちを変えたこの場から逃げ出したのだ。

軽い混乱に乗じて。
(続)

直後、今まで そこをなだめていたスズキは、今度は御雷に詰め寄るレイをなだめられいけなくなつた。

その様子と、完璧な御雷の女装を、さつきまで怒つていた そこは興味深そうにながめ、当の御雷は全く反省もせず面倒くせうにレイのお説教をきいている。

一応なだめながらもオロオロしているスズキに、立場もわきまえず御雷が言つ。

「なー、アンタ優しいのもいーケビ、そんだけじゃダメよ? ビンつていくときやいかねーと、さ。」

「あ、ハイ。」

レイの兄といふことで、一応の敬意を払つてゐるのか、納得したのか、スズキは素直な返事を返した。

だが、これにはレイがヒートアップ。

「おーにーいーちゃあああん! 今怒られてるとこでしょー!」
怒鳴るレイに、なぜかスズキが首をすくめて皿をつぶり、御雷はやはり動じない。

「あー、ハイハイ、わり、で何だっけ?」

「こらあー!」

「うーけーるーーきやはははー!」

見ていた そこ が笑い始めた。

スズキが、笑う そこ をたしなめ、御雷は聞いちゃいなくて、レイがさらに怒り、しまいには半泣きになり、そこは笑うのをやめず、なんとなく少し時間がたつたところで、全くまとまらないままレイのお説教は終わつてしまつた。

「モー、いい。モーおにいちゃんと話すのイヤ。疲れた。とにかく、しばらく来ちゃダメだからね!」

「んー、じゃ来週またつてことで。」

答える氣にもなれないレイは、スズキにだけ、作戦会議はまた今度一、と告げ、力ない足取りで去つていった。

「じゃ、俺も自分ち帰るわ。またな、スズキちゃん。」

「あ、はい、また・・・また?!」

「また来ちゃうのか、とさすがに思つたスズキだった。

「またたねー、ミライさん!」

この騒ぎを一人だけ楽しんだ そこには、笑顔で元気にぶんぶん手を振つた。

後ろ姿の御雷が、片手だけをあげてそれにこたえた。

「もー、おにいちゃんたら、全然話きてなくて、ほんとムカつく!」

自分の家に帰つてくると、何も知らないレイは騒ぎをおこした張本人にそうグチつた。

「そうか、俺はただ、仲よくしてくれていると言つただけなんだが、勘違いさせたようだな。」

御雷が零のせいにしなかつたのは、さすがに子供のなゆ太に責任を押し付けるのは気が引けたのか、それとも言い出せなかつただけかわからない。

ともかく、レイには零が黒幕だとはバレていないよつで、それをいいことに零は今回のこと全て御雷の独断、単独犯といふことにした。

当然それがわかるわけもなく、零が彼らしくもなく反省するような口ぶりなのに気づいたレイは、疑うことなく否定した。

「零さんは悪くないよー!いつもおにいちゃんああなんだから!」

悲しいかな、田代の行いが悪い兄はすべての責任をおしつけられ、悪者にされていた。

それを気にする人格でないのが、人としてどうかは別として、このさい幸いといえよう。

「まあ、そんなに責めるなよ。」

さうに零が、零らしくもないことを言つ。

それは、うまく責任をのがれられたことと、ガツカリするほど情けないズスキの姿を見られたという収穫が、どちらも御雷のおかげだつたからだ。

思つたほどには動いてくれなかつたが、これはこれで結果オーライといつてよかつた。

「うん、零さんがそーいうなら、もういいや。」

零の言葉に、少し嬉しそうに笑つたレイには、彼の考えなど全く想像もつかないのだろう。

やつぱり、最近少しずつ優しくなつてるみたい、などと勘違いをしているのは明白だつた。

お互に全く通じ合つていらないものの、とりあえず関係は良好なまま、何事もなかつたように今日もまた、一日が終わつていぐのだった。

2 幼き恋の影

年の頃は、小学校にあがるかあがらぬか、とにかくいる子供たちが数人、公園で遊んでいる。

一人だけ、離れたところにポツンと立っている女の子がいた。遊ぶでもなく、ただ立っている姿は、誰かに見つけてもらいたがつていて、誰かを待つていてるように見えた。

集まつて遊んでいた子供たちのうちの、一人が声をかける。

「ねー、一緒にあそぼ?」

だが、女の子の答えは、つれない。

「いい、ユウちゃんカレシいるから。」

どうみても一人、仲間に入れないよう見えるだけの彼女に、優しい男の子はさらに声をかける。

「じゃーカレシ来るまで一緒にあそぼ?」

自分のことをユウちゃんと呼んだ女の子は、少し考えてから、言った。

「ちよつとだけなら、

いーよ?」

よく晴れた空の下、公園の遊具を中心にして、小鳥のさえずりのように、はしゃいだ高い声がいくつも重なり合つ。

やがて、日は傾き、その色を変え始めた。

じゃあ、帰る、と一人が言つと、あたしも、ぼくも、とみんなが解散する雰囲気になる。

「ユウちゃんも、かーえる。」

女の子がそう言つと、最初に声をかけてきた男の子が、思い出したように話し始める。

「あー、ぼく、『ワい話、思い出した。』

まだ本題には入っていないのにこれだけで他の子供たちはキャーキャーと悲鳴をあげ始めた。

「UJの公園、夜になるとオバケでるんだってー！」

中華書局影印

耳に突き刺さる悲鳴をあげ、みんな散り散りに走っていく。

残ったのはユウちゃん、話をした本人、それからもう一人、女

まだ夜じゃないからセーフなのに。

オバケの話をした男の子は、一気に人数が減つて寂しそうにしていたが、気を取り直すと、残った女の子二人に向かつて言った。

「ハヤカウチ送つてあげるー!手をつないでかえろ?」

女の子たちは、安心して彼の手をとる。

男の子の将来はナンバ船がもじれない……

れようとしていた。

その一角に造られた“みんなの森”は、そこからさらに濃い闇をはきだしているかのように、まわりよりもいつも暗く、木々がその影を落としていた。

子供たちは気づかなかつた。

深夜。

町は静まり返り、時折、風向きの加減か、少し離れた大きな道路を通る車の音が聞こえてくるくらいだ。

ほんほんと間隔をあけて立、街燈が照らすだけの薄暗い道を、男が歩いていた。

ほろ酔い加減のその男は、自宅へと帰る途中だつた。

ウサギ立派な男。

体がほてつてダルく、どこかで休んでいきたい気がした。タイミングよく、ちょうど公園の前にさしかかっている。

ここでいいか。

公園の少し奥、ベンチに腰掛けるといぐらか体がラクになった。それにしてもいい酒だった、と、彼は楽しかった今日の出来事を思い出す。

知らず、にやにやと表情に出してしまっていた。

「楽しそうだね。」

子供の声がした。

「うわっ！」

ベンチの空いたスペース、自分の隣に青白い顔をした子供が座つて、自分をのぞきこんでいる。

黒い服は、夜の景色の中では保護色のように周りに溶けてしまい、まるで生首に話しかけられたように思えた。

その生首のような顔がぼんやり光って見えるのは、肌の異様な白色のせいか。

けれど、目が光っているのは、

「なんだ・・・

「お前、あっちいけ！」

人間じゃない！

「どうしたの？」

おじさん・・・笑つてよ。

「楽しいんでしょ？」

ぐつと顔を近づける子供に、男は恐ろしさから動くことはもちろん目をそらすこともできない。

「・・・ふふ。

「いいよ、

怖がるキモチはオイシイ。

もつと、もつとちょうどいい。」

言つている意味がわからない。

光る瞳から目をそらすことも、まぶたを閉じることもできない。紫色の、光、ひかり、ヒカリが頭の中を焼きつくす・・・。

つわああああああ

(
続)

今日も公園に、女の子はいた。
カレシを待っていた。

急に会えなくなってしまった、大好きな人。

「なゆ、なんで公園こなくなっちゃったのかな。」

きれいな顔をして、体の弱そうな彼は、なゆたと名乗った。
一度だけ、彼の家に遊びにいったことがあった。

けれど、そこへ向かう間も彼と話すのに夢中だった彼女は、その詳しい場所を覚えていなかつた。

もしも彼女がそれを覚えていたとして、訪ねれば彼は喜ぶでもなく、ただ彼女の記憶を消してしまうだけだろう。

彼女、ユウちゃんは、自分の待っている相手が魔物であることを知らない。

けれど、来ない人を待ち続ける日々よりは、忘れてしまったほうが幸せかもしけなかつた。

「ユ・・・ちゃん」

不意に聞こえてきた遠い声は、男の子。

「なゆ？」

ユウちゃんは、大好きな人の姿を探す。

けれど、そこにやつてきたのは昨日一緒に遊んだ男の子だつた。

「はあ、はつ・・・

何してんの？」

公園の外から走ってきた彼は、やや息を弾ませながら言った。

「カレシ待つてるつていつたじyan！」

がつかりした彼女は、ついキツい言い方になる。

「ダメだよ、ここ、ホントにオバケでるんだよ！ぼくたちと一緒に違うとこであそぼ？」

「なにそれ。明るいからヘーキだよ…」

「コウちゃんは男の子の誘いをつっぱねる。

「だって、オバケみておかしくなっちゃった男の人が入院したんだってよ？」

「男の人ってだれ？」

「知らないひとだけど、

ホントだよ！」

学校の先生がいつてたもん。」

学校の先生が、生徒にそんな話をするわけはない。

が、彼は忘れ物を取りにいった時に、先生同士の立ち話をたまたま耳にしてしまった。

先生がウソをいうはずはない。

じゃあ今日はほかの場所で遊ぼうよ、という話になり、みんなで歩いていたところコウちゃんを見かけ、声をかけたのである。

公園の外では、彼のトモダチが怖々公園の中をうかがっている。

「やだ。

「コウちゃんないかない。」

言つたあと、彼女はどんなに男の子が説得しても、首をタテに動かすことはなく、男の子は他の友達に呼ばれるまま、なごりおしそうに去つていつた。

ずっと、ずっと彼女は待つていた。

友達の誘いも断つて、たつた一人、来る日も来る日も。

オバケのウワサのせいだ、誰もいなくなつた公園にたつた一人ぽつんと立つ姿は、まるでとり付かれたようだ。

公園の幽霊を見ると発狂する

光る子供の生首が飛んでくる

公園の前を歩いていたサラリーマンが幽霊に襲われた

発狂・・・入院・・・廃人に・・・

死にはしないものの、日常生活すらままならないほどに精神を破壊されてしまつた犠牲者が、数日おきに一人、二人と増えるたび、ウワサは町全体へと広がっていく。

(続)

「コウちゃんの母親も、当然自分の娘が心配になつた。まさかあの公園で遊んでいやしないか、と。

「ううん、行つてないよ。」

「コウちゃんはウソをついたが、彼女の母親は自分の望んだ答えに疑問を持つことをしなかつた。

「そう、暗くなくても

そんな危ないとこころに

行つちゃダメだからね?」

「うん!」

そうして彼女は、今日も公園にいる。

オバケが怖くない

わけではない。

けれど、昼間の明るいうちならきっと大丈夫だと思つていた。どうしてもどうしても、また、なゆたに会いたかった。ただ立っているのもタイクツになり、ブランコに座つて、少しやらしてみる。

ゆらゆら、ゆらゆら。

とん。

背中に何かがあたり、ブランコが大きく揺れる。

「え?」

自分以外いなかつたハズの公園で、何が背中を押したのだらつ、と振り返る。

影が立つていて、よう見えたのは一瞬。

「なゆ!」

上下とも黒い服に身をつつみ、太陽の似合わない青白い顔をして、ずっと会いたかった彼は、唐突にそこにいた。

「これ、

わいと楽し〜んでしょ？

わ〜とゆ〜わなきや。」

ずわ〜。

彼の言葉に逆らおうとしたわけではないが、コウちゃんは地面に足をつけ、ブランコを止めた。

もちろん、彼の顔を見て話すため。

「なゆ、あのね〜、

コウちゃん んね〜・・・！」

嬉しくてたまらないコウちゃんに、なゆたが優しく笑いかけた。
何か言ひでもなく、鎌に手をかけると、コウちゃんの乗っている
ブランコのあいたところに片足をのせ、もう片方の足で地面を蹴つ
た。

止めよ〜りとするコウちゃんなどまるで無視して、一人をのせたブ
ランコは空く向かつて飛ばよ〜りするよ〜りに動いた。

「わやー ああ… あはははー。」

急に速く、大きく動いたブランコに一瞬悲鳴をあげたあと、体全
体に感じる風や、流れては戻る景色に、コウちゃんは楽しくなつて
笑い出す。

なゆた も、楽しそうな声を出す。

「あつはははー！

ああ、気持ちいいな！

…ほら、も〜と高く、いくよー。」

「キモチ〜〜ね〜〜え、

あはははは〜〜！」

風、景色、スピード感、コウちゃんの“キモチいい”はブランコ
で遊ぶ」と言つていた。

なゆた の“気持ちいい”は、別の理由。

彼はコウちゃんがあふれさせる“楽しい”、といつ気持ちを味つ
て快感を得ていた。

「ねえ、なゆ次はオーバー！それで、那次は、んと、かくれ

んぱしょりーー」

「ん。」

低く、けれど機嫌よく答えた彼の声をコウちゃんの笑い声がかき消していく。

「きやあははははっわやーーー！」

「ふふふ・・・あははは」

軽やかな笑い声がまつたく彼らしくなことにして、小さなコウちゃんは気づかない。

ただ、大好きな彼と再会できた喜び、そしてその彼と思い切り遊び楽しむに心を奪われていた。

(続)

「……つてこといらしてえ。あの公園の前は、通らなくとも帰つてこられるんだけど、やつぱ暗くなると怖いし。あの、おむかえ、とか」

「バス」

レイの部屋で、零とレイが話している。

公園にオバケが出て怖いから、迎えに来て欲しい、といつハナシだ。

「やつぱり・・・うう。」

レイのオネガイを、零が即

却下し、彼女はしょんぼりうなだれる。

零が小さくなつてからといつもの、いろんなところに散らばつた彼の一部、“影”が起こす怪異のせいでの、怖い事件やウワサが、レイのまわりには絶えない。

そのせいで、もう何度もレイは零に“おむかえ”をオネガイしていた。

原因是彼自身であるの、彼はその責任をとるだけでなく平然と彼女の要求を却下してしまう。

それはいつも命令のカタチをしておらず、よつて却下も簡単だつた。

彼女は彼女で、元をたどれば零が悪いのだ、といつ事実に気づいていない。

だから、却下されるとおとなしく引き下がり、また何かが起こればダメもとで泣きつづく、といつことを繰り返していた。

はーあ、

とタメ息をついて雑誌をめぐり始めたレイの隣で、零は幽霊のウワサについて考えていた。

発狂・・・前に俺の一部がひとり歩きした時も、犠牲者は恐怖に支配された心そのものを喰られて、狂ったとか廃人になつたとか言われていた。

なら、今度も。

「コウちゃん、コウちゃんが笑うとボクも楽しい。だから、もつと笑つて？ね、遊ぼう？」

なゆた が楽しそうに、綺麗な顔で笑う。

「でも・・・コウちゃんもつ

暗いから、帰らないと・・・。」

暗くなるまでに帰つてきなさい

というのが

彼女の母親のいつけで、

今現在、日は沈みかけていた。

「暗いから？

何で帰らないといけないの？

夜のほうが楽しいよ！

真つ暗で、涼しくて、

昼間なんてダルいし、

明るくてつまんないよ。」

「ママに、怒られるから。」

「なにそれ。」

不思議そうな顔で、なゆた がたずねる。

「怒られる」と、どうなるの？

「いわいの・・・

泣いちゃうかも。」

コウちゃんの顔が暗くなり、
うなだれる。

「ヤなの？」

「うん、そう。」

「怒られるのイヤだから、帰りたいの？」

怒られる、ということが」のなゆた には解らな「つで、本
氣でそれをきいていた。

「そーだよー、あたつまえ！」

「・・・じゃあ、

いいよ、帰つて。バイバイ。」

寂しそうに なゆた がそう言つて、胸のあたりで手を小ちく振
る。

「あしたね、なゆ。」

そんな顔をされると、ユウちゃんも悲しくなつて、元気にバイバ
イとは言えない。

せめて明日の約束を、と口に出すと、なゆた が表情を輝かせた。
「明日、また来てくれるの？絶対？」

「うん、ぜつたい。

「ぜつたいね。」

ゆびきり、といつて小指を差し出すと、なゆた は指切りを知ら
ないようだつた。

小指と小指をつないで、約束をして、次の日に手をつないで公
園の外を走り回つて遊んだ。

「なゆ、手えつないでこー！」

ユウちゃんが差し出した手を、なゆた は握る。

「つめたいねー、さむいの？」

ふるふると、なゆた は首をふる。

やわらかそうな黒髪が、その動きにあわせて揺れた。

冷たい彼の手を、ユウちゃんはもう片方の手で、軽くなだた。

「さむかったら、ユウちゃんがあつたかくしてあげるねー。」

「別に、平気。」

寒い、とか暑いとか、そんなことは彼にとってなんの障害にもな
らなかつたし、感覚として感じはするものの、気にしてなどいなか
つた。

暑くても寒くとも、
どうでもいい。

ただ、握った手の小ささ、やわらかさと、同時に感じじゆの温か
さは、ひどく大切に思えた。
(続)

「走るとあつたかくなるって、学校の先生が言つてた、走ろ！」

「うん。」

言いながら走り出したコウちゃんに手を引かれ、彼も走った。
きやあきやあと、すぐ前を走るコウちゃんが笑つている。
彼女から流れ出していく“楽しい”という感情と、自分に対する
好意を、なゆたは植物が日光をあびるように、吸収する。
満足感と、幸福としかいじよつのない感覚が彼を満たす。
とても、心地がいい。

「ねえ、コウちゃん。」

「きやはは、あははつ

なに？アハハハ！」

手をつないで走るだけでも楽しいのか、彼女は笑うのをやめない
ままふりむく。

「大好き」

子供にしては、落ち着いた笑顔をうかべながらおだやかに、なゆ
たは言った。

「コウちゃんもー、

なゆダイスキー！

きやーあはははははー！」

照れて、大声をあげながらも、
いつそう楽しそうに

彼女が笑つた。

これが欲しかつた。

ずっと、独り占めしたかつたんだ。

なゆ、と呼ばれる彼は思つ。

彼は、なゆた本人ではない。

なゆた本人、零かかつて失つた力の一部、“影”だ。

彼が、彼としての意識をもつ前から、コウちゃんの声は聞こえていた。

なゆ、なゆ、もう一度、会いたいよ。

くり返し心の中で、つぶやき、訴え、叫ぶ声。

会いたいという切なさは、彼女からあふれ出し、彼はそれを食べた。

そうして育ってきた彼は、いつしかハッキリとした意識を持つて彼女を見つめるようになる。

呼ばれているのは、自分であるような気がして。

あのこはボクを呼んでる。

ボクを必要としてる。

ボクも、

あのこのそばにいたい。

けれど、日の光の下に出ようとすると、強い光が、淡い影でしかない彼を打ち消してしまおうとする。

逆に、夜は動きやすく、たまたま彼が動き回るとここに出てくる人間がもらしていく恐怖感は彼の存在を濃く、強くするためのいい養分になつた。

彼がみずから人間に近づくと、さらにたくさんの恐怖が生まれては、彼の中に流れ込み、そのうちに彼は人間のような体を保てるようになつた。

入り込んでくるだけの恐怖を、今度はしだいに彼のほうから吸い込むようになった。

吸えるだけ吸つてしまつと、対象はまるでダシガラのように入力スカになり、そこにはただ生きているだけの意志すらない物体が残された。

放つておいて、日が昇り明るくなると、誰かが来て、時には何人の人間が大騒ぎをしながらそれを片付ける。

白い「うるさい」車が、赤い光をチカチカさせながら来ることもあつた。

何度もそんなことをするひつが、彼の体は日光に耐えるほど強くなつた。

最初のうちは、けれどあまり動き回ることはできなかつた。

彼は、夜の狩りを続けた。

他の子供たちのように、彼女に声をかけるために。
見知らぬ男児がしたように、彼女と手をつなぐために。
彼以外と、彼女が手をつなぐことがなくなるように、と。
そして今、ながめるだけだつた笑顔は、彼だけのものだつた。
とりあえず、彼女が外で遊んでいるあいだは。

彼女の笑顔、彼女の“楽しい”気持ちは、夜の狩りで得る恐怖の
感情よりもずっと彼にとつて質のよい養分になつた。
彼女のくれるものは何もかも、一番で、特別だつた。
だから、ずっと一緒にいたい。

なのに、夕方になると彼女は言つのだ。

「帰らなきや。」

「行かないでよ。」

「『めんね、またあしたね。』

そんなやりとりの何度もかに、彼女は約束を破ることになる。
その日、ユウちゃんは学校の友人と遊んでいた。

本当は公園にいきたかったが、友人たちがちつとも一緒に遊ばなくなつたユウちゃんを仲間はずれにする、と言つ出したのである。
ただし、今日一緒に来るなら許す、と。

友達がないのはイヤだし、最近の優しいなゆたなら、きっつと次の日があやまれば許してくれるだろう、と彼女は思つていた。

(続)

「零さん・・・何ソレ・・・」

レイが呆けた声でたずねた。

「大盛り。」

「や・・・にしても

ちょっと盛りすぎ

じゃ、ないかな・・・それ」

キッチンから零が運んできた2人前のハズのスペゲティ。
それは片方だけ異様な量が盛られており、少しでも振動を感じし
ょうものなら、ただちに大崩壊を起こしそうに見えた。

その異様なスペゲティを絶妙なバランス感覚で運んでくると、零
はそれを自分のほうへ置いた。

成長期ってことなのかな、と

レイは思つたが、怒られそうなので言わない。

がつがつ、がつがつ。

いつもと同じ無表情、無言で零がスペゲティをほおばる。
その動きはイライラとせわしなく、あわただしい。

「何か、急いでるの?」

「零さん。」

「・・・別に。」

せかせか、がつがつ、せかせかがつがつ・・・。

子供の体には多すぎる量のスペゲティが、みるみるうちに減つて
いく。

「ヤケ食いみたい。」

イライラと大量の食事をたいらげる彼を見ての、素直な感想に意
外な反応が返ってくる。

「正解。」

「え・・・」

一言だけで答えると、零はまた続きを口に運び出す。
とても人間くさい行動が意外
すぎて、レイはポカンとして
しまう。

そうなりながらも、もりもり
食べている彼を見ていると、
なんだかすごくおなががすいて
いる気がしてきて、自分の分に
手をつけた。

零の作る食事は、特別うまくもマズくもなく、実はレイ自身が作
るもののはうがおいしい。

それでも、彼が作ってくれたというだけでレイにとってはゴチソ
ウだ。

だから、彼女はその本当は大しておいしくもない食事を、おいし
い、と思いながら食べる。

「ん、今日のもおいしー。ねえ零さん、なんでヤケ食いなんかし
てんの？」

「イライラしてるから。」

それはそうだろうが、いつも場合はそのイライラの原因を答え
るべきだろう。

零は、答えをばぐらかしていた。

なぜなら、説明が面倒だから。

だが、レイのウザさはそんなことではしまかせない。

「なんで？」

きょとんとした顔で、彼女はつっこんでくる。

答えずに零は、残り少なくなってきたスペゲティを口につめこむ。
無視されて、やつと、レイはきいちゃいけない事だったのかな、
などと考え始めた。

彼女がまだ三分の一も食べないうちに零は食器を片付け始め、冷

蔵庫からなにか出してくる。

「チヨコレートプリン……。」

可愛いーー。こう言葉をのみこんで、レイは彼が出してきたもののが前をつけやく。

確かに子供がプリン食べる姿は可愛らしいのかもしれないが、とんでもない量のスペゲティを一気食いしたあとにプリン、というはそれにあてはまるのだろうか。

その後、彼はさらにミルクプリンにイチゴプリンにマンゴープリンを、冷蔵庫から出しては食べ続けた。

ただ、最後のマンゴープリンは失敗だったようで、一口食べるとスプーンがとまつた。

「あれ? どうしたの? おいしくない、とか?」

レイの言葉に、やや渋い表情をして無言でうなづく彼。

「あの、いらないんだつたら……それ、ほしーなー……。」

やはり無言のまま、彼がプリンをレイのまづく押しあつた。

「やつたあー。」

レイはマンゴープリンがキレイではなかつたし、零の食べかけといつのも実はちょっと魅力だった。

子供のように、たかがそのくらいのことではしゃぐ彼女を、ホンモノの子供にしか見えない零は少しあきれた目で見る。

「ところど、なんで普通のプリンは買わなかつたの? 売り切れ?」

「好きじゃないんだ。」

じゃあなんでわざわざプリン買つたのかなー、と思うが、機嫌をそこねたくないのにシッコまないでおいたレイだった。

(続)

食後、落ち着きを取り戻した零は、イライラの原因について考えていた。

あの公園にはコウがいる。

コウがいること 자체は、なんの問題もない。
顔をあわせたなら、ついでに自分に関する記憶を消してしまえばいい。

問題なのは、零の記憶のほうだった。

自分を好きになったコウを、零はもてあそぼうとして、その行動がレイを悲しませた。

少し見せ付けて、からかうだけのつもりが、本当に気まずくなってしまった。

冷たくしても、すぐに笑顔を取り戻すから、突き放していられたのに。

彼女はいつも、元氣でいなければならない。

零は、知らず知らずそれを望んでいる。

元気のないレイは、零の気持ちを暗くさせる。

その反応は、願望は、無意識。

自分のことをいつも全て正確に把握できる存在など、人であれ魔物であれ、居はない。

いつも元気なレイを、そうでなくさせてしまった、失敗の記憶にまつわる場所が、あの公園だった。

当然、コウの顔もいまさら見たくはない。

あの時のこととは、あまり思い出したくない。

それでも、影を回収するにはいくしかない。

気が重いのをまぎらわせるためのヤケ食いで、一応の気持ちの整理はついた。

そこでなぜヤケ食いを選んだのかは、零自身にもさうとわからぬが。

テレビドラマをみながら、もじょもじょとマンガープロンをぱくつこて、レイにチラッと目をやる。

零が影を回収してしまえば、もう帰り道で彼女がおびえることもない。

これで、つむぐへ迎えをせがむことも、しばりへまなくなるだろう。

零の目に気づいたレイが、微笑みかけてきた。

当然の態度に、いちいち反応する必要はない。

零はただ視線をはずした。

次の日、コウちゃんの思つていた通り、なゆたは公園で待つていてくれた。

「なゆー！」

手を振りながら、駆け寄るコウちゃん。

いつもなら、むじうからも近づいてくれるのに、なゆたは動こうともしない。

ただ暗い顔をして立っている彼に、コウちゃんはとにかく謝った。「ごめんね、なゆ、コウちゃんほんとは昨日もなゆと・・・」「ウソツキ。」

今まで聞いたこともないくらいつめたいなゆたの声に、周り中の空気が凍るのを、コウちゃんは感じた。

身動きも、イイワケもできない、そんな気がする。

絶対的な絶望が、この場を支配していた。

これまではずっと、優しく自分にそそがれていたハズの視線が、今はただ怖い。

嫌いだとか、怒つてるとか、そんなものではない。いふなれば、殺氣。

何をされるかわからない恐怖で、コウちゃんは身動きができずに

いた。

「あう・・・あ・・・」

ほとんど声にならない声をしほりだすのがやつとで、何もいえなくなつてこるコウちゃんに、なゆたが自分の方からやわらかに近づいてきた。

くつついでしまつくらいに体を近づけ、なゆたはコウちゃんの頭を両手でおさえた。

顔が近すぎて、田と田が合つたまま、そらすこともできない。

「ウソツキ、ウソツキ、ボクずっと待つてた、ずっとずっと待つてたのに、コウちゃんウソついた。」

怖い、元、悲しそうなその声に、コウちゃんはあわれみを覚えた。

彼のことが、ダイスキだったから。

「『めんね、なゆ』

恐怖を一瞬だけおしのけて、彼への謝罪がもれる。

「だめ。約束しても、守つてくれないなら、もうどうにもいかないで。」

恐怖と、裏切った後悔、彼の悲しみを思ひ気持ちが、涙となつてコウちゃんの目にあふれる。

「『め・・・こるよ? コウちゃんこるよ、なゆとこつしょい』
「ずっと一緒に、いて?」

威圧しながらも、哀願する響きと共に、なゆたの瞳に、瞬間の明るさの中でもわかるほど、強い光がはじけた。

(続)

「 もやあつ 」

「 ゴウちゃんの小さな悲鳴。 」

「 大丈夫、大丈夫だよ、ゴウちゃん、もづづつと、ボクがそばにいるから。 」

かくん、ヒザからぐずれおちたゴウちゃんを抱きとめ、まるで感情など感じられない声で、なゆたが言った。

ゴウちゃんは答えない。

かといって、死んでしまつたところのでもない。

ただ、何も言わず、虚空中に視線をなげかける彼女は、もう行つたりはしない。

行こうと思つことが、できないからだ。

彼女には意思が、心がなくなつていた。

「 ゴウちゃん、ボクのゴウちゃん。ボクだけのゴウちゃん! 」
欲しかつたオモチャを手に入れた、キラキラした子供の顔で笑いながら、なゆた

はゴウちゃんのカラダを抱きしめる。

もうどこにも行かない彼女を。

ウソを言つこともない彼女を。

笑うことのない、彼女を。

「 ・・・ そうだ、遊ぼう? まだブランコ乗るつよー。 」

ゴウちゃんは何も答えない。

手をつないで、連れて行こうとするが、血の動くことができない

彼女はひきずられる形になる。

ずざざあ・・・

「 あれ・・・? そうか、歩けなくなつたやつたのか。じゃあ、だつー。あはは、赤ちゃんみたいだよ? あははは・・・ 」

「 ブランコにはありえない腕力で、ゴウちゃんのカラダを樂々と抱き

上げ、はしゃぎながら なゆたはブランコのまくへ駆け出す。

ブランコに彼女をのせ、鎌を握りせると、一緒にのってやうした。

グラ・・・・じさつ

すぐに、彼女の体は地面に投げ出された。

「コウちゃん！ダメだよつかまらないと、ほら、ね？」

もう一度、なゆたは彼女をブランコに座らせる。

「じゃあいくよ？」

じさつ。

同じことの繰り返しだった。

今の彼女は人形と同じで、自分で何かをするといつことができない。

当然ブランコから落ちなによりに、姿勢を維持することができなかつた。

そして、投げ出されたからといって、受身をとることもない。

「あ・・・ケガしちゃった・・・ごめんね、ごめんねコウちゃん！」

！」

人間でない なゆた には、いつこうとも思ひうしたらここのかはわからない。

けれど、ケガが痛いのはなんとなくわかる。

倒れたまま起き上がろうともしないコウちゃんが、ついすら顔をゆがめた。

痛いのだろう。

「ごめんね、ごめん・・・」

抱き起こし、そのままコウちゃんを抱えて、なゆたは痛みをまぎらわそうとするように、そのカラダを前後に揺らす。

すりむいたビザから、血が垂れて赤い線を描く。

「ごめんね、コウちゃん、もうブランコやめようね。次なにがしたい？」

聞かなくても、いつも次に何をするかきめてくれるのがコウちゃんだった。

今は、何もいわない。

「ユウちゃん、どうしたい？ ねえこっち見て？」

手で彼女の顔を、自分のほうにむける。

目は合っているのに、こっちを見てくれているとは思えない。どこも見ていない瞳。

「ユウちゃん？ ボクだよ？ なゆ。 ねえ、こっち見て？」

「・・・」

そろそろ、笑っているのも限界だつた。

苛立ちに眉を寄せ、なゆたの語気が荒くなる。

「なんだよ！ 何でこっち見ないんだよ！ 笑えよ！ つまんないよう！ ユウちゃん、ねえユウちゃん！ キライになるぞ！ いいの？ ユウちゃん！」

おどしても、なだめてもユウちゃんは何も言わない。

怒っていたなゆたの表情は、もう泣く寸前だ。

何を訴えても、この場で彼が泣いたとしても、心を失くしたユウちゃんには何も伝わらない。

彼女の心は、それを誰にも渡したくないと望んだ彼が、彼自身が喰らい、奪つてしまつたのだから。

なゆたは、自分のした事、その意味を理解していなかつた。

何も言わない、眉一つ動かすことのない彼女のヌケガラ。

「いいよ・・・それでも。もう、どこにも・・・行かないんだよね？」

静かにつぶやいて、そつとなゆたはユウちゃんをだきしめた。ずつとそうするうちに暗くなり、夜になると公園には何度も大人がやってきて、ユウちゃんを見つけて連れて行こうとした。

そのたびに、なゆたは人間の心操るその力を使って、大人たちを追い払い、ユウちゃんの事を忘れさせた。

ただ親切で探しにきただけの近所の住人と違い、両親の記憶をゆがめるのにはかなりの力が必要だったが、ユウちゃんを渡すくらいなら、なゆたは自分が消えてしまつてもいいと思っていた。

自分は、彼女のためだけに存在するのだから。
(続)

「あつちいこり、コウちゃん。ボクのいた森。ジャマな大人が来て見つかりにくいし、居心地もいいんだよ。」

そう言つてコウちゃんを抱き、公園の奥の森へつれていこうとした。なゆたに、声をかけるものがあった。

「みーつけた、つてな。」

光る目で、なゆたが振り向く。

「ム、ダ、だ。」

動じることもなくそこには立っているのは、彼と同じ姿をした少年、零。

「お前は・・・ボク?」

「俺がホンモノ。」

言つたと同時に、すごい速さで何かが自分の方へ伸びてくるのを感じとり、ホンモノではない方の、いわば二セなゆたはコウちゃんごと身をかわす。

「ウモリのそれと似たカタチをした黒い翼が、今まで彼の居た場所を突き刺していた。

「なにっ?」

「大人しく俺の体に戻るか、惨殺されるか。選ばせてやるよ。」

余裕たっぷりに、零が言つた。

選ばせるのは、できれば大人しく戻つて欲しいからだ。

そのほうが、無駄なく相手をエネルギーとして吸収できるからである。

自分と同じ姿に動搖するほど、零の感覚は人間的ではない。

「やだ・・・ボクは、コウちゃんといふんだ。」

零をにらむ二セなゆたの目が光り、彼はそつとコウちゃんを地面にねかせる。

「・・・俺のクセにあんまり頭の悪い事を言つた。もともとコウが好きなのは本体の俺だぞ?だから大人しく戻」

呆れた声を出す零に、叫びながらニセなゆた が飛び掛る。

「ちがーうつ! 「ウちゃんはボクを! ボクは、ボクのほうがコウちゃんを好きだ!」

ニセなゆた が零に馬乗りになり、零は背中を地面に打ちつけながらもニヤ、と笑う。

零の背から伸びた黒い翼が、いつのまにか左右から交差し、ニヤなゆた の首にあてがわれていた。

力タチも、大きさも、硬度でさえも自在な零の翼は、このまま、彼の首をギロチンのようにねることなど造作もない。

もちろん、何の感情もなく。

「じゃ、このまま死ぬか?」

ただ相手の表情を楽しむために、零はそう聞いた。

怒りか、死への恐怖か、はたまた敗北への悔しさか。

ゆがんだ顔は、そのどれでもなさそうでいて、けれど零を喜ばせた。

「くくくうううした? いい顔じゃないか・・・怖いのか? 喜べ、とつても・・・痛くしてやる。」

下品なくらいに興奮を隠さない表情で笑い、声音にも愉悦の色がありありと出でている。

久々に悪魔らしく相手を殺すこと、少々酔つているのかもしない。

「怖いんじゃない・・・わかんないのか? ボクのくせに。」

零にはわからない何かの感情でゆがんでいる、ニセなゆた の表情に、さらにくやしさがにじむ。

涙が、彼の目から零の頬に落ちた。

「何だよ・・・」

その感触のせいか、上がっていた零のテンションは落ちてしまい、ニセなゆた の言葉のその先を待つ。

「悲しいんだ、・・・。コウちゃん、・・バイバイなのが。」

「はあ？」

零の日の前にいるのは、もうただの泣いている子供だった。

「うへ。。。うええんつ、えつ、ええ——ん。」

自分がもし泣いたら、こんなみつともない顔になるのかと冷静に観察する零。

ウルサイし面倒だから、話すのせいでくんじて、わざわざ殺してしまおつ、と思ひ。

二セなゆた の細い首に、あらためて左右から翼が襲い掛かるうとした瞬間、彼が泣き声の間から最後の一言をつぶやいた。

——女やんこめんね
ないで

首と股がはなれ 人間めいた血しぶきを
言ひ継がらないうちは

九
九

すべて空氣に散っていく前に急いでそれを取り込んだ零だったが、エネルギーは期待したほど多くは残っていなかつた。

それでも、ユウちゃんへの強い想いは、零にも充分感じられた。

それは、消

それは、消えてしまつたあの一セなゆた が、ホンモノの零に、
コウちゃんが本当に好きだつた彼にそれを伝えたいと願つたからな
のかもしれない。

「ちつ・・・いらぬいモンばかり残していきやがつて・・・」

その場には、
ユウちゃんも残されていた。

が又ケガテにしてしまつた、心のない体。

急に、レイの顔が見たくなる。

なぜそう思うのかは、彼自身にもよくわからない。

「この場にゴウちゃんを置いていくのが少しためらわれるので、一

せなゆた のせいたと見当かついたけれど
だから零はコウちやんをおいて、レイの待つ部屋へ帰る。

自分の意思は、自分のもので、零にとってはコウちゃんなどなんの価値もない。

帰ってきた零を、おかえりなさい、と迎えたレイには、今日何があつたか詳しい事情が話されることはない。

何も話さなくても、彼女はだいたいいつでも笑顔で零をむかえてくれる。

その笑顔に、自分でも知らないうちに安心している零は、必要のないこと、自分に不都合なことを絶対彼女に話さない。

一緒に遊んだことのある女の子を、夜の公園に放置してきた、なんてレイが怒るに違いないような事を、彼が話すはずもなかつた。翌日、零が公園を訪れてみるとそこにコウちゃんの姿はなく、かといって警察や救急車がきている様子もないところを見ると、彼女は無事に家に戻ったのかも知れなかつた。

記憶を操作したニセなゆた がいなくなつたことで、コウちゃんのことを思い出した両親が彼女を探して連れ戻したとも考えられた。そうだとしても、一度食われてしまつた彼女の心までは戻らないだろう。

ちくりと胸をさしたのは、ニセなゆた の想いだろうか。
まだ自分に同化しきつていないので、と零はうつとうしさだけを感じた。

その後、公園で犠牲者ができることはなくなり、飽きっぽい子供たちの興味も他に移つてしまつた。

“幽霊”のウワサはすぐに忘れ去られ、しばらくして公園には子供たちが戻ってきた。

けれどその中に、コウちゃんの姿はない。

3 コ・ア・ク・マ

零から出て行ってしまった彼の力は、たとえ一度別の存在として独立しようとも、また取り込んでしまえばキレイに彼に溶け込み、自己主張することはなかつた。

今までは。

今回だけは、違うようだ。

夜の公園にたたずむ零は、思った。

彼の“影”、一セのなゆたと、ユウちゃん」と田中優奈が出会った場所だ。

優奈に執着していたのは影のほうだけで、零にとってみれば彼女が生きようが死のうが、どうだっていい。

しかし今、彼は公園にいる。

零の中の一セなゆたが、優奈を恋しがっているに違ひなかつた。その力が、零のものにならなかつたわけでも、別の意思としてはつきり残つているわけでもない。

ただ、ついこの間まで存在しなかつた優奈の居場所が、零の心に急に生まれた。

零が、自分の意思でない何かを感じたのは、今日だけではない。眠りにおちる瞬間、優奈の声がきこえた気がしたり、気づくと彼女を思い出していたり。

このところずっと、一日に一度は彼女を思う瞬間があつた。

この前再会するまで、優奈のことをほとんど忘れかけていた零だ。そんなに彼女が気になるわけがなかつた。

その、優奈を気にする部分、彼女の居場所、それこそが零ではない、彼になじまないモノなのだ。

それは、彼の中のほんのわずかな部分でしかなく、意識すれば難なくおさえこめる程度だ。

今日はうつかり流されてしまったが、こんな抵抗はそう長く続か

ないだろ？。

ここに用などない、と帰る？として零は、誰もいなかつたハズの公園に気配を認めた。

それが、なんでもない普通の人間のものであれば、見つかぬよう姿を消していた。

しかし、その気配は、狂おしく何かを求めていた。

探つて感じた気配ではないから、何を求めているかまではわからなかつたが、心当たりはある。

これは、田中優奈の親だろ？。

この公園で、精神に何らかの異常をきたした（ほとんどは自我を失つた）状態で見つかった人間は、何人もいた。
その中でも、田中優奈は一番新しい被害者であり、また、唯一おさない子供だつた。

彼女が変わり果てた姿で発見された現場に、強い感情を持つて訪れるとすれば、一番可能性が高いのはその親だ。

理不尽な悲劇に対するその感情は、怒りか、悲しみか、その両方が。

人が何かを思つとき、そこにはその思いの強さに応じて力が生まれる。

その思いの“力”を扱うすべを、多くの人間は知らない。

放つておけば、ただ空氣に溶けていつてしまうだけのその力が、何かのきっかけで特定の場所に濃くよどんだり、死者の強い思いを核として寄り集まつたとき、零たちのような魔物が生まれる。

彼らは、人の思いを力とし、時にその命をも糧とする。

そして零は今、優奈の親の命は取らないまでも、会つたついでにその感情を吸い取つてやろうと考えた。

相手が持つているであろう、明るいはずのない感情は、零たち“悪魔”と呼ばれる種類の魔物には良い養分であり、五感を通さず味わう美酒だ。

癒しとなり、活力となり、高揚感を生み、時に何ともいえない快

感を持つて彼らを酔わせることができる。

心が壊れない程度に、吸い取れるだけ優奈への感情を吸い取つた
ら、娘が生きていれば良かつた、と想つようであきらめの暗
示をかけ、帰らせつむりだった。

零は。

幽靈さわぎに巻き込まれては、この町にも住みづらくなる。
これで、おしまいた。

簡単にそう考えていただけの彼は、自分の中の“まつろわぬモノ”
を忘れていた。

忘れていた、というより、軽視するあまり意識すらしていなかつ
たと言ひほづが正確だ。

すぐに、それを後悔したが。

カラダを氣体に変え、獲物を包み込みながら感情をあおり、より
多く引き出して喰つてやろうと思つたのだが、形態をえる前に力
ラダが勝手に動き出した。

「ん

自分の体の思ひぬ動作に、小さな声がもれる。
三十代前半くらいと思われる女が、そこにいた。
優奈の面影がある、母親だ。

近づいていこうとするカラダを、もつ見つかってしまつてはいたが、
とりあえず意識して止める。

たいした抵抗もなく、主導権はすぐ戻つてきた。

夜の、誰もいなければの公園をうるつく顔色の悪い子供が、どう
見えるか。

相手が誰でも、この場所にうつこつカワサガもともとなかつたと
しても、答えは同じだらう。

優奈の母は、零を幽靈と思つたようだつた。

心持ち、目を見開き、顔をひきつらせて凍り付いている。
幽靈と思ったなら、それでもいいか、と零は思った。

要は、相手が何らかの感情を持つてくれさえすればいいのだ。

それが明るいものでなければ、憎しみでも、悲しみでも、恐怖で

も。
(続)

俺が、怖いか？

零はそう訊こうとしたが、またもやカラダが彼を裏切る。口走ったのは、全く違う言葉だった。

「おばさん、ボク、幽霊じゃないよ。」

本当のところ、この公園でウワサになっていた幽霊とは二セなゆたに他ならず、この弁解をした本人だった。

大ウソだ。

それが見抜けるハズもないが、“おばさん”と呼ばれた優奈の母親は、その言葉を無視し、意を決した表情でこういった。

「優奈を、あの口を元に戻して！」

公園の幽霊のウワサが本当なら、自分の目の前にいるのが、娘をあんなふうにしてしまった相手だ。

優奈の母親は、今まで普通に生活してきた人間を、一晩にして、正確には一瞬で廃人にしてしまう“幽霊”と、対決する覚悟を決めたようだった。

この言葉に、優奈を誰よりも大事に思っていた二セなゆたが、どう反応するのか零にはわからない。

零は誰かを大事だと思ったことも、それを失ったこともないからだ。

あの時のように、不様に泣くのだろうか、と少し不安になる。自分のほんの一部だとはいえ、少しでも本気で泣いている所など誰にも見られたくない。

だからといって、零は二セなゆたの行動を止めるつもりはなかった。

どうなるかわからないからこそ、見てみたいと思ったのだ。

自分にすらわからない、もう一人の自分を。

間違いなく自分の一部でありながら、全く理解できない、だから

予測もできない。

特別な契約をしたわけでもない、たかがそのへんの子供一人に全存在をかけて執着するようなことなど、理解できるはずもない。

悪魔でありながら、人の心を奪つたことを後悔し、最後は許しを請うた。

気に入つたのだから、悪魔なのだから、人の心を奪い、喰らうことに後ろめたさなど感じる必要はない。

自分のものになつたハズの、その心が、失われたと感じるのは、あまりに人間的だ。

だが、ニセなゆたはユウちゃんの心を奪つた事を後悔し、それが失われた事を悲しんでいた。

それは、愛するものを失つた人間の反応によく似ていた。

その一方で、他の人間をためらいなくエサとしてむさぼり、害した。

命を取らなかつたのは、単にそのやり方がよくわからなかつただけだろう。

“本体”である零の記憶すらない、まるで生まれたての魔物だったのだから。

優奈に対する、人間的過ぎる反応。

他に対する、悪魔らしい反応。

それが自然に共存する、ニセなゆた。

もう一人の自分。

人から生まれた魔物が、人に似た部分を持つのは一見当たり前のようだが、ニセなゆたが優奈に見せたような反応は、“悪魔”という種にはありえないものだつた。

“悪魔”は、気に入つた人間を喰つた後に、満足することはあっても、悲しんだりはしない。

彼らの天敵とも言える“天使”ならば、自然なことだらうが。

時に“天使”であり時に“悪魔”。

まるで、人そのものだ。

予想のつかない“自分”的可能性。
それを、零は見ておきたかった。
見てみたかった。
無性に。

(続)

自分を突き動かす、この興味がどこからくるのか、彼にはわからない。

あるいは、これもニセなゆた のせいなのかもしれない。
そうだとしても、見たいものは見たいのだ。

優奈の名を出されても、“彼”は泣かなかつた。

淡い喜びと、静かで確かな存在感を持つた悲しみとが、胸ににじみ出す。

ニセなゆた のものだ。

零にはまだ、ニセなゆた の意思は見えない。

「ねえ、連れて行つてボクを。コウちゃんのところに。」

優奈の母の瞳を見つめ、ニセなゆた が力を注ぐ。

思い通りに動かすために。

だがやはり、未熟だ。

ただの人間に暗示をかけるのに、必要以上の無駄なエネルギーを使いすぎている。

“悪魔”の視線は、目が合えばそれだけで正常な判断を邪魔するくらいの力は持っている。

実体を持つ零くらいの“悪魔”になると、念じれば相手の精神を破壊することもたやすい。

感情や思考が密集し、凝縮された存在である零たちは、精神的な世界において不可能はほほない。

そして、人間と精神は切り離して存在できない。
死しても、なお。

いや、死してしまえば、なおさら。

感じる心がある限り、“悪魔”的影響を受けないでいることは不可能だ。

いま零の目の前にいるのは、もっとも影響を受けやすい“おシア

ワセに生きてきた普通の人間”。

軽く思うだけで、相手は言いなりになるハズだ。

それを、ニセなゆたは全力で操ろいとしている。

りきみすぎだ。

さすがにそれは止めた。

余裕は出てきていても、まだ以前と比べれば弱すぎるほど弱い自分

分の力を、そう無駄遣いされてはたまらない。

すぐに止めさせたものの、元々そんなにチカラのいいことでもなかつたから、優奈の母はもうすっかり催眠状態になっていた。

「そう、ね・・・優奈、に・・・会って、あげて?」

見舞いにきた友人とでも思わせたのか、優奈の母はそう言ひて、ふらふらと歩き始めた。

カラダをゆすりながら、夢遊病者のよつにふらふら、ふらふらと。危なつかしい彼女の手を、零が、ニセなゆたが握った。

「おばさん、手えついでこ。」

一コリ、と可愛らしく笑つた彼は、もうすぐ優奈に会える期待に胸をおどらせていた。

それだけなら、零はすぐに意識を全て自分に戻していただけ。

彼はニセなゆたを見守り続けた。

だんだんと大きくなつていく期待、そこへ時折 寄せる、とても静かな、ひどく冷たい波を。

それは寂しさ、と思えた。

この先が、わかつた気がした。

それは、多少のわずらわしさを零にもたらすのだろう。

それでも、見逃してやる気になれた。

いつのまにか、少しづつ理解できるようになつてきていた。

わからなかつたハズのニセなゆたの考え、気持ち、その行動の

理由。

“悪魔”にとつて意味のないそれを、打ち消す氣にはならなかつた。

バカバカしいのに、否定しようとは思えない。

この世に未練を持った死者たちは、思い通りにさせ、その未練を消してやることで残った存在のほぼ100%を力として吸収することができた。

逆に、力ずくで吸収しようとムリに存在を壊してしまえば、取り込める力はその一割にすら満たない時がある。

合意の上かそうでないかで変わる、エネルギーの吸収率は、生きている人間相手でもだいたい同じだ。

たいていの場合、最後は死ぬのだし。

だから“悪魔”は契約をする。

相手を壊す過程を好むモノ以外は。

もつとも、零がうつかり結んでしまった人間との主従契約は、かなり特殊でこの限りではないが。

ともかく零は、この無意味な願いを叶えてやろうと思つた。

自分の中にありながら、ひとつになりきれぬ二セなゆたの、その未練をなくしてやれば、おそらく完全に自分になじむだろう。やりたいように、やらせてやる。

二セなゆたが自分の一部なら、その願望も、自分のものと思つてやつてもいい、そんなことすら考えていた。

(続)

眠る優奈は、今にも口を開けてうつとうつと泣き声をうだつた。

顔色もよく、どことこって異常はなさそうに見える。

「ゴハンは、ちゃんと食べてくれるし、お風呂もなんかも、つれていくてあげれば一人で入るの。……でもね、笑つて、くれないのよ。ワガママも、言ってくれないの。優奈……コウちゃん、ママ、コウちゃんのワガママも大好きよ。コウちゃん、コウちゃん……！」

優奈の友達が来たと思い込んでいた母親は、そう言つて泣き崩れた。

今の優奈は、ただ生きているだけだ。

エネルギーが供給される限り、機械が正常に動き続けるのと同じこと。

動いていても、感情はない。

反射的に、なすべきことをしているだけだ。

零と、二セなゆたは同じ瞳を通して彼女を見下ろし、それぞれに別のことと思っていた。

零は、彼女を想う二セなゆたを思つていた。

痛みと、それ以上に大きな、何か別の……不愉快に胸をざわつかせる感情。

どこか懐かしいのに、不快で、それでいてどうしようもなく、魅力的な。

そして、二セなゆたは。

「コウちゃん……ちょっとだけ、久しぶり。だよね？」

赤味がかつた、細くつややかな優奈の髪に、青白い指が触れる。静かに眠っている彼女の前髪を、少し整えてやる。

部屋には低い、押し殺した母親の泣き声以外に音はない。

「おばさん、ちょっと外でて？」

声が気に障ったわけでもないだろうが、二セなゆたが母親に優しく声をかける。

正常な判断のできなくなつてゐる母親は、得体の知れない魔物を残して、娘の部屋から出た。

トン、と小さく音を立ててドアが閉まるといつくり、おだやかに、二セなゆたは優奈に話しかける。

「・・・ねえ、コウちゃん。ボク、今日ね・・・・・バイバイ、しに来たんだ。コウちゃんをママのところに、返してあげるね。おおいかぶさるようにトンの上から優奈を抱いて、頬をすりよせむ。

「ひれで、元通りだから・・・バイバイだよ、コウちゃん・・・バイバイ・・・」

自分の意思でない言葉がつむぎだされるにつれ、カラダから力が抜けるのを零は感じていた。

二セなゆたが、奪つた心を優奈に戻しているのだらう。氣をつけていなければ感じない程度の、軽いめまいに似た感覚。全て返せば、二セなゆたは消え、優奈は元の優奈に戻れる。

二セなゆたは、彼女の心をそつくりそのまま、喰うといつよりは自分の中に大にしまつておいたりしかつた。

バカだな、“我”ながら。

少し笑いたくなりながらも、とつさに零は行動を起こした。

もうこのカラダを動かす力もない二セなゆたが、完全に消える前に。

「コウ！俺だ、わかるか？！」

耳のすぐそばで聞こえた声に、とじていた優奈のまぶたが、ピクリと動いて、うつすらと開く。

なによりも近くで、零の瞳がそれを映す。

「なゆ・・・？」

寝起きの、甘ったるい小さな声。

口元は、微笑みかけて。

どうやら間に合つたらしく。

あたりが明るくなつた感じがして、胸にはあたたかさと、心地いいくすぐつたさが広がる。

世界を変えるほどの幸福感は、しかし一瞬で消えた。

バイバイじゃない、俺は、“俺”が、ここにいる。

そう思いながら、一方であやうく出かけた、大好きといつも零は飲み込んだ。

(続)

もちろん、本人の言葉ではないからだ。

パツチリと目をさました優奈は、目の前に大好きな なゆた の姿を見つけると、はしゃいだ声を出した。

「なゆー…どしたの？ なんでウチにいんの？」

それから、一瞬黙り込む。

「あ・・・・ごめんね！ もう、怒ってない？」

最後に会った彼を思い出したらしく、顔を半分フトンに隠しながら、不安げに零の顔色をうかがう。

そして、目が合った瞬間、優奈はまぶしさに目を細めてから、不思議そうな表情に変わった。

「・・・なゆ・・・なゆ、今までビ」 いつてたの？ 「ウ ちやんずつと待つてたんだよ？！」

急に不満を訴えだす優奈は、もう二セなゆた の記憶を持つていな

ない。

本人ともども、永遠に眠つたのだ。

これから優奈と付き合つていいく上で、あの二セモノのベタ甘な言動の記憶は、零にとって大変ツゴウが悪かつた。

「言わなかつたか？ 僕は、体が弱いんだ、コウ。だから、ちょっと入院してた。」

この場合、彼の顔色はむちやくちや説得力があつた。

「えーー！ だいじょーぶー？！」

すっかり信じて心配そつにする優奈に、零は罪作りな笑みをくれる。

「ああ。」

「この肌の白さは本当に便利だ、そつ思つての笑みだが、あいにく優奈にはわからない。」

病弱に見えるから、会いたくないときは寝込んでるとか言えればいい

い。

実は、使いなれているテだつた。

「そつかあ、よかつたあ。」

優奈も笑う。

一セなゆた を受け入れた零は、もつ以前のようこそその笑顔を不快とは思わない。

「なあユウ、今は夜だから、もう寝ろよ。」

ひととおり丸く収まったことだし、正直これ以上優奈の相手をするのが面倒になつた零に、誰が彼女を起こしたのかとツツ 口む人間がここにはいなかつた。

「えなゆ帰んの？」

優奈は不満顔だ。

「夜だからな。」

零は、零だからその表情を意にも介さず、答える。

「やだやだあ！ もつといで？」

「だーめだ、またな？」

面倒くささを隠すことさえしない、声と顔。

「えーだつて久しぶりなんだよ？」

ワガママ少女は、そのくらいではあきらめてくれない。

これの、どこが良かつたんだ。

そう思つて、軽いデジヤヴを感じる零。

なんだ、この感じ・・・。

ほええ、と氣の抜けた音が聞こえて来そうなほど油断した、見慣れた笑顔を思い出しかけて反射的にそれを頭から追い出す。

考えるだけで、疲れてしまいそุดから。

そんなことより、いまは目の前にある面倒をなんとかしなければならない。

「キライになるぞ。」

とりあえず脅迫する、“悪魔”零。

かといって、ただ今は面倒になつてきただけで、もう顔を見るの

もイヤといつわけではない。

そのうち、日を改めてなら相手をしてやる気でいた。

もつとも、からかつたり、悪知恵を入れたりしながら俺色に染めて、立派な悪女つてやつに仕上げてやろう、などと考えているのだが。

「やだ…じゃ明日、明日あそぼ?」

困った顔で優奈が妥協案を出す。

「明日、はムリだな」

面倒だから、と零は心の中で後半付け足す。

「じゃあさつて!」

「そのうち。」

「えええー!」

納得できるハズもないテキトー回答に、ユウちゃん大ブーリング。

そこに、少し大きめの零の声がかぶる。

「今寝るならーおやすみのちゅーしてやる。」

「寝る!」

即答した優奈は、おませさんだ。

「寝るんだから、目^ヒ閉じる。」

零の言葉に、素直に応じて目を閉じる。

気のせいみたいに軽い、冷たい感触。

すぐに優奈は目を開けてしまう。

部屋には、もう誰もいない。

「なゆ?」

声をかけても、答えはなく、幻覚とも思える不確かな体験。

それでも、唇に手を触れ、優奈は嬉しそうに微笑むと今度こそ本当に眠りに付いた。

次の日、何事もなかつたように起きてきた優奈に両親は目ん玉飛び出させて驚き、学校に行ってみれば長い間休んでいたと聞かされ、心配していたみんなにズイブン歓迎された。

公園で転んで、頭でも打つてしまつたのだろう、とこいつことにな

つた。

優奈にとっては、妙に記憶がとんでいて、それがどこからかもア
イマイで変な感じだったが、そう言われてみればそういう事のよう
な気もした。

(続)

「どうしてえ・・・？」

帰宅したレイは、部屋にいた一人を見てつぶやいた。

「こんなの、こんなの、き・い・て・なあーーーいーーー！」

叫ぶ彼女を、零と優奈が見上げていた。

「ちょっと零さん！約束違うじゃんもう会わないと言わなかつたあ？！」

確かにその通りだ。

自分を好きになつた優奈を、零がただレイにヤキモチをやかせるためだけに利用した事に、レイは心を痛めた。

そんなレイに負けて、零はもう優奈と会わないと自分から約束していたのに。

その零は、悪びれもせず言った。

「な・ゆ・た、だろ。それからな、約束は確かにしたが、事情が変わつた。」

「なにそれ。」

すっかりイライラしちゃつてじるレイは、呼び間違えたことを謝らず、多少挑発的に先を聞こうとした。

イイワケできるならしてみなさい、という所だ。

ふふん、と笑うと零は優奈に顔をむけた。

二人の後ろでは、テレビアニメが流れている。

「なあユウ、俺に彼女がいるって知ってるだろ？」

これで、相手を一方的にもてあそぶという状況ではなくなる。

「えつ、零さ？！」

言われた優奈より先に、レイが驚きの声をあげた。

それって、誰のこと？

「うん、でもユウちゃんアイジンだからーーのーちゃあはははーー」

すかさず可愛らしく、無邪氣な声をあげる優奈。

「だ、そうだ。どうする？ レイ」

「コドモらしくない影のある、たぐらみ顔で零がニヤリと笑つた。

「え、・・・ええー？ そ、それでいいのぉ コウちゃんあん？」

泣きそつた困り顔でききながら、その彼女つてあたしかな？ あたしだつてのかな？ と、喜びと不安のいりまじる疑問がレイの胸をぐるぐる渦巻いた。

そんな彼女をよそに、コウちゃんの無邪氣な笑顔は変わらない。

「うん！ だつて“りやくだつ”しちゃうから。コウちゃんのみょく でえ、なゆ奪っちやうんだもん！」

遠足の予定でも話す顔で、楽しそうに優奈はそう言つた。

「ええ？ エエー！ エー・・・」

「くつくつく・・・」

大人のくせに何もいえないレイを見ている零が、抑えきれない忍び笑いをもらした。

「あたし、負けないからね。」

小さくレイがつぶやくと、零は意地悪く冷たい目で彼女を見る。

「ふーん？」

「あ、え？ あー違くて、彼女とか思つてるんじゃなくて、立候補で！ あのつ、ちがつ」

気まずい視線に、レイはあわててイイワケした。

あつという間に立場逆転だ。

勘違いだったかな、と落ち込むレイ。

そこへ、優奈が追い討ちした。

「レイちゃんはさあ、同じ年のオトコ見つけたほうがいいよ？」

ヨゴーな得意顔で、上からおつしゃる。

「レイちゃん・・・オトコ・・・」

レイは、ワガママ少女の真の姿を見せ付けられ、これがガチの勝負なのだとやつと気づいた。

勝つても負けても恨みつこなし（でもきっとコウちゃんは頼む）

で、血の雨を降らす戦いなのだと。

相手のことを考えてたら、まちがいなく（零を）持つてかれてしまつ・・・！

決意も新たに握りこぶしを固め、とつあえず今は唇を噛み締めて耐えるレイなのだつた。

「なんか・・・暑っ苦しいぞお前。で、コウ、送つていくから、帰る準備しろ。」

あきれた顔でレイに投げかけた後、優奈にはいくらか優しい声を出す。

一人が見ていたアニメも、ちょうど終わっていた。

「え、行っちゃうんだつたらあたしもついてく！」

あわてて付いてこようとするレイを、零が振り返る。

「じゃ、一緒に遊んでるときもずっと付いてくるつもりか？」

「う・・・・むり、だけどお！」

「ウザい。クドい。ここにいる。」

あまりの冷たい言葉につづり傷つき、レイは少し泣きたくなつた。

「いこひ、なゆ。」

支度を終えた優奈が、零の腕に自分の腕をからませた。

「んんんうーーーーー！」

くやしくて、ついレイはうなつてしまつ。

田をうるませて、顔もほのかに赤い。

「はー。・・・・バカ。」

タメイキをつけ、小さくつぶやくと、いつときますも言わずに零は出て行つた。

一人部屋に残されると、レイはベッドにダイブし、枕に顔を押し付けながら両手をグーにしてばんばんとマットを殴る。

「・・・・じつちがバカだあ！あー！もーー零さんこそ、ばかばかばかあ！」

激怒しながらも、さん付けなあたりが永遠に負け決定のレイだつ

た。

4 オトナ、とか「アラモード」とか。

後になつて思えば、前日

「ひないだコウちゃんに言つてた“彼女”つてえ、もしかして、やつぱり・・・あたしだつたり・・する?」

期待をおわえきれない顔で訊いてきたレイに、テンション激低で

「は?」

と、返したのも、無関係とはいえないのかも知れない。

いつも家にいる零を氣づかう、とこうよりレイはただデートがしたいだけだった。

「ねえ零さん、あした映画みにこいつ、映画。」

情報誌を手に、レイはつわつかせした表情をしていた。

「あ?」

それに対して、零は声のトーンで小さくウンザリしてこることをアピールするだけだ。

「これこれー、あたしこれ見たくて、ちよつと付合つてしまいなーつて。でえ、できればその後一緒に買い物とかー、ね?」

ここで遠慮するのなら、最初から話しかけないほうがマシだ、とレイはさらにおねだりをくりだす。

零の方には、使い魔の契約によりじわじわと義務感が生まれ始めていた。

淡いそれは、従わなければ落ち着かないものの、無視しても影響はない。

というのも、レイの言葉は決定を相手にまかせたもので、どう聞いても命令には聞こえないからだ。

命令であったとしても、すぐに零は撤回させてしまつたりするが、その交渉は、多少の精神力を必要とするものの、反抗にはならないうで、特に不利益は生じなかつた。

「」の場合もそうだ。

「気が進まない。あきらめろ。」

交渉というよりは、逆に「」からのが命令しきる。

「えー、とりあえずほら見て見て、」れー！」

すぐ隣にくつつくと、レイは雑誌を零の手のまえに持つてくれる。零の小さな舌打ち。

「近い近い、・・・ん？」れは・・・おい、」れちこじる。これなら見に行く。」

「・・・え？ マジで？ ・・・って、えー？」れえ？」

一瞬喜んだものの、零の指差すタイトルを見て、驚きつつあきれ声を出すレイ。

そのレイに、ああ、と答えた零の顔が真剣だったため、洪々“それ”を見に行くことにしたのだが。

次の日、レイが起きると零の姿はなかつた。

ボーゼンとし、考える。

デートすっぽかされた？

いやいやいや、だつて自分で見に行きたって言つた映画だし。でも、油断させておいて、とかの人ならやる氣がする。えー、超ショックなんですけどお。

てかやつぱあたしの事なんか全然、なんとも思つてなかつたんだあ。

零さんにとってめんどくさいんだ、めんどくさいんだあたし。ぐるぐると悲観的なことを考え、レイが泣き出しかけたころ、玄関のドアが開く音がした。

白い顔がのぞく。

「零さん！」

ベッドから玄関へ駆けだす。

「な・ゆ・た。」

軽く迷惑そうな顔をした零のつじひとは、なぜかコウちやんがい

た。

「ねはよーレイちゃん、ねー髪の毛くじらことかせばあへやせば、アタマはねてる」

「ふーつ、ひちひつ、えつ?ー! 今日、ビしたの……からかわれたのに気づく余裕もなく、レイはカミカミで質問するのが精一杯だつた。

「今日はあ、なゆとトートーおーきやーつ、せやねはー。自分の声よりさらに高こコウちゃんの声が、寝起きのレイの耳にキンキン響いた。

「データって、なゆくと、そつなの?..」

「データは、あたしと同じやないの?..」

とは思つたが、状況からして間違いない。

間違いないが、抗議の意味をこめてレイはきいてみた。

「やうだな。それから、学校のことは心配ない。担任には、俺からよく言つておいた。」

やういえば今日は平日なのだが、どうもコウちゃんを学校から連れ出してきたらしい。

零の言つて、よく言つておいた、とほ多分、暗示をかけてコウちゃんがいると思いつ込まれたとか、まあつまり“やういつ”ことだらう。ところことはレイの今日の役割は、コウちゃんと零の保護者になることだ。

データじやない上、子供をつれて電車で映画館へ行つて、きっとお金も自分も。

文句を言おうとしたレイを、零が制した。

「コウも好きなんだよ、”アンパンジャー”」

(続)

菓子パンソルジャー・アンパンジャーとは、アンパンマスクをかぶった日曜朝10時のヒーローで、子供に大人気だ。

マスクについたアンパンから飛び出す、パン屋で働く恋人馬多美の作った失敗作”激マズあんこ”を武器に、必ず虫歯になる菓子で世界制服をもぐるむ悪の菓子メーカーと戦うのだ！やれ、いけ、あんぱーんじやーああああ！

…零はその勸善懲惡のストーリーよりも、超天然という設定の恋人、馬多美の一挙一動が主人公アンパンジャーを結果的に追い詰めるさまが楽しみでほほ欠かさず見ている。

ちなみに、アンパンジャーの変身前はイケメン俳優 松平剣一（愛称はマツケン）で、お母さんたちに人気があり、当然のように馬多美を演じる宮垣あかねは（お母さんたちは）不人気だった。

「レイちゃんがつれてつてくれるんでしょー？ありがとう。」

恋敵とはいえ、小さな子供に笑顔で言われては、ひっこみがつかないレイだった。

「そ、そうだね、じゃ準備するから待つてね」

なんとか笑顔を作ると、コウちゃんと零からトドメの一撃が投げつけられた。

「はやくしてねー。」

「あがれよ、コウ。どうせあいつ支度おそいから。」

どちらもくやしかつたが、化粧をしているときに興味深そうにのぞきこんできたコウちゃんは、妹みたいで可愛かつたりもした。

レイは、子供が好きだった。

しかし、お姉さんとして接するといつよりは、同化して仲良く遊んじゃう系だった。

そんな彼女が、アンパンジャー劇場版「最悪！ねりあんこハミガキ計画！」を、楽しく見ることができたのは、決してその子供っぽ

さだけが原因ではない。

「アンパンジャーの人すごいカッコいいー！」

胸元をおさえてレイが悶えた。

「ダメーー！マツケンはユウちゃんとケッコンすんだからーー！」
映画館から出てきた時には、レイはすっかりマツケンファンになつてしまっていた。

興奮してきやあきやあ言った後、一人はふと零の反応が気になり、彼のほうを見る。

前を歩いていた零は、急に静かになった後ろを振り返る。
ユウちゃんとレイが自分を見ていた。

彼女たちの会話を思い出しているのか、一瞬だけ間を空けてから、零は二人に答えをくれてやる。

「・・・勝手に奪い合つてろ。行くぞ。」

その冷たく、彼らしい態度にレイは諦め顔で笑う。

「あは、だよねえ。」

「えー！なゆもユウちゃんをマツケンとうばい合つんでしょーー！」
さすがにワガママ少女はそれでは納得しない。

100%自分の願望を零にたたき付け、恋人然として彼の腕にからみついた。

そんなユウちゃんの馴れ馴れしい態度が、零の機嫌をそこねやしないかと、レイは心配そうにそれを見守る。

それでユウちゃんと零が気まずくなれば、レイには都合がいいハズなのだが、ユウちゃんが悲しい思いをする方がよっぽど心配なのが、レイの性格だった。

「なんでだよ。」

零はただそう言つただけで、特に怒つてはいない。

それに安心するレイは、これ以上ないくらい奪い合ひという状況に向いていない。

それでも、さうにワガママをいいつつ零にくつこっているユウちゃんは気になる。

「うらやましさを隠しきれない眼差しで、一人を見つめるのだった。

(続)

レイのちょっとしたストレスは、実はじつかり零に向ひっていた。

何せ彼は、“悪魔”だ。

不安と、嫉妬。

どちらも“悪魔”的な良い養分だ。

ついでに、嫉妬の原因がささいであればあるほど、レイが自分に執着していることが感じられて、零は気分がよかつた。

その後レンタルショットでDVD（過去のアンパンジャー作品）を借りる時も、家まで帰る間も、帰り着いてからも、ユウちゃんは零にベッタリだったが、零はそれを放つておいた。

レイも大人だったから、表面上は何事もないかのように、ユウちゃんと仲良くしていた。

彼女が帰るまで、きちんと。

「ゆーう、そろそろ帰れ。」

暗くなり始める時間帯になり、零はユウちゃんにそう言った。

「おうちまで送ってくれるなら帰るーう。」

はい、またワガママ始まりましたー。

口には出さず、零は思つた。

レイも、そんな顔をしていた。

「コウ、そういうワガママはダメだ。」

珍しくマトモなお説教らしき言葉を口にした零を、レイが少し驚いた目で見つめる。

「えー、コウちゃんワガマジやないもーん。」

「ワガママだ。」

零の言葉に、レイが小さくうんうんとうなづく。

「いいかコウ、いつも言つてゐだろ？相手に言つことを聞かせたかつたら、可愛く“おねだり”するんだ。できるな？

続いたセリフに、レイの表情がいぶかしげなものに変わる。

「いつも？」

レイの疑問に、答える者はいない。

「あ、そつか。レベルの高い愛人は“おねだり”がうまくないと
いけないんだもんね。」

コウちゃんの言葉を聞いて、レイの表情はさらに曇っていく。

「ああ、そうじやないと“彼女”に負けるわ

？」

「うん、とうなずくと、コウちゃんは一瞬きりとした表情を見せ
た。

レイはあんぐりと口を開け、間抜け全開の表情を浮かべる。

「コウちゃん、ストーカーとか怖いしい、ビリしても なゆに
送つてほしいの一。」

カラダをクネクネさせ、困ったふりをしてみせるコウちゃんに、
零が心なしか満足げな顔でうなずいた。

「そうだ、か弱いフリはいろんな場面で使えるからな、普段から
積極的に出していけ。それが、良い練習になる。」

「うん、コウちゃんりっぱな悪女になつて、なゆに好きつて言わ
せるからね！」

「ふふ、じゃつまくできた『ホウビ』に今日は送つてやる。次から
一人で帰れよ？」

ぱかーんと口を開けたまま、動けずにいるレイを放置で、零とコ
ウちゃんは部屋を後にした。

「なに『ホーチ』しちやつてんの・・・零さん・・・」

一人残されたレイは、小さな声でつぶやいた。

(続)

ふだんより少しつつとうしさが増していく気がしたが、そのまままでレイに変わったところはなかった。

圧迫感を感じて、零は目を覚ます。

レイがいた。

上から、零の顔をのぞきこんでいる。

憎らしげに自分を見る暗い表情は、とても彼女とは思えない。

彼女は、自分の隣で寝ている。

しかし、今ベッドの横に立つて零の顔をのぞきこんでいるのも、レイだ。

これは生靈、と呼ばれるものだ。

強い思いに支配されて、無意識に憎い相手や、愛しい相手のものへ精神だけがさまよい出してしまったりするもの。

これだけ近くにいながらそんなものが出来るのは、理解できないが。

「なんだよ、言いたいことがあるなら直接言えよ。」

カラダから抜け出るほど、何を思いつめるというのか。

心当たりがあるとすれば、今日遊びにきたコウのこと。

しかし、まさかあんな小さな子供に、そこまで対抗心を持てるものだろうか。

疑問に思ひながら零は、とりあえず説得してみる。

「戻れ、カラダに。そんなんでフリフリしてると簡単に死ぬぞ。言いたいことがあるなら明日きく。」

冷たくみえたレイの顔が、やや見慣れているスネた表情に変わる。零の顔をのぞき込むのをやめると、両手をグーにして、ばたばた腕をふりまわした。

まるで、ただをこねる子供だ。

「お前なあ・・・」

子供、なら子供にライバル意識を持つだらうな。

半身を起こし、ちよいちよい、と零は小さく手招きした。

レイは、ぱたぱたをやめるとふくれつツリで零を睨めしゃくり見

た。

零は、なおも手招きする。

口をとがらせた表情で、レイが顔を少しだけ近づけてくる。

手招き。

レイがさらに顔を近づける。

そのアタマを、よしよししてやる。

一瞬びっくりした顔をしたレイだったが、零の目を見て、ゆっくり満足そうに笑った。

声は出ないようだが、笑うカタチに口が開いている。

両手を広げて、大の字に背中からベッドに飛び込むと、そのまま

カラダに戻つたらしかつた。

寝ているレイ以外に、部屋にはもう誰もいない。

彼女なりに、無理をしていたのだらう。

心と体が、バラバラになるくらい。

「そこまでガマンすんなよな・・・メンデベセベ。」

面倒といいながら、改めてベッドにもぐらむ零の口元は少しゆるんでいた。

つまりは、それほどまでに想われているのだ、と。

(続)

微笑んでいるレイの寝顔を、朝の日差しが清々しく照らす。その頬を、零はわりと思いつきりつねりあげた。

目覚ましを反射で止めて、一度寝してこよみづなイギタナイ（寝穢い）ヤツに、遠慮はいらない。

「イターラー！」

甲高い声に、零は顔をしかめる。

「田覚まし止めたんなら起きろ。一ヤケた寝顔しやがって。」

吐き捨てた零に、レイはそぐわない笑顔を向ける。

「だつてーえ、スゴくいい夢だつたんだもん。」

俺、だろうな多分。

自意識過剰な零の考えは、しかしこの場合かなりの確率で正しい。あの“生靈”状態が無意識下であつても、零に“よしよし”された事が夢に影響する可能性は大いにある。

「そうか よかつたな。さつさとメシ食つて出てけ。」

言つだけ言つて零は耳をふさぎ、フルパワーで聞きたくないという意思表示をした。

どうせ聞くだけで耳が腐りそうな、イタイ夢に違いない。

「ちよーしつレーなんですケド。」

ふくれつ面で文句をたれつつ、のろのろとレイは起きた。レイが着替える間も、化粧をする間も、零はさりげなく振る舞いながら絶対に彼女の方を見ない。

それは気づかいではなく、見られたレイのリアクションを想像するだけで疲れるからだ。

興味もない。

“悪魔”が繁殖行動を取るのは見たことがないし（そもそも悪魔同士が出会えば即殺し合いだ）“つがい”にも出会ったことがない。

まして零は、性欲のたぐいを主食にする“淫魔”でもない。

レイの心がどっちを向いているか、に関心はあっても、そのカラダが出っ張ってるとか引っこんでるとかは、ビールでもいい。

「じゃ、そろそろ行くね、零さん。」

レイが立ち上がり、バッグを肩にかける。

「カギ、閉めてやる。」

「え？ あ、アリガト。」

少し驚いた顔のレイ。

普段、そんなことすらしない居候だった。

とはいえる。“悪魔のいる部屋”に、施錠が必要かどうかは疑問だが。

靴をはくレイのすぐ後ろには、零がいる。

「零さんがお見送りしてくれるの、何かヘンな感じ。」

小さく笑いながら、レイが零の方へ向き直る。

「そういう日があつても、いいだろ？」

笑うことも、怒ることもなく零が返す。

「そういう日、つてことは、今日だけかあ。」

そう言いながら、はじめから期待していなかつたらしいレイは残念がる様子もない。

「毎日してほしいなら命令すればいい。」

「それじゃ意味ないのー。じゃ、いつてきまーす！」

一言 反論してから、レイは微笑んだ。

だらしないくらい油断しきった、曇りのない笑顔。

見慣れすぎていて、これこそが本来の顔つきとも思える顔。

「ん。」

短すぎなる答えに見送られて、たよりない背中が出て行く。

出たところでまたすぐ振り向いて、勝手に閉まつたドアを

押さえて小さく手を振ってきた。

それには追い払うじぐさで答え、零は内側からドアノブに手をかける。

「じゃね！」

それであきらめがついたのか、それでも音符がちりばめられていそうな楽しげな声を出すと、レイは今度こそ歩き出した。

数歩分、それを見送ると零はレイの背に声をかける。

「俺はお前を彼女とは思つてない。が、俺なりに気に入ってる。

それで満足しとけ。」

大きくも小さくもない、温かさもないが、けれど決して冷たくは聞こえない声で。

振り返ったレイの顔が、笑顔になりきる前に零はドアを閉め、施錠した。

想像するだけで疲れるレイのリアクションなんて、わざわざ見たくもない。

少しだけ、零のことがわかつてきたらしいレイは、それで彼の意思を感じ取つたらしく、そのまま出かけていった。

その日、帰つてきてからもレイは幸せそうでメンドくさかつたが、元気がないよりは多少うつとうしい方が彼女らしい。面倒なはず、なのに今日はそれが少し楽しい。

変わっていく自分を、零は感じ取つていた。

そこには、不安と、疑問が同居する。

けれど今は、まだこのままでいい。

このまままでいたい、そう望んでいた。

5 渡り歩く影

「友達の友達から聞いたんだだけじゃ。」Jの話聞くとね、夢みちやうんだって。」

そう言ってウエイトレス仲間の口向寧々子ひなた、通称ネコが話した内容は、彼女と一緒に休憩に入ったことを呪いたくなるモノだった。少なくとも、怖がりのレイにとつては。

「なんでそんな話すんの一？」

非難がましい声でネコをせめても、もう遅い。

話は、よくありそうな怖いウワサだ。

夢に男の子がでてくる。

Jの話を聞くとその夢をみてしまひ。

名前を聞かれるから、答えないと一度と田を覚ます」とができるなくなる、というもの。

名前を答えるときに、漢字でどう書くかまで説明できないと、やはつ田覚めることができるないのだといつ。

「あははっ、ただのウワサだよー。」//なんとか途中で怒り切って最後まで聞かなかつたけどね。」

///、といつのもウエイトレス仲間で、派手な化粧と金髪タテロールのツインテールが印象的な、スタイルのいい女の子だ。少々、性格がキツい。

「///ちやんも怖かったんだよきっと。ネコちやんのこじわる。

」
スネた表情でレイが軽くにらむと、ネコは悪気のない様子で笑つて、ゴメンてー、とあやまつた。

「ほら、来い。」

ベッドの上の零が、レイの腕をつかんで引く。

「やなあ。」

やだ、と言つたつもりなのに、ロレッジが回らないレイ。

「半分白目でキモチ悪いんだよ、さつさと寝る。」

ふだん寝る時間は、とっくに過ぎている。

時計は3時を回り、夜に強いわけでもないレイは、落ちる寸前だ。眠気と必死で戦う彼女の目は、半分とじかけていて、意識が飛びかけるたび、白目をむいた状態になる。

それでもなお逆らってベッドに入らず、首を振つて零と眠気に抵抗する。

零は、低くつぶやく。

「何だか知らんが・・・強情なヤツだな。」

彼の姿が、一瞬そのシルエットをくずす。

ふたたび形となつた姿は、はるかに大きい。

「うう？」

久しぶりに見る大人の零に驚いたレイが、疑問符を含んだ声を出した。

肩と、ヒザのあたりに、妙に細長い彼の腕が回り、レイはあつと言つ間にベッドに横たえられた。

「ただでさえなかなか起きないくせに、俺の負担を増やすな。」

からみつく低い声は、本来の彼のもの。

半分レイにおおいかぶさる格好の零から、長い黒髪が遮光カーテンのように垂れ下がる。

レイの目に映るのは、黒い背景に浮かぶ零の顔だけ。

少しだけ、目が覚める。

自分が恋した、白い顔。

見つめるほど寂しさを感じる、淡い色の瞳。

傷口に似て紅い、薄い唇が、にいと笑つた。

「見とれるほど好きか？俺が。」

瞳をうるませたレイが、小さくうなづく。

眉を寄せ、悪人の顔でくつくつと笑うと、零は一瞬で元の子供に戻つた。

「なら逆うつな。」

声も、子供に戻っていた。

どうやっているのか、いつもより手も触れず部屋の照明を落としながら、自分もレイの隣に寝る。

「あー。」

聞き取るのがやつの小さな返事をした、と同時にレイは眠りに落ちていた。

軽いイビキまでかいて。

その小さな音を聞き、零は鼻で笑った。

(続)

見覚えのあるドアを開くと、そこは自分の部屋だ。黒い服を着た、子供が倒れている。

ああ、この光景は、覚えがある、とレイは思った。零さんが、子供になっちゃった田だ。

子供の横にしゃがみこんで、その肩を軽くゆする。冷たいカラダが、もぞり、と動く。見慣れた顔が、こちらを見る。

瞳が、光った。

これは、記憶とは違う。

レイは、動けなくなつた。

光る瞳が、たまらなく怖いのだ。
なんで? だって、零さんなのに。
でも、怖い。

まるで、零さんじやないみたい。
出合つたことのない、モンスター。

ソレが、口を開く。

「お前の、名は。」

問われているのに、レイの唇は、縫いつけられたように開かない。
緊張にノドが締め付けられ、答えるどころか声を出すこともできない。

ない。

「答えられないなら、契約通りに。」

首筋に伸びてくる、白く小さな手。
冷たい指が触れ、レイは息を呑む。

「ひ」

思い切り目をつぶる。

とたんに衝撃を感じて、また目を開ける。

暗闇だ。

「何の夢だ？」

すぐ近くで零の声がした。

どうやら、脱出できたらしい。

「ひいっ！」

それでも、たった今まで見ていた夢のせいでも、ただ話しかけてきただけの零の声まで、怖い。

「ひーじゃねえ。」

レイのヒタイを、全然チカラの入っていないでこびん が襲つた。ひす。

「ヒトの顔面殴つとこにおびえてんじゃねえ。何の夢・・・まさか、俺か？」

どうやら、うなされたせいでレイは零に危害をくわえたらしかつた。

闇に慣れてきたレイの目に、いぶかしげな零の表情がおぼれこつた。

レイの脳裏に、ネロの言葉がよみがえる。

「」の話聞くとね、夢みちゃうんだよ。

レイは、何も言わず首を振つた。

「寝るのをイヤがつたのと、何か関係があるのか？」

ぶんぶん、とレイはさらに激しく首を振る。

どうしても話をつけとしないレイに、零は一計を案じた。

「・・・そう、か。話せないような夢なんだな？」

レイは、ただうつむいた。

「話せない、よつな・・・つまりイカガワシイ内容だつたと。」

「え？えー？…違つそなんじやないによー。」

ロレツも回らぬネボケつぶり、慌てつぶりでレイは否定した。

「話せないってことは、いやらしーい夢だから、恥ずかしいんだ

る?」

「ちーがーいよー！」

「じゃ話せ。話せないならお前は欲求不満決定な。」

「えー！そんなあヒドいよおーあたしは、零さんのために

「エロいなー、大人だなーレイはー。」

困った声を出すレイに、零の棒読みな非難が降り注ぐ。

「違うもん違うもん違うもーん！」

「で、夢では俺と どーんなコトしたんだ？」

ほんのり、零の声に誘つような甘さが混じった。

「しーてーなーいーーー！」

「あー、そつか。いえなこよつなコトだつたんだよなあ。」

思い出したそぶりの小芝居は、またもや棒読み。

「違うもんつでもだつて、言つたら、零さんが

「違つって証明するには、話すしかないな？」

「ううう・・・じゃ、じゃいいよエロくても。」

開き直り、諦めてもう一度寝なおそつとするレイの耳に、軽いタメイキが聞こえた。

「俺が、どうなるんだよ。言つたら。何を心配してるので知らな
いが、俺はお前らとは違つ。」

「だつて、この夢スゴい怖いんだよ~」

何が怖いのか、自分でもよくわからないが、その恐怖は思い出し
ただけで泣きそうになるくらいだ。

「はー・・・」

今度のタメイキは、はっきり大きく、そしてわずかにイラ立ちを
含んでいた。

「お前が怖がつてた映画で、一度でも俺が怖がつたことがあった
か?」

「・・・」

沈黙を自分の勝利と感じた零はフフン、と鼻先で笑つた。

「あ話せ、何がそんなに怖・・・つて、寝てんのかよー。」

一瞬の間が空いたスキに、レイはまた眠りてしまっていたのだった。

(続)

さつきの、続きをだつた。

零でない零が、目の前にいる。

光る瞳が、まだレイを見ていた。

「逃げたな？」

いつのまにか、首にまきついていた彼の手。指に、チカラがこめられる。

一度起きたハズの自分を、夢の中に呼び戻したのは彼なのかもしない。

「お前は、もう、目覚めない。」

何の感情もないしゃべり方は、今でもする。けれど、それがこんなに冷たく響くことは、最近では ほとんどなかつた。

でも、出合つてすぐの頃はだいたいこんなだつたなあ。

恐怖に混じる、ほんのわずかな懐かしさ。

を、我ながら少しおかしいと感じた瞬間、痛みでまた目が覚めた。

「・・・ひ・らあーー（痛い）！！」

頭が浮くほど、頬をつねりあげられていた。

「じゃ、さつきと起きろ！ 言つとくが最初はもう少し手加減したんだからなーー！」

全部言い終わつてから、零は手を離した。

いいかえれば、零が全部言い切るまでレイは頬から吊られていた。もちろん、ぎやあぎやあ騒いだ。

すつごく痛いから。

当然零は気にしない。

ちよつぴりイラつときつたので。

「じつちが話してる間に寝やがつて。バカにしてんのかテメーは。朝まで一睡もできなによつにしてやがつつか？ あア？」

「『めんなれ』『メンナサイキヤー！それでえっと、何の話だ

つけ？」

ごち

「あいたつ」

脱力した零のヒタイがぶつかり、レイは地味に痛がる。

「お前は・本当に・ドマヅだな。」

低くこもった声は、どうやら立腹らしい。

「そんなに」

言いながら零はレイに、じかっとヒタイをぶつける。

「あいたつ！」

「体罰が

ごちつ

「あづつー

「欲しいのか？」

ごちつ

「いだいつて！」

「ああん？」「

怒涛の連打。

ご・ご・ご・ご・ご・ご・ご・ご・ご・ご (100ch a.chn)

「いたいたいたいたいたいたたーあつ！イヤツ！」

「イヤなら話くらいちゃんと聞けつ・・・ん？」

突然、零は怒るのをやめると、表情をひっこめた。

視線だけを動かして、部屋の中をチェックしている。

その目が、レイの後ろ、ベッドのふちあたりで止まった。

レイも振り返る。

そこに、白い手があつた。

手の後ろから、黒い髪をした頭が上がつてくる。

ぼんやりと光る、恨めしそうな目が現れた。

「一度も、俺から、逃げたな。」

光る瞳は、暗い室内の様子がうつすらわかるほどになっていた。

「・・・や、いやあーっ！」

レイは、悲鳴をあげた。

思わず、零のたよりない体に抱きつき、薄い胸に頬を強く押し付ける。

零は、動搖もなく言った。

「ありや俺だろう、何が怖いんだバカ。」

「怖いっすごい怖い！何とかしてよ零さん…」

顔をあげることなく、ひたすらその恐怖から目をそらしたまま、レイは懇願した。

気を悪くすることもなく、むしろ満足げにフン、と鼻で笑うと、零は落ち着き払った声でもう一人の自分に話しかける。

「・・・もうわかつてんんだろう？だから襲つてこないんだよな？」

「そういえば、何もしてこない。」

疑問に思ったレイは、恐る恐る後ろを振り返る。もう一人の零は、心なしか驚いた表情を浮かべ、ただ立つてこちらを見つめている。正確には、零の顔をじっと見ていた。

ゆつくりと、口を開く。

「お前の、名は。」

「名前、ね。ゼロって書いて、れい。お前の搜してた名前は、これだろ？俺の名だ。」

訊かれてすぐに、零は目の前にいるものが、名前を頼りに自分を探していたとわかったようだった。

もう一人の零が、無表情のままベッドの上へあがつてくる。

「ひやっ！」

驚いたレイは、再び零の胸へ顔をつけて、目を固く閉じた。

肌の上を、頭の中を、胸の奥を、体中を、冷たい空気がすうっと通り抜けていった。

不意に、両腕をつかまれる。

「もう、平氣だ。」

零は強引にレイを引きはがすと、それだけ言つて、そのままアソブツ

ンをかぶつて横になってしまった。

「え？え、え？」

周りを見回すと、何が起きたのか自分たち以外部屋には誰もいない。

「あ・・・、よかつたあ、怖かつたあ。ありがと、零さん。」

返事はない。

横になつたまま身動きもしないカタマリは、気のせいかいいつもよ

り大きく見えた。

その背中に安心感を覚えたわけではないが、ほっとしたレイはまたも一瞬で眠りに落ちていった。

6 これ、命令！

起きなくてはいけないのは、わかつていた。あまりグズると、零の機嫌をそこねかねないことも。

それでも、昨日は寝るのが怖くて夜更かししたせいで、とても起きられそうにない。

まどろみながら、ぼんやりそんな事を思つていたレイは、シャツの首元が軽く引っ張られるのを感じた。

「…いきやーっ！」

絶叫と共に起床。

ベッドの上で暴れる彼女の服のスソから、氷がいくつか転がり出た。

「くっくっく・・・おはよう。」

おかしそうに、そして陰気に零が笑つてている。

「もーっ、零さんやりすぎーー超びっくり…」

そこまで言って、気が付いた。

声が違う。

今までより、だいぶ低い。

もうほとんど以前の通りに聞こえる。

そして、もつとハッキリした違いがある。

「零さん、おつきくなつた？」

それに対して今日の零は、怒るわけでもなくフンと鼻先で笑つた。よく見ると、おつきくなつたどころではない。

もう兄の背は、余裕で超えていそuddた。

髪も伸び、肩に付くほどの長さになつていてる。

ただ、顔つきにはまだ少年らしさも残つていたが。

数秒、黙つて見つめられていた零の唇が動き出す。

「俺が大好きなのはわかつたから、いつまでも見とれてないでサッサとメシ食つて出てけ。」

「・・・みもふたもないよ。」

あんまりなセリフに、レイはいじけた声でつぶやきを返した。

(続)

あの“夢の中にいた俺”は、かなりの人数を渡り歩いたらしく、子供の姿には見合わない大きな力をたくわえていた。
おまけにそれが、何の抵抗もなく丸々手に入つたものだから、外見も急成長した。

もう“可愛い”なんて言わることは、ないだろう。
おかげで、ちょっと面白い。

テレビを見ている俺を、あいかわらずレイが遠慮もクソもなくジロジロ見ている。

俺は、お返しにこちらからも見つめてやった。

テーブルに手をついて身を乗り出すと、顔と顔はズイブン近くなる。

「そんなに見たきや、近くで見せてやる。」

レイは困った顔で固まり、息も止めてしまつてしているようだ。
さぞかし鼓動は高鳴つていることだろう。

こんな態度を取られると、・・・もつとかまつてやりたくなる。

俺はなんて優しいんだろう、悪魔失格だ。

人差し指で、あわれた子羊の胸、少し上あたりをつつく。

「きこえる。」

言つて、笑う。

「えつ？！やだっ！」

胸をおさえ、レイがうろたえる。

不様な姿が、単純に愉快だ。

「・・・へへへ、んなわけあるか、バカ。」

「あー…零さんのウソつきに。」

スネた田で、軽くこちらをにらみつけてきた。

何でも信じるあたりは物足りないが、からかって面白いのは間違

いない。

焦つたり困つたりしている顔を見ると、笑いがこみ上げてくる。
ま、本気で泣かれると氣分は悪いが。
俺がコイツを手放したくないのは、もしかしたらこの所なのが
かもしれない。

見ていたドラマが終わってしまったと、レイは

「お風呂はいっちゃお。」

と言つて立ち上がつた。

さりげなく俺も立ち上がり、後ろから耳元にしゃべる。

もちろん、色氣たっぷりイヤラシク。

「お背中ながしましょうか？」

どうやらくすぐつたかったらしく、レイは耳を押さえ、赤くなりながら必死で首を横に振つた。

笑える。

こらえる。

「Hンリョするなよ、俺はお前の下僕なんだ。」

誘ひ微笑み。

本当は、声を出して笑つてやりたい。

その間抜け面を。

すると、俺のHモノはちょっとした抵抗を見せた。

「違うもんつ、そんなんじゃないもん！ 零さんは」

「彼氏、とでもいいたいのか？ ちっちゃな主人サマ。」

少し背を丸め、視線を合わせてやる。

まだもとの状態にはほど遠いが、それでも俺のほうが全然背は高い。

と、いつもレイは、人間の女の中でも小柄なのだ。

その小さなご主人サマの言い分け、とこうど。

「“零さん”だよ。…彼氏はー、あの、できたらあ、これから…ね？」

照れ笑いで、俺の表情をうかがう。

多分俺は、呆れた顔でもしていたのだな。

「・・・」

「うん、ムリだね。わかつてましたあ。じや、お風呂につけてくれる
ねついてこないでね。」

わかつているなら、命令でもすればいいものを。
もちろん、風呂の件じやない。

主人の命令ならば、彼氏のフリくらこしてやる、ということだ。
が、肩を落としたレイは、俺の鼻先でドアをぱよしな、と閉める。

「俺は、人間のオトコじゃないんだからな。」

どうせアイツに言つてもわからぬいだろ？ が、口に出してみる。
それが届いたかどうかは、わからぬ。

レイが風呂を済ませて戻り、しばらぐすると俺は気づいた。
警戒されていることに。

ちよつとからかつてゐるだけなのに、レイは話しかけてこよつと
もせず、こちらの様子をつかがつてゐる。

「何だよ。」「…何が？」

「気まずい。」

気にはならないが、今からかつても不発に終わるのがわかつて
いるから、何ともつまらない。

おまけにその後、俺がベッドに入ることすら拒絕してきた。

「一緒に寝るの？」「

先にベッドに入った俺に向かつて、迷惑そうにぬかしやがつた。
今さら床で寝る気はない。

予備のマットレスを敷いても、寝むけは断然ベッドのまづが上
だ。

「何だよ、昨日まで一緒に寝てたろ？ が。「

「だつて昨日はあ！」

「昨日も今日も、俺は俺だ。」

「うう…じや、じやあ、失礼しまーす。」

まだ多少納得のいかない顔をして、じぶじぶレイが隣に入ってきた。

俺は、照明のスイッチに向かって、わずかなチカラを飛ばした。明かりが落ちる。

枕元にスイッチはなく、暗くしてからベッドに入ろうとするとい、レイは色んなモノを蹴飛ばすので、これは俺の仕事の一につけていた。

さて寝ようか、と思うと。

「狭い。」

くつつかなことベッドからハハ出しちゃう。そな状況を、俺は口に出した。

「だつて零さんあつあへなつちやつたじやん。」

不服そうなレイの声。

「横むきや少しマシになるか。」

「何でこつちむくの?」

「別に。」

ただからかってるだけだ。

どんなに警戒しても、この距離では無駄。

コイツに許される選択肢は、寝たフリ・照れる・恥ずかしがる、くらいしかない。

寝たフリに聞としては、俺の攻撃に耐え切れれば、の話だが。

「じゃ、あたしもあつちむく。」

バカな女だ。

「寂しいだろ。」

甘えた声を出して、俺はレイの肩をつかみ自分のほうを向かせた。さあ、ムダにときめけ。

全力の肩透かしをくらわせてやる。

(続)

「やめてよっ!」

これは・・・驚いた。

まさか反抗するとは。

強い調子の声は命令と同じ効果を發揮したらしく、俺は手をふり
払われた格好のまま一瞬動けなくなつた。

「からかってんのバレてんだからね!」

本気ではなさそうだが、声が怒つている。

「あ、ああ、わり・・・」

「ベッドで寝てもいいから、あたしにさわらないで・・・これ、

命令!」

「あ・・・ん、いや、ハイ。」

・・・まさか命令までされるとは。

基本的にコイツは、俺に命令することを避けろ。

これは、なんざんからかわれた事に対する、レイなりの仕返しな
のかもしけない。

「あの、な、・・・レイ、怒つてる、のか?」

本気で怒らせたのか、さすがに心配になつた。

おそるおそるかけた声は、自分でも情けくなる程小さい。
ちょっとからかつただけだ、まさかそんなに怒りはしないだろう。
それでも、もしかしたら少しは怒らせたかもしれない、嫌われた
かもしぬないとと思うと、胸の奥で焦りがささくれ立つたツメを立て
る。

自分は好かれているのだからこのへりに平氣だ、と落ち着いてい
しても得体の知れない感覚は止まない。

そのへり、レイからの命令といつのは珍しいものだったとも言
える。

小ちなこくつものキズが、そわそわとうずくへ。

レイは、何も言わない。

やつぱり相当怒ってるのか？

「…レイ？」

「ん・・・・くふー、くー・・・」

…寝てやがる。

「寝つき良すぎんだよ・・・」

気にするだけムダだったのかもしれない。

俺も寝ることにした。

怒つていみたいだと思つと、妙な危機感もウソのよつに消え

た。

田覚ましを止める。

低いテレビの音と、「一ヒーのいい香り。

頬杖でテレビを見る、見慣れた黒い小さな影。

「あ、おはよ、零さん。」

「おはようござこます、じ主入サマ。」

反応がおかしい。

なんでだろう、と考えてレイは思い出した。

「あつ！昨日ごめんね？さわんないでなんてつ…」
言つてから、さりに思い出した。

すっかり子供に戻つているが、きのうの零はオトナだつたハズで、

そのせいで“さわんないで”などと叫つハメになつたのだ。

「あれ？零さん元に戻つたの？」

「今は、昨日のアレが本当の俺だ。どつちかつて言えば、これは
“変身”になる。…これなら、今まで通りなんだろ？」

「え？」

零が、レイの顔に手を伸ばし、指先が唇に触れる直前で止める。

「さわつても、いいか？」

「・・・え？あ、うん。」

カラダのどこか奥から熱気が上がり、顔全体が火照る。

レイは、眠気からではなく頭がぼうっとするのを感じた。

それから、痛み。

「いざやつ！」

唇がつねりあげられた。

「こ・の・ク・チ・ガつ！俺に反抗したのが悪い。自業自得だからな。」

引きちぎれる勢いで引っ張って、手が離れる。

ふん、と鼻息荒く零は憎々しげに零はレイをにらむ。

「いたーい、ごめんてばーあ。」

涙目で謝る、いじめられっ子。

「命令を正式に撤回しろ、嫌われたくないなればな。」

「取り消すう・・・いたいよ。」

「わかつたら」

「やつさとメシ食つて出てけ、でしょ？」

無表情の零が、手を上げる。

「ひやつ」

またつねりれるかと、レイが首をすくめる。

ふわつ、と頭に手がのせられた。

「わかつたら、それでいい。」

そう言つてまた零は、すぐにテレビのほうを向いてしまった。

「変なの。でもやつぱ、こつちがこつもの零さんだよね。」

「昨日も今日も、俺は俺だ。」

「昨日と同じこといつてるー。全然ちがうよー、昨日の零さん、なんかヤラしかったもん。」

レイの言葉にわずかに振り返った横顔は、田元がご機嫌ナナメ。すかさず謝ろうとしたレイより一瞬早く、零が口を開いた。

「ああいう俺は」

言いかけて、やめる。

レイは次の言葉を待つた。

「・・・いや、いい。やつさとメシ食つて出てけ。」

「あーーまたそれえ。やだもーん、ゆづくじ食べるもんねー!」

レイはふざけて言い、笑った。

零は返事もせず、ふいとまたテレビのほうへ顔を戻した。

朝食は、甘くてやわらかいフレンチトーストが用意されていた。

昨日は「めん

本当は零も、そう思つている。

レイはそんな気がした。

ダイスキなのに
だから大嫌いなときもある
スキだつたり キライだつたり
キモチは 摆れ動く
ブランコみたいに
いっぱい揺れて 揺れて
たのしい、ね？

「零さんて、猫っぽいね。」

自分を見ているようで、そうでない零の視線に気づき、レイが言った。

話しかけて初めて、目が合つ。

「ワガママできまぐれ、か？」

「それもあるけどー、今なに見てたの？」

「ナチュラルに無礼だな。お前に見えないモノだ。」

言い返すものの、零はむつとするでもなく、何の表情も浮かべていない。

レイはレイで、なにが“無礼”なのか気づいておらず、本人的にはただ思ったことを言つただけなので何も気にせず話を続ける。彼女は基本的にとても優しいのだが、同時にとても頭が悪く、神経あまり細かくない。

と、いうより無神経だ。

「ほらー、そういうトコ。猫もそうでしょう？ 何もない」と見て、夜とか怖いの。

怖いというわりに、なにが面白いのか顔は笑っている。

そのハナシを、零は現実的な解釈で一蹴した。

「あれは、見えないくらいこ小さなホコリや、虫なんかを田で追つてゐにすぎん。たいていは、な。」

「え、そなの? ガツカリ。」

「怖くなくていいだらうが。それともナ一か? お前は“ドウブツにはフシギなチカラがあるんだよ”とでも言つつもりか? 零がレイの口調を真似てみせると、レイは真つ赤になつて恥ずかしがり、抗議した。

「ソレあたしー? 全つ然似てない!」

すぐに中途半端なモノマネが返つてくる。

「せんせんにてなあい!」

「もー! もー! やーめー! やー!」

「やーめー! やー! やー! やー! やー! やー! やー! やー!

冷めた表情で、セリフだけをそつとそのままマネでくるから、ハラが立つことおびただしい。

「んー もー! んー もー! んー もー! んー もー! んー もー!

ホンモノよりこくらか甘つたれた響きをきかせたコレで、レイはすっかりむくれて口をきかなくなつた。

「・・・

「……くくく、わかつた。今日は『ねぐらこじしてやる。』

意地悪きわまりない零の笑い顔を、レイが疑いのまなざしてうかがう。

少しかんがえたあと、彼女は電話の横のメモとペンを手に取つた。

「ほんとに? ”

汚い、とまではいえないが、子供じみた字が問いかける。

「本當。」

零がつまらなそうに言つとレイは、やつと警戒をといた。

「あー恥ずかしかつたー! ってゆーかキモチ悪かつたつてゆーか、

零さんコドモー!」

まだ少しスネている感じ。

零は、自分の非を認めない。

「お前に影響されたんだ。俺をいくつだと思つてる?」

本人いわく、軽く1000年や2000年は生きている、らしい。

「えー、ぜつたい零さんがコドモなんだよー!」

「うるさい。」

とがらせた唇をつねじられ（零はよく、つなる、と、ねじる、を

同時に）、「、レイが、みぎゅ」と悲鳴をもらした。

それでハナシはなんとなく終わつてしまい、とうとう零がレイのまわりに何を見ていたのかは、わからずじまいだった。

しばらくたつたある日、零は唐突に切り出してきた。

「お前最近、調子悪かつたりしないか?」

少し考えて、レイはこたえた。

「なんともないよー?」

「そうか、それは良かつたな。」

あきれた、とでも言いたげな顔と声の意味が、レイには何一つわからない。

わからないが、元々 零にはわからない所が多い。

ヘンに追求すると、機嫌をそこねる恐れもある。

レイは、気にしないことにした。

（続）

明るい人間のまわりには、明るい人間が集まりやすい。

それと同じように、明るい人間のまわりには、ヒト以外でも明るいモノ、善良なモノが寄つてくる。

反対に、暗いモノや邪悪なモノは近寄りづらく、そうしたモノは、それらに合う性質の人間を好みがちだ。

だから、本来であれば鳴神鈴はある病んだ兄や零の影響がない限り、ヒトであれ魔物であれ、悪意を向けられることはめつたにない、ハズだった。

そんなことがあったとしても、性質が違すぎる程生半可な悪意ではレイのそばには長くとどまれない。

そういうレイのそばだったから、一時ヒドく弱った零も、他の魔物に襲われず済んだのかもしれない。

いわばレイの部屋は安全地帯みたいなもので、それ相応にチカラある魔物か、よほど精神力のある者の呪いでもない限りはめつたに入り込むことはない。

なのに、少し前からレイは、誰のものとも知れない悪意をまとわりつかせたまま、部屋に帰つてくるようになつた。

日に日に、その悪意は増していく。

最初は、顔に汚れがついているのかと思った。

気配も感じないほど、希薄だったから。

マスカラか何かが落ちて、見当ハズレなところへついたのだろうと。

しかし、それは見ていた零の視線をたどつて、彼の中へ吸い込まれた。

汚れではないと、それで初めて気がついた。

次の日、汚れに見えていたものは、薄黒く濁つた粘液に変わつて

いた。

やはり、顔についている。

大小数滴の、ぬらぬらしたソレをへばりつかせたまま、何も知らずレイは笑っていた。

それもすぐに、まなざしの中に溶けた。

次の日には黒さが増し、その次の日には顔だけでなく、他の部分をも汚し始めた。

指先を、胸を、ぬるぬるとしたねばつこい液体が伝う。

これは、よこしまな欲望だ。

自分以外の誰かが、レイを欲しがり、好きにしたいと思っている。好きは好きでも、その想いはスズキのように彼女の幸せを望む、甘つたるい気持ちではない。

視覚化された、この黒い粘液のいやらしさ、あさましいありさまは、そのままその思い、またその主の性質を物語っている。レイがウエイトレスとして勤めるランコントルは、ケーキの味だけではなく制服の可愛らしさも評判だ。

いやらしい視線で彼女たちを見る者がいることは、容易に想像できる。

従業員か、客か。

どちらにしろ、自分がいる限りその想いはとげられない、と零は思う。

レイが好きなのは零であり、そのカラダであれ、心であれ、好きにできるのは零だけに許される権利のハズだからだ。

もつとも今のところ零は、少しからかう以外レイに何かしたいとは思わない。

部屋に戻るまでまとわりついて離れないほどの想いを抱きながら、決してレイを手に入れることができない、顔も知らぬ相手。

その誰かに対し、ほんのいくばくかの優越感を持ちながり、ほぼ毎日レイが持ち帰る邪心を零は吸収し続けた。

最初のうちには、量も少なく密度も薄かつたので、ただ入ってくる

だけだった。

そのうちに、量も増し、密度の濃い想いのカタマリになつてくると、相手の考えや、感覚が少しずつ伝わってくるようになつた。

たとえば、最初はレイを“かわいい”と感じた。

ふだん意識もしないその姿が、他に比べて特に好ましいと、一瞬だけ思えてしまう。

すぐにそれは、生々しい性欲に変わった。

予測はしていたし、一瞬で消える。

オマケに、自分の感覚ではないから、それに流されることは可能性すら感じなかつた。

逆に、何も知らず、そんな視線で見られているレイがおかしかつた。

そうして静観を決め込むうち、レイは全身にぬめぬめとした黒光りする液体をしたたらせて帰宅するようになつた。

ここまでくると、優越感だけではいられなくなつた。

ただの片思いとは言えない、レイにまとわりつく異常な執着心。零の胸の中に、じわりと不安がしみた。

原因を、とりのぞくべきか彼は迷つた。

それは、レイを守ることになる。

気に入っているから、誰にも渡さない、とは思つても、守るとうのは必死すぎる気がした。

そこまでしたくなかった。

その間にも粘液が、視線に溶けて入り込んでくる。

レイの笑顔が、いつもより可愛く見える。

自分の名を呼ぶその声が、心地いい。

衝動が駆け抜けていく。

着ているものをはぎとつて、彼女を。

そんな思考を感じているちょうどその時、何も考えていない当人に微笑みかけられた。

自分の考へでないとわかっているのに、そのまますぐ見返す

のがためらわれた。

結果的にそらした目が、ソレを見つけた。

いやらしい“目”を。

とうとう、ドロドロの感情だけでなく、本人の一部までもが現れたらしい。

心のほとんどがレイのことでいっぱい、他のことは自分自身すらどうでもいい、そんな状態が予想できた。
レイの顔の横に浮かぶ、その“目”を零は、消える、という意思を込めてにらむ。

部屋にそんなものがいるのは目障りだ。

しかし、レイに説明するのは面倒だから、表情は変えない。

静かに視線を送るうち、数秒で“目”は消えた。

そうだ、なにもわざわざ自分が動かなくても、こつして消してやればいい、と彼は思った。

その零の視線に気づいたレイは、

「零さんて、猫っぽいね。」
と言った。

何も知らずに、ただ零についての発見を、嬉しそうに語った。

(続)

その田によつて、“田”は醜い“唇”になつたり、ぶよぶよした“手”になつたりもした。

しだいに、見える部分は広がつていき、さらに数日もすると、全身ねばねばにおおわれたレイにおふさる形で抱きつく男の半身が見えるようになつた。

細くはねぼつたい田をした、色白でいかにも暗そつた肥満体の男。べたべたした髪を伸ばしているが、頭自体は薄くなつてきていて、レイの耳元でうごめく唇は、何かをさわやきかけているのか、そこに舌を這わせたいのか。

レイの身になればおぞましい、零の田から見れば見慣れた人間の姿だつた。

ただ、こうなつてもまだ何も氣付いていないレイは、いつもと変わらず、元氣そうにしている。

ふつうは、ここまでくればその邪念のせいと原因のわからないライラや、ゆうつに襲われたり、あるはずのない重みで肩がこつたりと、それなりに影響を感じているはずだ。

それが、レイときたら、

「なんともないよー？」

である。

「そうか、それは良かつたな。」

言いながら零は内心、死ななきやわからぬだらうな、と呆れていた。

それどころか、その徹底した無神経ぶりに感心さえした。

レイに抱きついている男は、まだ消えない。だんだん、消えにくくなつていた。

妄想の中では、レイを自分の彼女だとでも思つてゐるのだろう。しつこさは、自己主張だ。

生意氣に、人間の分際で俺に自己主張か。

そう思つとカツとなり、零は視線にチカラをこめた。

目つきはかわらないまま、その威力だけが増す。

「あつ？なんか、ちくちくする。・・・なんだろ？」

すぐそばのレイにもいくらか影響したらしく、カラダをさすつて

いる。

男は、消えた。

レイにしつこく、汚らわしい想いをよせる男。

レイを自分のものにしたがるその存在は、邪魔だ。

守るわけじゃない。

邪魔だから、いなくなつてもうただけだ。

レイには、何もいわない。

言えばただ、面倒が増える。

こうなつたことも、だれにでも平等にふりまかれる彼女の優しさが原因だろうが、それでも零は彼女に対して忠告しようとすら思わなかつた。

このバカには、どうせ言つてもわからない。

(続)

行つてきます、と元気よく言つたレイに、ん、と短く零は答えた。
彼女がドアを閉めると、零の姿は消えた。
ヒトの姿をほどいて霧状になると、空氣にまぎれて移動する。
目には、見えない。

人間相手なら、尾行にも監視にも、うつてつけだ。
そうやつて彼がぴつたりはりつていいる相手は、レイ。

彼女はどうせ、心当たりなどない、と言うだらう。

氣味の悪い客がいたとしても、おかしな態度をとられても、たまたまそういう人なだけで悪気はないのだ、と解釈するのがレイだ。

彼女にきくよりは、自分が直接確認するほうが早い。

とはいへ、本当にすぐに相手を見つけられたのは、零の考えがどうこう、というより相手がすでにストーカー化していたせ이다。
アパートを出てすぐに、覚えのあるぬるりとした感触がレイに伸びた。

出かける時間を把握して、待ち伏せていたらしかった。

ということは、今まで帰りも後を付けていたのだろう。

アパートの入り口から部屋までなら、そのへんの男の思い込み程度のモノがついてきても不思議はない。

レイについていたモノ、この男の“念”は確かに強いとはいへ、特殊な力を持つていてるわけではないという事だ。

いくらか鈍感とはいえ、レイが気づかなかつたこともうなずける。
しかし、男がレイに強い執着を持ち、彼女に害を及ぼしかねない
という状況に変わりはない。

こんなに近くに危険人物がいたなんて、考へてもみないことだつた。

零は、一言いってやらねば、と思い一度レイを放置して霧状のま

ま移動を始めた。

ヒトからは見えないこの姿なら、田立たずの車などよりもよほど早く動ける。

ストーカー本人を見つけたときに、考へてゐる事はチェックしておいた。

付け回して、写真をとつて、店では客としてそばに近づく、というのが目的だ。

たいしたキケンはない。

今のところは。

とにかく一日中レイを“見守る”のがこの男の唯一の楽しみで、自分では使命だと思つてゐる。

実際には、見守つているハズの視線はちょくちょく胸や、本人は少し太いと思つてゐる脚をじろじろ眺めている。

だが、その視線、ストーカーよりももつと腹が立つことがある。自分の部屋でも、ランコントルのものでもないドアの前に、零は立つた。

自動ドアが開き、やる気のない店員の声が聞こえる。

「しゃーせー・・・・・」

「お前がそんなだから、客が来ねえんだこの店は。」

まっすぐに歩いてくる零の低い声がすると、カウンターの中の男はすぐにこちらを向いた。

「あ、零くーん、ちょっと見ない間にズイブン大きくなっちゃつてー。」

文句を言いに来た零は、小さな子供ではなく今現在の彼の真の姿をとつていた。

スズキは、客を遠ざけるような事件を引き起こした本人にむかつて微笑みかける。

御雷の事件のさらに前にも、零はスズキにハツ当たりをしたことがある。

その結果、ブレイブの店員はガチホモだというウワサが立ち、客

は激減した。

売り上げ 자체はあまり変わらず、逆にスズキの取り巻きが減り、

当人以外はせいせいしていた。

「お前は、たまにくる親戚のおじさんか。」

「おじさんはやめてよー、前は自分のほうが老けてたクセにー。アハハ。」

「いくつのもりだバケモンのくせに。」

「にじゅうろく。」

当然の顔で答えたスズキに、零は顔をひきつらせた。

「だつたら俺はハタチだな。」

なぜか、スズキをいい気にさせておきたくない零だった。
文句を言いに来た今回に限らず、スズキは零にとつていつも、なんとなく絡んでやりたくなる相手だ。

きつと相性が悪いのだろう。

何と言つても、スズキは“悪魔”の天敵である“天使”なのだから。

だが、零に対して攻撃をしかけてこないスズキを、殺そとまでは思わない。

面倒だから。

スズキが笑い出した。

「ないない！今なんかどう見ても未成年だしい。16、7？」
スズキが思い出すよりも早く、零は襲いかかった。

「あうわっ！つたあーい！」

つまんだ頬肉を渾身の力で引っ張ると、スズキは激しくわめいた。

「必殺！頬吊り（ほおづり）ーー！」

零も、技名らしきものを叫んだ。

言葉どおり、スズキの顔はやや吊り上げられている格好だ。

零は、子供扱いがキレイだった。

ハタチはオトナでも、16はコドモというワケだ。

しかし、1000年以上も生きたわりには、オトナゲない反応で

(続
ある。

「のいるーの、ひやうつ！」
のびちゃう、といいたいらしい。

「伸びちまえ！どーせすぐ戻るんだろうがー。」
人間の体とは違うのだし。

零としては、伸びたままになる呪いでもかけてやりたいところだ。

「いーやーらつ！」

引っ張る零の手と、それをほどこして掴むスズキの手の力が
拮抗する。

ふるふる震える一人の手。

勝負はつかず、したがってスズキの頬は引っ張られたままだ。

「もおっ、あにっ（何）しに、来たんりよお！」

痛みの中からスズキが声を絞り出すと、零は不機嫌に手を細め手
を放した。

「・・・この役立たずが。」

「え？」

スズキには、なんの事かわからない。

「レイにストーカーがついてる。」

零の声は落ち着いていて、表情もないが、怒っているのは間違
ない。

「で？」

スズキは首をかしげた。

零はそのしぐさに苛立ち、表情と声を変える。

「で、じゃねえ。お前、何しにランコントルに行ってる？お前が
いながら、何でレイにあんなのが近づくんだ？あ？」

詰め寄る零に、スズキは平然と言った。

「甘えるな。」

冷たい表情は、珍しい。

その珍しい表情のまま、スズキは言葉を続けた。

「もちろん、あの口に何かあつた時は助けるつもりでいるけど、本来それは君の仕事だ。ここに文句言いに来たってことは、彼女に何かあつたらヤなんだよね？僕にイヤミ言いに来ただけなら、君はもつと楽しそうにしてるハズだし。・・・だから、気づいたなら君が何とかしろよ。」

何か言葉を飲み込んだ気配が気にかかつたが、言われてみればその通りだ。

放つておけば、何かが起こりそうなときにはスズキが対処したのかもしれない。

ストーカーの考えは、さつき読んだとおりだ。

“何か”起こすまでには、まだ間がある。

焦つて動いたのは、気になっていたのは自分だ。

まだそこまでキケンではない、何も起こりそうもないからスズキは動かない。

それが気に入らないなら、自分が動けばいい。

だが、スズキはレイを好きなハズで、ならば危険は可能性だけであつてもつみとるべきではないのか？

「あいつの事が、心配じやないのか？」

もうほとんど、結論は出ていた。

スズキは揺るがないだろうと思つたが、素直に引き下がろうとも思えず、零は問う。

青い空と、森が溶け合つ瞳。

自分の知らない記憶がそこにある気がして、零はかすかなめまいを覚える。

まっすぐに零の目を見たまま、ただ静かに、ゆっくりと彼は

「・・・そうだね。」

と言つた。

何かを、伝えようとしている。

そんな気がするだけ、なのかもしれない。

心当たりはない。

何が言いたい？

問うて答えるものなら、最初から口に出すだらう。

何か知っている、それを隠している。

気のせい、だらうか。

ほんの数秒考えると、舌打ちを残して零は店を出た。

ドアが開いた瞬間、人間に見えていた姿が蒸発する。

高速移動する気体に、スズキのつぶやきは追いつかなかつた。

「ふふ…やつぱり16、7がいいトコだ。」

安心した、その笑みも。

(続)

レイちゃん、今日も一日、おつかれさま。

明日も、キミの騎士がずっと見守ってるよ。

アパートの入り口に消えていくレイを、物陰から見つめながら彼は思った。

「・・・ふ、うふ、うふ。」

薄青いひげの剃り跡に囲まれた唇の間から、荒い息に似た笑いが漏れる。

本当は一日中彼女を“見守る”ために、盗聴器や小型カメラを用意したいところだが、昼は彼女についていなくてはならないし、夜はその日写真におさめた彼女の写真をアルバムに整理して、じっくり鑑賞しなくてはならない。

彼は、忙しいのだ。

それに、取り付ける所を誰かに見られたら、これから彼女を守つてあげることが難しくなるかもしれない。

臆病なのではない、慎重なだけだ。

こんなにも思慮深く、慎重で、彼女のために身を粉にして護衛を続ける自分は、まさしく生まれ変わる前、騎士だったに違いない。彼は思う。

そして、自分と運命で結ばれた彼女はきっとお姫様だったのだ。

一介の騎士と王女の恋は周りから反対され、二人は・・・。

でも大丈夫、今の二人にはなんの障害もないんだよ、レイちゃん。興奮に息を荒くすると、彼女の部屋に電気がつくのを確かめてから、彼は薄闇の中を家路についた。

両親は昼の間、彼がどこへ行っているのか知らない。

ただいまも言わず帰ってきた彼に、家にいた母親が声をかける。

「毎日遊んでないで、仕事探し下さいね、修ちゃん。」

おれの仕事はレイちゃんを守ることなんだよ、クソババア。
修ちゃんなんて呼ぶなよな、大人なんだからよ。

さあ、部屋でゆっくり今日とりたての、新しい写真を見よつ。
一階に上ると、おれは後ろ手でドアを閉めた。

そのとたん急に、寒気と言つか、怖気がした。
おぞけ

「選ばせてやる。Dead... or die？」

おれの声ではない。

父親の声でもない。

低い声の中に、押し殺した怒りがにじんでいる気がした。
いや、そんな事よりもおれとドアの間にはヒトが入れるスキマはない。

なのになぜ、この声は後ろから聞こえるんだ？

「…は、…ひは、あつ・・・」

なぜ、なぜ、なぜ。

誰・・・いや、ナニが居るんだ？

なぜ、誰もいないハズの部屋に？

いつから、どうやって？

言いたいことは沢山あるのに、混乱と驚きと恐怖が入り混じり、
言葉にならなかつた。

うしろの何かが笑つた。

「くつくつく…いや、悪かつた。これじゃ選び辛いな。言い方を変えよう。俺と契約するか、しないか。契約すれば、死後その魂を貰う代わり、楽に死なせてやる。何も感じず、ただ、心臓が止まる。怖く…ないぞ？くくく。」

怖かつた。

ナニが怖くないって？

おれは、ナニが何だかわからない。

楽しそうに笑っているコイツは、死神か？

契約…悪魔？

死の、契約。

「いや、だ…いやだー！」

「そうかあ、俺は、選ばせてやつたのに、なあああ！」

徐々に大きくなる後ろの声は、恐怖を限界まであり、俺は、声を・・・。

「あ、おっ、がえあつがあつ！」

何かじつじつした物が、素早く口に押し込まれた。

ノドにまで入り込もうとするソレは、後ろから伸びた手だ。

おれは激しくむせて、こみあげる胃液を手ごと吐き戻そとカラダを震わせる。

暴れても、口の中に入った手が、がつちり頭を固定していく逃れることができない。

口から、だらだらとよだれが垂れ、苦しさに涙がにじんだ。

両手ではすそうとしても、手はビクともしない。

口いっぱいに入っているソレは、甲の部分が収まりきらず、すぐ目の前で青白くズジを浮かせている。

苦しい、キモチが悪い。

噛み付けば放すかもしれないと思つたが、限界まで無理やり押し広げられたアゴにはチカラが入らず、そんなことは不可能だつた。そして、そんな抵抗を考えた瞬間、さらに手は奥までねじ込まれ、骨ばつた固い指先がノドの奥深くまで侵入し、「う」めぐ。

さつきまでとは比べ物にならない、苦痛と吐き気が突き上げた。ノドがケイレンし、体が勝手にびくんびくんと跳ねた。

「くるし〜〜？」

ねばりつく不気味な声が、からかう調子で言つた。

(続)

冗談じゃない、もう死にそうだ。

「ぐう、ひぐつ、はあひえつ！」

苦しい、放せ、と言つたつもりだつた。

手がジャマで、ひねってしてみるが、顔を出すたびに起き上がる。

「ふ・・・ふふ。何語ってんのかわからんねえよ、フタさん。それより喜べ、契約を断つてくれた勇氣ある……騎士殿には、これからもつと、つりあくへえ、苦ししくてえ、めつちやくちや痛い思いが待つてゐる・・・く・くへへ。」

騎士？

おれがひそかに自分を騎士と思っている事を、こいつは……
考えることさえできなかつた。

後ろのやつが、しゃべりながらぐりぐり手を動かしたからだ。

心も少しおかしくなった。

口に手を入れられたまま、胃の中のものを噴射した。

後ろで、またあいのが笑つた。

「くはははは！きつたねえなあ！はははははー。」

大笑いしながらよつやく手を抜くと、奴はおれの服のあちこちに

「えへ、はへ、はへ……」ソレをなすりに口をふいた

おれは、あえぎながら床に倒れこんだ。

い影だつた。

妙に細長い、長すぎるシルエット。

高すぎる位置から、白い顔がおれを見下ろしている。

大笑いしていたハズなのに、まるで表情が残っていない。

振り乱した黒髪からのぞく、色のない瞳から目が離せなくなつて

いた。

「コイツがなんなのか、どこから来たのか、なぜこんな目にあつのか、ぜんぶ、全部もうどうでもいい。」

ただ。

「た…たすけて…」

赤黒い線がうごめき、答える。

「い・や・だ。言つただろ。Dead or dieだ。」

「いやだ…いやだ！いやだつうわーつあ——つ……」

おれは叫んだ。

声は、出でていなかつた。

「しいいつ、騒ぐなよ。」

唇の前に人差し指をたてて、白い顔が近づいてくる。

目の色が、おかしい。

光つてる。

悪魔だ…本当に、こいつは悪魔なんだ。

「この姿を維持するのも、お前の母親をテレビに集中させておくのも、今の俺にはそれなりの負担なんだ。この上近所の人間まで呼ばれたら、ゆっくり楽しめないだろう？お前と過ごす、夢みたいなひと時をさーあ。…まあ、わかつてゐだらうがお前にどっしゃ悪夢だ。くつ、くくく。」

「…ひつ、はひつ、ひつ、ひ

耳に音が届いて初めて、自分が息をしていることに気がつく。

ひどく早い。

からだ全体に響く、鼓動も。

「ここに、この家の台所から失敬した包丁がある。イチバン痛そくなやつを選んでやつた…はい、持つて。」

おれの手に包丁を持たせると、奴はいやらしく、ただでさえ細い目をさらに細め、笑つた。

「ひい、は・・・はああつー。」

今度は声が出た。

同時に俺は包丁を、横に思いつつきり振っていた。
せりれる前に、やってやる。

包丁は確かに、奴の体を切りつけた。

なのに手じたえはなく、何もないことになると回じよひを通り過ぎた。

「やると思った。くくく、そんな弱いんじゃ、レイを守れないぞ？ 悪魔から。」

叫びたいのに、また声が出ない。

「それは、そうやって使うんじゃない。いつだ。」

奴がしゃべると包丁を持った右手が、俺の意思と無関係に動き出した。

残された左手で、俺は右手を押された。

右手は自分の、おれの腹をめがけて包丁を突きたてようとしている。

奴は、面白そうにおれの右手と左手が戦うのを見てくる。

「う・う・う・う・うべつー。」

「遠慮するなよ、どうせ大きな声など出せない……と、こいつより俺がもうガマンできないな、くくく。」

右手に、悪魔の白い骨ばった手が、添えられた。

衝撃に、一瞬視界が白くなる。

時間が、ひどくゆっくりと流れ、数秒間。

突き刺す感触と、食い込んでくる感触が、同時にある。

(続)

痛みよりも先に、パツクが俺を襲つた。

• • ! • • ! • • ! •

やはり声は出ない。

ぱくぱくと口を動かす俺を、愉快そうに悪魔が笑う。

「くつくつ、脂身が多くて内臓には届いてないかもしないな？ もうと奥まで届くように、いや届くまで、繰り返すんだ。」

ふかひ三が勝は舞の九

司が抜かると、血がじくじく

刺したのは腹なのに、体中が痛い。

と「が傷口がれからないぐらし
体中が痛みを感じているのは

復一ノ衝擊を感"。」

そうだ、右手は俺の意思と無関係に・・・

卷之三

しぶりでな。

腹からはじた時に勢いを増して血が噴出しあり、なにか、ハミ

縣廳共設十二處，一處在列、一處在北、一處在南、一處在東、一處在西、一處在中、一處在北門、一處在南門、一處在東門、一處在西門。

その間も右手は勝手に腹を刺し続け、悪魔は機嫌良さそうに微笑んでいる。

「いい声だ。が、すこーし、静かにしろ。もう一度俺の指をしやぶりたいか?...俺はもうゴメンだけどな。」

悪魔は血まみれのおれのシャツのはしをつかみ、思い切り引き裂く。

いた。

血と、さつさき吐いたカスのこびりついた服が口に押し込まれる。部屋にただよっている一オイよりも、さらには濃いそれは、ふたたび吐き気を運んできた。

ぐぐもつた悲鳴に、吐き気に呑めきが混じつた。

「『もつ、うぶつ』があえつ・・・」

「だいぶ静かになつたなー、いい格好だ。よしよし。じゃあ、後は俺がやるから、次は・・・そうだな耳でもぞき落としてろよ。目はあとに取つといでやる。自分がどうなつてゐるか見えたほうが、お前も楽しめるだろ?」

悪魔は、優しい声を出しながら、おれの腹の中に手を突っ込んできた。

「なあ…なんでこんな目にあつか、知りたいかあ？」

まるで、他愛ない世間話の口調だ。

右手が、アタマを田指して上がつてくる。

「お前が追つかけてる女さあ」

もうそれどころじゃない、部屋中血まみれで、痛くて、痛くて、痛くて。

左手が、左手までもがおれの意思に反し、耳をつまんで右手の到着を待つた。

「あれ、“俺の”なんだよ。だから、お前があれで楽しんだ分、俺もお前で楽しませてもらおつと思つてな。清算、てヤツだ。」

悪魔がナニか言つている。

でもおれには聞こえない。

耳がアツい、アツい、何か垂れて、痛い、痛い、痛い。

悪魔は腹の中をかき回しながら、はあ、とうつとりしたタメイキを吐いた。

「ぬるぬるで、臭くて、赤くて…興奮しちまつた。くくつ・・・

ははは！あはははははは！」

笑いながら、悪魔はおれの腹の奥深く両手を入れ、それぞれを思

い切り逆方向へ引っ張った。

「あ、おかえり零さん!」

ドアも開けず、音もなく部屋に入ってきた零に、少し驚きながらレイは声をかけた。

「ああ。」

彼女の笑顔に田もくれず、定位置に座ると零はベッドに背をあずける。

いつもどおり表情はほとんどないが、その横顔は何となく少し晴っていた。

「なんか・・・いいことあった?」

レイがたずねる。

「別に。」

そつけなく答えた零の声は、彼を知らないヒトが聞けば不機嫌に聞こえただろう。

「あ、そなんだ。スズキさんと遊びにでも行つたのかと思つたんだけど・・・」

「なんで俺があいつと遊ぶんだ。」

レイの予想に、零は表情を険しくした。

「えー、だつて夕方から出かけたからユウちゃんとなわけないし、あと友達つていつたらスズキさんくらいしか・・・」

「違う。」

「でも友達でしょー?前から知つてるんだつたよね?」

「知つてる・・・だけだ。今日は、“影”を見つけたから回収してきた。」

前から知つている、というフレーズが何となく零は気にかかった。

“影”つて、零さんから出てつちゃつたチカラ、だつけ?じや、また少し元の零さんに近づいたんだねーそつか、だからか。おめでと零さん!..

自分のことのように喜び、笑顔を浮かべるレイ。

キライじやない表情、それを向けられることが、心地いい瞬間もある。

“俺の”レイを取り戻したこと、久々の悪魔らしい行動は、確かに零の気分を良くしていただはずだつた。

それなのに、そのレイの言葉が、笑顔が、不安をよんだ。ヒトである彼女を氣に入つた、自分でもわからない自分。その自分は、邪魔者を消すなどと理由をつけ、結局コイツを守つてしまつた。

それは、コイツを自分のものにしておきたいのは、守りたいのは、ただの欲望だ。

こいつらの言つ、好きだの、愛だの、そんな幻想じやない。

確かに存在する、欲望だ。

俺はちゃんとわかつてゐる。

わかつてゐる、ハズなのに、わからぬ。

何か知つてゐるような、スズキの瞳。

あいつは、何を伝えたかつたんだ？

何を、言わなかつたんだ？

答えはわからぬ、どうせそんなものはない。

俺は俺を、ちゃんとわかつてゐる。

ただ、少し混乱しているだけだ。

人間を、そばにおきたいなんて、今まで思つたことがなかつたせいだろう。

「どしたの？零さん、あたし、何かヤなこと言つちやつた？」

気づくと、レイは不安げな表情に変わつていた。

自分を気遣う、大きな瞳。

純粹な目が見つめているのは、ついさつきまで高笑いしながら、ストーカー男に自分自身の体を刻ませていた悪魔。

悪魔は、うしろめたさなど感じない。

「そうだな、全部お前が悪い。」

ただそう言って、目をそらした。

タイムセールの時間は、子供にとつてそれから帰る時間だ。まだ街灯など必要ない明るいの中を、男の子と女の子がならんで歩いている。

「コウちゃん、手つなげよ」

男の子が言った。

女の子、コウちゃんはわざとじりじりへ困った声を出して笑つ。

「えー、ギーしょっかな。」

もつたいつけると、男の子はせりて迫つた。

「いいじゃん、つなごうよー。」

「やーん、恥ずかしいー。」

言葉は拒否しながら、裏腹に笑顔で男の子をじりすすめ。コウちゃんだけが、ふと何かに気が付き、会話をとめる。

男の子がどうしたの、と問う前にコウちゃんは走り出した。

「あ、なゆだ！なゆー！」

「ちよつと、コウちゃん？」

男の子も追いかけた。

その先にいたのは、彼らよりも少し年上に見える黒ずくめの少年。スーパーの袋を両手にぶらさげて、自分を呼ぶコウちゃんの方をむく。

「よー」

短く挨拶しきものを口にした。

「どしたの？おかいもの？」「うあー。」

彼の買い物を“お手伝い”と思つてこいるコウちゃんは、手放しでそれをほめる。

彼女の関心が、全てなゆ、つまり零に行つてしまつたのは誰が見てもわかる。

コウちゃんは一緒にいるもう一人の男の子の方を向いてもしな

い。

面白くない彼は、必死で会話に入ろうとする。

「ぼくだってえ、ぼくだってお手伝いするよー。」

その言葉で初めて彼に気付いた顔で、コウちゃんが男の子を見た。

「まだいたの？　ばいばい、ミッキー。またね。」

冷たく言い、とびきり可愛らしく笑った。

「くくっ、よくできました」だな、コウ。」

突き放しながらも笑顔で期待を持たせる小悪魔テクを、零はほめてやつた。

ミッキーと呼ばれた男の子のまろは少やく、えーと言ひながらも帰ろうとはしない。

零しか見えていないコウちゃんにとつては、ミッキーが帰つても帰らなくともいいらしく、それ以上彼に何かいつことはなかつた。

「ね　なゆ、明日あそぼつ？」

「ん、んー・・・」

悩むそぶりで零は、だるそうな声を出す。

「じゃぼくも入れて？　ね？」

すかさずミッキーが割り込んできた。

今度はコウちゃんが、えー、トイヤそつな声を出したが、零は一ヤリとして言つた。

「ああ、いいだろう。公園で、1時だ。」

「えーっミッキー来んのよ？」

コウちゃんが抗議するすると、ミッキーはミッキーでわざがに氣を悪くした。

「イヤなの？　コウちゃん。」

責める調子の声に、コウちゃんはイイワケをする。

「イヤじゃないけど、なゆ、ミッキーと遊んだことないし。つまり、零が　ミッキーと面識がないことを理由に、エンドショボると言つているのだ。

自分だけノケ者になりたくないミッキーは、零に直接話しかけて

みる。

「いいよね？なゆ・・・？」

ユウちゃんが呼んでいた名前を、ミツチーも呼んでみる。
相手がどこまで気を許してくれるか、そうして探つていいのだ。
すると、零のほうも親しげに笑いながら、呼び名を確認してきた。

「ああ、ミツチー？」

まだたいした会話もしていなかつたが、これでもう一人は友達だ
つた。

こうなるとユウちゃんも、しぶしぶではあるが認めるしかない。

「なら、三人でもいいけど。」

零は毎日遊んでくれるわけではなく、誘つても断られる場合があ
る。

約束できる機会は、貴重だった。

(続)

別に零は、男友達が欲しいわけではなかつた。

そもそも本物の子供ではないのだから、子供の友達をほしがるわけはない。

その彼がなぜ、ミッキーの存在を許したかというと。

「もー、なんでだよ！さつきからぼくばっかり鬼じゃん！」

鬼じつこをすれば、ミッキーは零に追いつけず、コウちゃんをつかまえればわざと零がすぐ次の鬼になり、あつといつ間にミッキーをつかまえる。

かくれんぼでは、どこかをさがす間に零とコウちゃんは一人して隠れる場所を次々かえてしまい、みつからない。

三人で遊んでいるのに、ミッキーはいつもひとり。

それが、零には面白かった。

コウちゃんの気を引きたがつてゐるミッキーは、最初から零についていいオモチャにしか見えていなかつた。

あからさまなイジメに、しばらくすると当人も氣付く。

「なんか、ぼくばっかりソソンしてる。」

不満と寂しさの混じつた顔で、ミッキーはスネ始めた。

「そんなことないだろ、じゃあ、違う遊びをしよう。」

零は、全く悪気のない表情で言つた。

コウちゃんと仲良くする零に対して、ミッキーが発する嫉妬は美味しかつたし、せつかく手に入れたオモチャをすぐに手放す気はない。

当然、零を好きなコウちゃんは賛成。

「コウちゃん、何でもいいよ。」

ミッキーのほうは疑つてゐる。

「たとえば？」

零は、少しイジワルそうに笑うと言つた。

「お医者さんごっこ！」

「やる。」

ミッチーは即答していた。

ただし俺の考えたやつだ、と零が説明したその遊びは、罰ゲームの連鎖だった。

まず一人、患者役をジャンケンで決める。

他の二人は医者役として、ランダムに混ぜたジュースやお菓子で、クスリをいくつか作る。

ほとんどの場合、味はスゴイものになり、食感も食べ物からは遠ざかる。

テキトーな病名で患者がきて、クスリを処方。

ここで飲みきればクリアで、またじょんけんから始まる。飲みきれなかつた場合、患者はオペと称して一人からつねられる。患者が10秒耐え切ると医療ミスとなり、残つた薬を医者役が飲む、というもの。

なぜか、零はジャンケンに負けることがなかつた。

「なゆスゴーイ！」

コウちゃんは感心し、ミッチーはズルいよー、ど山ネながらモルールに従つた。

仕掛けはカンタン、零は心が読めるのだ。

一度だけ、ギリギリまで迷つて出す手を変えたミッチーに負けてしまつたが、それでも零は顔色ひとつ変えず“薬”を飲み下してから、とつてつけたようになら。

「まよい。」

と言つた。

とつてつけたセリフなのだから、そう聞こえて当然だ。

“悪魔”の彼は、身体の感覚を（意識すれば）殺すことができた。舌と鼻をオフにすると、飲み込む違和感さえガマンすればだいぶ楽だ。

ノドもオフにしてしまえばもつと楽に思えるが、そうするとうまく飲み込むのが難しくなってしまうので、多少の不快感は仕方ない。零が負けたことで、不信感が晴れたミツチーは“薬”を見事クリアした彼に賞賛を送った。

「なゆ、『ンジヨーあるう！』

さて、しばらくしてこのお医者さん（ひそかに一人の苦しむさまを楽しんでいた零以外）誰も得をしないことに気付いたミツチーの提案により止める提案がされ、それは容れられた。

薬のダメージは、ユウちゃんをもむしばんでいた。

その後は、ブランコにのってみたり、ミツチーの聞いて来たウワサ話に、これも付き合いだと零も乗つてやつたりして、さらに時間は過ぎていった。

（続）

話が学校のことになると、ミッシュチーは急に黙り込んだ。

数秒そのままでいると、コウちゃんが彼の顔をのぞきこんだ。

「どしたの、ミッシュチー？」

「忘れ物、しちゃったんだ。」

それがどうしたのが、と零もコウちゃんも黙つていい。

「宿題のノート、もって帰らなこと宿題できないんだった！ヤバい。」

「明日誰かのうつせば？」

コウちゃんが言つと、ミッシュチーは首を振つた。

「間に合わないよ、今日のやつメッシュチャーミーはあるんだー。」

「ママでおこられる。」

「コウちゃんがきくと、ミッシュチーまづなづく。」

「別に、死ぬわけじゃないだろ。」

零はつまらなそう言つたが、ミッシュチーはひざで踏みつけた。

「でもヤだよねえ、ねー？」

「コウちゃんはミッシュチーの味方らしい。」

「じゃ、取りに行けばいい。」

零が言つと、ミッシュチーはおびえた。

「入れる、けど、けどダメだよ！4時おばけが出るかもしれないから・・・」

「あー、あれ？ミッシュチー信じてるの？」

なんでもなさそうに、コウちゃん。

「なんだ、4時おばけって。」

零だけが、それを知らなかつた。

「4時44分にー、学校でオバケが出るんだってえ。」

言つて、怖がるミッシュチーがおかしいのか、コウちゃんは笑つた。
おびえるミッシュチーに、零はこともなげに言つた。

「24時間制で言えば、夕方4時は16時だ。心配しなくていいんじやないか？取りに行けよ。」

誰か（ほまミッチー）をイジめるわけではないただの子供の遊びに、彼はもう飽きてきていて、これを口実に解散したかった。

とはいって、この零の考えには何の保証もない。

よつてミッチーの不安もおさまることなく、彼はさらに迷い続けた。

「えー、でも大丈夫かなー、おばけ出たらどうしよう、やっぱやめようかな。」

取りにいくことを考えるとさらに怖くなってしまったたらしく、ミッチーは激しく独り言をいい始めた。

零は、くつくつ笑い、コウちゃんは歎息つきミッチーに一喝した。

「モー、ミッチーかつに悪いー。」

そこへ零が口をはさんだ。

「んなこたない。一人で行けるよな、ミッチー？」

零の微笑には一瞬の躊躇もなく、ミッチーはそれを詰むことができぬ。

「幸い、暗くなるのはまだまだ先だ。今日はここで別れる」として、お前は忘れ物をとりに行け。」

自然にその場を仕切る零に、ミッチーは流される。

「うん・・・わかった。」

渋々了解したが、コウちゃんには通用しなかった。

「えええー？もうバイバイすんのお？コウちゃんもっと遊びたい。」

零の方も、そのくらいは読みきつけて、イヤツく事も無く対応する。

「送つてつてやるから、ほら行くぞ。」

歩き出すとコウちゃんは、待つてよう、と言ひながらついてきた。

あとから、コウちゃんは一瞬だけふりむいて、

「ばいばい、ミッチー。」

と手を振り、少し元氣のない彼に、ガンバレー、と無責任な応援を投げかけた。

弱々しい笑顔でミツチーがそれに応えると、今度は零が振り向き、じゃあな、と言った。

その後、唇の動きだけでこう付け足した。

“あとで”

それはうまく云わつたようすで、ミツチーはほつとした笑顔を浮かべ、元気に零たちに手を振つてきた。

彼らが見えなくなるまで。

その後、零はユウちゃんとの何気ない会話の中から、学校の場所を聞き出しつつ、彼女を家のドアの前まで送つた。

明日の誘いを蹴つてユウちゃんをドアの向こうへ押し込む。

それから人気のない通りへ入ると、完全に誰も見ていないタイミングを見計らい、姿をほどいた。

霧状になつて高速移動を開始する。

4時44分に、間に合つよつ。

(続)

ミッキーは、正門のところでヒザをかかえ、うつむき加減にしゃがんでいた。

門のすぐそばに生えている大きな木の陰で、零は彼の友達の姿に戻り、声をかけた。

「よう。」

「わっ！」

ミッキーは、女の子みたいな高い声で叫んだ。

「驚かすな、そんなにオバケが怖いか？くくっ」

零は、動搖していない風に感じられる声と表情で言い、笑った。

ミッキーは慌ててイイワケをする。

「違うよ、だつて後ろからくるから……え？ どつから来たの？ 今・

・

不可解そうに言つたミッキーの表情に、少しだけ恐れが浮かぶ。零は、いたずらっ子の表情で笑つて見せる。

「フェンスを登つたんだ、そつとな。」

違和感がなくとも、自然に聞こえようとも大嘘。

とはいっても、今のミッキーには眞実の方が残酷だつた。

「じゃ、行こつ。」

安心しきつた、屈託のない笑顔でミッキーが言った。

陽光は、ゆっくり黄色から橙色へとかわり始めていた。

職員や、委員会活動の生徒がまだまだ残つてゐるらしく、校内にはそれなりに人の気配があつた。

「何だー、これなら怖くないじやん。ね、なゆ。」

「ああ。」

ミッキーの話に適当にアイヅチをつちながら、零はさりげなく周囲をうかがう。

人以外の気配があるかどうか、感じ取るためだ。

ミッチーは当然気付かず話を続け、零はほとんどそれを聞かずにたまにアイヅチをはさんだ。

「…でね、わざ今まで、なゆのことマイジワルな奴って思つてたんだ、『じめんね。』

上の階が怪しい、そつ見当をつけたとたん、耳に入ってきたのがそんな言葉だった。

「…」

本人に向かつて正直すぎだらう、そう思つた零は、つい驚きと呆れが半々の表情でミッチーを見る。

「あ、だから、わざ今までだよわざ今まで。『じめんね？』『じめんね？』

あまりにも考えのない物言いは、誰かに似ていて、零は思わず笑みをこぼす。

「ふふ、かまわない。」

さつき学校に入ったのが、4時半すぎ。
もうすぐ何か起きるはず。

上から感じる薄すぎる気配は、その時本当の姿を現すのだらう。
ただのウワサでなければ、狩つてやる。

零は初めから、そのつもりで付いてきていた。

自分の“影”が生まれる範囲がどのくらいかはわからないが、こ
こは可能性充分な場所だ。

レイの住む場所から、一駅は離れていいない。

調べるくらいの価値はある。

ウワサ話は自然に広がり、広がった分だけ恐怖をバラまくはずだ。
夢の中にいた影のときと同じように、大きな収穫があつてもおかしくない。

ついでに恩を売つておけば、後々いい影響があるかも知れない、
とも思つていた。

下心は満々だった。

そんなことは知らず、良い奴であり、頼れる親友零に、ペチャにじゅたい

くちやといつるさくしゃべりかけていたミッキーが、突然黙った。

変化は、零のほうがよりはつきりと感じ取っていた。

おそらく、今が4時44分なのだろう。

人の気配が、急に消えた。

遠くあちこちからかすかに聞こえていた、声や物音が、ピタリとしなくなつたのだ。

空気が湿り気を帯び、重苦しくなつた。

一種の、結界を作つてゐるらしい。

建物じゅうの人間を一度にどうにかした、というよりは、獲物である零たちだけを周りから切り離し、互いに感知させないようにした、と思えた。

なぜなら、校内の零たち以外を一度に殺せる魔物がいたなら、ウワサなんぞが広まる前にこの学校の生徒はとつくに全滅しているはずだからだ。

ミッキーが、零の服のソーテをぎゅつとつかんだ。

「なゆ、ぼく…トリハダ…」

零はミッキーの目を見て、薄く笑つた。

「大丈夫だ、少し…目を閉じて。」

零の言葉とともに、ミッキーがくずれおちる。

「お子様にはショックイングな光景になるかもしれないからな。」

ついでに、怖がる彼をなだめるのも面倒だった。

強制的に目を閉じることになつたミッキーは、倒れて頭を痛打しながらも、起きることは無かつた。

大人しくなつた彼をその場に残し、零は気配の強い上の階へ進んだ。

(続)

4時44分に出るオバケか。

階段を早足に上りながら、零は考えた。
まだ、インパクトがたりない。

4は“し”と読み、死を連想させる。

4が一つ、たりない。

「4階、だろうな。」

それで“4”が“4”つそろいつ。

子供相手の魔物の条件付けとしては、充分だらつ。
たどりつくと、思ったとおりそこが一番濃い気配に満ちていた。
ミッチャーを置いてきたあたりとは、比べ物にならない ジメット
して薄ら寒い空氣。

呼吸を邪魔するほどひの圧迫感と粘りつく重さ。

思考と行動に、決して小さくはない影響をあたえるであろうそれは、しかし零にはノーダメージだ。

生存に呼吸を必要とせず、その気になれば同じモノを生み出せる
のだから、気になるわけもなかつた。

もし気に障るようなら、いつでも消し去れるのだし。

ここが、建物全体を覆う重苦しい空氣の中心、それを生み出している場所だと、零にはわかる。

目に見えるのと同じように、音がしてこるよう、そこから一オイガするように、触れられるほど確かに、しかしそれらどれとも違う感覺で、わかる。

オバケというからには、それらしい人型の本体があるはずだ。
さつさとそれを始末したいところだが、どこにもそんなものは見当たらない。

ここには、いないのか？

結界の主、学校に出るオバケ。

オバケ、以上の情報がないことが、少々 零を苛立たせた。

ここじゃないなら、他の階だ。

屋上か、下か。

下・・・?

そういうえば、下にはミッチャーを置き去りにしていた。

「あ。」

今、気づいた。

おいしそうなエモノをわざわざ置いて、その場を離れてしまつたことに。

戦うときはいつも一人だつた。

それはほんんどいつでも一方的な狩りで、自分のことさえ考えていればよかつた。

何かを、誰かを守つて戦うことなかつた。

別に、どうしてもミッチャーを守りたいというのではない。ただ、黙つて持つて行かせてやる気にはなれないだけだ。新しく手に入れたばかりの「」の子分は、コウと遊ぶときにはいいスペイスになる。

自分をよく見せたくてたまらない彼は、適度に欲深く、つきあいやすかつた。

人の力タチを、少しの間軽くほどぐ。

と、零のカラダは床をすり抜けて、階下へ落ち始めた。

一階まで、ほぼ一瞬でたどりつく。

上がるとき こうしても良かつたが、出た先にちょうど本体がいた場合、余計な時間がかかるかも知れなかつた。

今は、そもそも言つていられない。

少々不利でも、どうせ自分が勝つのだから、ミッチャーを確保する事を優先した。

零はカラダを固め、ミッチャーのいる方向へ走つた。

黒く、長い影が倒れているミッチャーのすぐそばでゆらめいていた。零は距離をとつて立ち止まる。

黒い煙が、燃え立つていてるようにも見える。

よくある魔物の姿で、はつきりした力タチがないところとは、だいたいが大した力も持っていないということだ。

細長いシルエットは、たぶん零の“影”であるらしい。背格好が似ていた。

ソレは、ただミッキーを見下ろしていた。

「おい。」

零は声をかけた。

ぞわり、と影がうごめいた。

零の方を、振り返ったのかもしない。

何しろ全体が黒くもやもやとしていて、ビートが顔のかもわからぬ。

零はかまわず話しかける。

「お前のモノなんだろ？ 何もしないのか？」

影がそわそわとゆらめくと、零のアタマに映像が浮かぶ。相手は話す事もできないらしく、じかにイメージを送り込んできた。

大きな影は、自分。

その影に驚き、泣き叫ぶ子供。

逃げて行く後姿。

快感と、活力。

「なるほど。」

子供をおどかしては、その恐怖を吸い取って生きていた、ということだ。

校舎全体を覆うほどのは多分無く、ウワサがウワサを呼んで、学校といつ空間に恐怖が蓄積されたことで、ここがヤツの縄張りのようになっているのだ。

「じゃ、恐怖がほしいんだな？」

ざわざわと影が動く。

なんとなく、肯定に思える。

「なら、俺の中に戻れ。」

零は影と同じ、以前の自分の姿をとる。

影が、動きを止める。

「俺は、もつと大きな恐怖を人間に『与える』ことが出来る。」

零の背に、黒い「ウモリ羽が伸びる。

深い闇の色をした、大きな翼。

「お前は、俺だ。」

瞳が紫色の光を放ち、長い黒髪が無数の蛇の群れのように房に分かれ、踊る。

影は動かない。

零は一步踏み出した。

「戻らないなら、消すぞ。出来の悪い「コピー」は必要ない。」

一步目、今度は何も言わない。

三歩、四歩とゆっくり近づく。

あと数歩、というあたりで影が激しくゆらめき始めた。

零は歩を止める。

ざつ、と影が幾筋かに裂けた。

零は神経を集中し、攻撃に備える。

数本の筋状に別れた影は、それぞれ螺旋状に零のカラダに巻きつくと、そのまま彼の中に消えていった。

「・・・俺のくせに、俺にびびりやがった。」

同化する瞬間に、影の思考、感じた恐怖も自分の中に広がった。消される恐ろしさを味わうよりは、その恐ろしい相手と一緒に化したほうがマシと考えたのだ。

「ふん、でも、まあ・・・」

どうやらカラダは、ほぼ元に戻った。

気を緩めても、背の高さも、髪の長さも変わらない。

満足げに微笑んでから、『意識して』零はなゆた の大きさに戻る。

ミッキーを振り起こした。

「ミッチー、おいミッチー。」

眠らせた本人が起こすと、頭を打つても起きなかつたミッチーはすぐに目を覚ました。

催眠なのだから、かけた当人ならカンタンにとけてあたりまえだつた。

「ん、あれ？ や、ぼく？」

「おまえ、オバケだと書いて氣絶したんだ。平氣か？」

心配そうな顔を作りながら、零はもつともらしい嘘をつく。

「でたの？ やっぱり出たんだ？！」

すぐに立ち上がって逃げようとするミッチーの肩を、零がつかむ。

「待て、いなかつたんだ。勘違いだ、一緒に行つてやるから。忘れ物取りに行くんだろ？」

平凡と、なんの表情もなくそう言つた零は頬もしく見えたようで、一瞬間を置いて、ミッチーはうなずいた。

(続)

それからといつもの、ミッチーは完全なる零の子分となり、アタマが上がりなくなつたのだった。

「おこミッチー、あそこここの金髪に向かつて 王野郎つて言つて来いよ。面白こだ。」

「えー、やだよ、あれオトナじゃん、怖いよ。」

零が指差した金髪男を見て、ミッチーは泣きそうな顔をした。

「ああ、きっと怖いだろうな。そつか、嫌か。ふうん…」

零が田を細めると、ミッチーはびくつとして前言を撤回する。

「い、イヤじやないよ、やつぱ…行つてくる。」

渋々。

「くつくつくつ む前、やつぱシンゴー。」

機嫌よく零が笑つと、ミッチーは氣を取り直してうん、と笑顔を見せた。

親友、の響きが嬉しいらしい。

ミッチーが走つていき、少し離れたところに居たその金髪に、例の言葉を浴びせる。

少し間をおいて、ミッチーがこちらに逃げてくると、すぐに零も見つかった。

金髪が、走つてくる。

「じや あなたミッチー！ また今度だ！」

叫びながら零はミッチーを置いて走り出した。

「えー？！ ズルいよ、なゆーーー！」

「またなあ！ ははは！ あははは！」

金髪はミッチーに田もくれず、笑いながら走る零を追いかけた。

「れーーー待てえええーバレてんだからねえええーレイちゃんに言いつけるぞおーー！」

言つまでも無く、金髪とはスズキだ。

「はははー零つて誰だよ、俺は なゆた だ! はははは、ははは
はは!」

楽しそうな笑い声が、スズキの怒声と共に遠ざかって行つた。

「もー、甘いモノばかり食べて、ちつとも『ハングル食べないんだから!』

とか何とか言いながら、自分の部屋でレイはケーキをぱくついている。

自分の働くランコントルから、お買に上げでテイクアウトだ。店長はタダでいいと言つたのだが、レイはちょくちょく買つることやれじや悪いこと言い、結局半額ということになっていた。

その、半額ケーキをレイの向かい側で食しているのは、もちろん零。

したがって、このお説教をうけているのも零だ。

彼も黙つてはいない。

「オトナぶつたこと言つてるつもりかも知れないが、お前の考えくらいわかつてゐる。一緒にメシ食つててシチュエーションが欲しいだけだろ?」

オヤツを食べている普通の子供にしか見えない零から、こりらを馬鹿にした回答が返つてくる。

普通に、くやしい。

「自分だつてー! オトナぶつてるナビケーキ大好きじゃんつチヨゴとかイチゴとかー!」

言い返すと、零は余裕で微笑んだ。

「好き…だつたら悪いのか?」

確かに、オトナだつて甘い物がスキだつたりはする。

零の表情は、まったく子供らしくない。

レイは自分が、間違つていい気がしてきた。

「悪く、ないけど…・・・。」

くくく、と零が低く笑つ。

むしろ、一緒に食事をしたい、と言つても理由が“寂しいから”

とこうレイのほうが子供じみている。

毎日一緒に食事ができればいい、とレイは思い、まるで夫婦のようなその状況に憧れた。

なのに、不意に浮かぶ疑問。

夫婦、伴侶、ずっと一緒にいる相手。

彼は、自分を選ぶだろうか？

これから先もずっと、一緒にいていつか自分を好きになつて欲しい。

それは、彼女の願望だけで、肝心の相手の気持ちは今ひとつ、つかめない。

一応、ちょっとばかりの関心はあるらしいのだが、確かめようとすると返ってくる反応は微妙だ。

好き、ってなんかこんななんじやないよね、とレイは思つ。

今の状態に一番ハマる表現は、

嫌いじゃない。

それでも、だいぶ進歩した。

ねえ、好き？

なんて訊けない。

良くても愛想笑い（その気になると零はそれがとても上手い、が素の彼を知るものにはそれが不気味に映る）、悪ければ…嫌われることもあります。

うつとうとい、と。

一口、三口食べて、まだ半分以上残るケーキを前にレイは食欲がなくなるのを感じた。

「ねえ、零さん。」

返事の代わりに、淀んだ空に似た瞳がこちらを見る。

表情はなくとも、目を合わせてくれたこと、いつもよりかぎりの少ない瞳、言つてしまえば雰囲氣で、若干機嫌が良いのがわかる。だから、少し距離をつめてみる。

レイは食べかけのケーキを一口分フォークで取り分けた。

「あーん。」

ヤな力オされたら、ジローダンヒ鹽つむぎやえぱいいんだもん。
ほんの一瞬、レイにはそれが少し長く感じる。

間を置いてから、零はそれに食いついた。

ぱくん、と子供のように。

すっかりそれを飲み下してから彼は、たまには子供扱いされてや

る、と無表情のまま言つた。

(続)

「風邪じゃねえかバカ。」

夜になつて咳をしだしたレイに、零は冷たく吐き捨てた。

「はなみじゅ、でた。れえさん、ティッシュ。」

箱ごと渡そうとした零の手が、レイの手に触つた。零が、小さくつぶやく。

「ん？」

白い手がレイの頬に伸びる。

「…熱でてるじゃねえかバカ。」

「ふえ、何か、そーやつていわれたらあ、ボーッと…」

「寝ろバカ。」

「でも、おふろ…」

「許さん。気になるなら拭いておけ。」

有無を言わせぬ零が、パウダー入りでせつけんの香りのサラサラボディ、というキヤッチフレーズのついた箱をレイの前に置く。熱で脳がゆだつてしまつたと見えて、レイは小さくうめきながらその場で服を脱ぎ始めた。

パンツを残して全部脱ぎ散らかし、カラダを拭いていたのだが、零は特に何も言わず、ただ彼女の脱いだ服を淡々と片付けた。

翌日その（見られちゃつた）ことを思い出したレイは、深く落ち込んだ。

が、わりと一瞬で忘れた。

幸いすぐに食欲も戻り、あつという間に彼女は回復してしまった。

それから、二日ほど後の朝。

零が寝坊した。

うつすら朱の差す頬が可愛らしくて、レイは隣の寝顔をそつとつ

つぐ。

「んん」

眉を寄せて、小さな声を出す零。
なんかおかしいな、とレイは思う。
もう一回、つんつん。

「う ザ…」

ウザい、らしい。

レイは少し笑って、気づく。
声がおかしい。

おまけに、頬が朱いのも零にはありえない。
どんなに怒つても、真夏の炎天下に何時間さらされても、彼の顔
色はいつも青白かった。

その朱い頬に、触れる。

熱い。

「うそ、熱？！」

その声に零が目を覚ます。

「るせえ…何だ？」

ゆっくりカラダを起こした彼を、レイが押し倒す。

「ダメー！寝てて！」

零は驚きのあまり、無抵抗に寝かされたままつぶやく。

「・・・は？」

「『』めんね零さん、力ぜつつけちやつたみたい・・・」

眉尻を下げ、困りきった顔でレイが謝つた。

「…カゼ？俺が力ゼなんか」

言いかけて、零本人も自分の声の変化に気付く。

・・・つくしゅ。

たぶん、彼にとつて生まれて初めての、くしゃみ。

「ほらあ、零さんハナミズたれてきたよ？」

信じられない、といった顔でぽかんとしている零のハナを、レイ
はパパッとティッシュで拭いた。

「まい、くしゅくしゅ、チーンて。
」
どうも耳に入っていないようで、彼は微動だにしなかった。

(続)

その後、お前がいると余計調子が悪くなると言つて、零はむりやりレイを仕事に行かせた。

レイはひどく心配したが、出かけるかわり零にムリヤリ風邪薬を飲ませ、額に熱吸収ジエルシートを張ることで妥協した。

今日は何もせず寝ていることも、命令半分に約束させた。

そうして仕事を終えた彼女が部屋に戻ると、もう零は朱い顔をしていなかつた。

「あー、熱下がつたんだあ。ゴハン食べれる? すぐ作っちゃうね。

笑顔のレイを、零が止めた。

「いや、いらん。」

「食べらんない? でも食べた方がいいよ? ちょっとでもいいから。」

「逆だ。」

言つている意味がわからず、レイは黙つて零の説明を待つた。

「俺たちは、もともときまつた形すらない不安定な生き物だ。ヒトの生活をしていればそれに適応して、カラダがヒトに近づいていつてしまつ。自分でも信じられないが、今回のこととは多分それだ。俺は、今まで力ゼなんかひいたことはなかつた。」

急にレイが、ふふん、と得意げな顔をする。

「零さん、力ゼひかないのはおバカさんのシルシなんだよ?」

零は眉ひとつ動かさず切り返した。

「迷信だな、お前でもひくんだから。」

レイは、うぐ、とうめいた

あれから、零が食べ物、飲み物を口にするといひをレイは見てい

ない。

レイがいなくても、多分それは変わらないだらう。
そのせいか、夕食の献立に渋い和食が出るようになつた。
ダシをとらず、めんつゆベースでかなり色々なものを作る手抜き
は、いつたいどこで覚えてきたのか。

(一日家にいる彼は、実はそれをTVのらくらくクッキングとい
うコーナーで学んだ。家事に関する知識はあまりないので、主婦の
マメ知識的な番組は新鮮でタメになり、今のところ飽きなかつた。
しそうゆとの割合だけで味を調節しているフシがあるが、レイに
とつてキライな味ではない。

また、何か意見したところでどうせ聞き入れてもうえそういうもの
ので、黙つておくことにしていた。

さりに、夜の外出も度重なるようになつた。

「お前と一緒にグースカ寝てたらカラダがなまる。
と、いうことらしい。

全く食事をとらず、夜も留守がちになつてしまつた零に、レイは
寂しさを覚える。

ちょっとだけ、不満も。

もつと一緒にいたいのに。

ゴハンだつて、一緒に食べたいのに。

普通の、恋人同士みたいに。

そんなこと、思つても言えない。

不安だけど、これ以上彼が遠くなるのが怖い。

ねえ、好き？

なんて、ゼツタイ訊けない、けど。

「ねえ零さん、まえ言つてたよね？あたしのこと、少しばかり気に入
つて、くれてるんだよね？」

零が、口元だけで にいつと笑つた。

「そうやって、俺の事だけ考へてるつちは、な。」

あいまいさの残る答えは、よけいに不安をあおる。

「じゃ、じゃあもつと…」

もつと好きになれば、少しあは優しくしてくれる?
言いかけて、別の不安に襲われる。

重い、ってイヤがられたら。

追えばいつもかわされる。

いつか、かわすだけでなくそのままどこかへ消えるのではないか。
時折襲う不安が、今現実になってしまったたら。

レイの表情を、零がうががつてている。

気付いても、すぐに笑つて「コマカ」ことができない。

不安が、大きすぎて。

お構いなしに、零が口をひらく。

「…もつと? お前にそんな余裕があつたとは知らなかつた。くく
くつ。」

「余裕なんかないよ! ない、けど。」

いつでも精一杯、全力で、たぶん片思いをしている。

それでもきっと、まだまだずつと、もつとのキモチは大きくな
る。

もつと好きになる。

そばにいれば、いるほど。

好きだから、不安にもなるけれど。

「けど?」

零が促しても、想いをそのままぶつけるのは、まだ怖い。

「・・・だから、えと・・・んつと、あのね、ずっと、一緒に・
・・いてね?」

迷ううち、これくらいなら言つても大丈夫であろう、きこてもう
えそうなオネガイが口について出た。

零は一矢つくるをやめ、無表情でレイの顔を見つめてくる。

ずっと、は余計だつただろうかと、レイは少し不安になつた。

うつすらと、零の顔に呆れが広がる。

「なんだそりゃ。今はそんな話じゃないし、前にも一緒にいてや

るって言つたよな？ 言つたよなあ？！
プロポーズのようなやりとりだった。

しかも返事は〇×。

だが、零に言葉以上の事など期待できるハズもない。
おまけに彼は、かみ合わない会話に苛立ちはじめた。

それでも、不安はやわらぎ、レイは微笑んだ。

それを見ている零の表情は、なんとも言えないフクザツなものだ
った。

その日から零は、夜間の外出をぱたりとやめた。

命令ではなかつたが、一緒にいて、といつ葉に、彼なりに思つ
りこながあつたらしい。

かといって、一緒に寝てはくれない。

深夜番組を見続け、少なくともレイが寝るまでは起きてい
る。もちろん、朝も。

寝なければ寝ないでも、あまり問題はないといつ。

「えー？ そんな事いつて、あたしが一生懸命オシゴトしてゐる間、
おつひでお毎寝してゐるんでしょう？」

〔冗談半分にレイが言つと、零は言い訳もせず

「たまに。」

あつさり白状した。

「ズルい・・・お毎寝するなら夜寝てもいいしじょー！」

「う・・・」

小さく、零がうめいた。

レイの言葉に押されたのか、その後は時々、一緒に寝てくれるよ
うになつた。

それでもあいかわらず、何も口にしない日は続いている。
好きだつたケーキすら、全く食べていない。

ガマンしているだけで、本当は食べたいのだらつ。

雑誌にスイーツの特集が載つていれば、ほんのわずか悲しげに眉
をひそめ、TVにケーキが映ればチャンネルを変えた。

毎日ケーキを扱つていながら、いつこうにそれに飽きず、むしろ大好きなレイは、この反応に少し困つて、とうとうある用意い切つてこう言つた。

「少しば食べなさいつ！」

たんつ、ヒランコントルのお持ち帰りBOXを、零の前に置いて。突然の命令に驚いた彼の顔には、一瞬後、それはそれは淡くかすかに、照れがうかんだ。

朱く、ではないが少し顔色が変化した、氣もする。

嬉しいのか、それともやせガマンがバレて恥ずかしいのか、ちょっとレイにはわからない。

両方なのかもしれない。

初めて見る表情。

ほらね、と彼女は思つ。

昨日よりもっと、今日の方がもっとともつと好きになつたよ、零さん。

ぴんぽおん。

チャイムを鳴らしたのが誰か、ドアを開けなくとも零にはわかつていた。

セールスであれば居留守を使つてしまつて、ドアの外まで感覚の伝わる範囲を広げたからだ。

セールスではない、が家事の手を止めてまで出る相手ではない。

「入れよ。」

ドアの外まで聞こえるほどの声ではない。

それでも、伝わる。

向こうも外で答える。

ドアのすぐ向こうに相手がいると思える、普通の音量。

「君の部屋じゃないだろ？ 出て來い。」

多少のイラ立ちを含んでさえ、なおも柔らかく響くスズキの声。ドアを隔てて、広げた感覚が零に言葉を運ぶ。

「入りたくなきやそこで話せ、忙しい。」

それが伝わるか伝わらないかのうちに、スズキは鍵のかかったドア通り抜け、ベランダに居た零の後ろに立つ。

「文句言いに来たのに、なんで僕が君のワガママ聞かなきやいけないんだよ！」

「文句をいいにきたのは、お前の“勝手”だからじゃないのか？」類をピンク色に染めて頭から湯気を立てているスズキに対し、零は眉一つ動かさず、流れる水よりさらりとした答えを返した。

「かつ・・・てなのはいつも君だろ？！」

文句を言われても、零は家事の手を休めない。

「そうカツカするな、アタマ冷やせ。」

言葉とともに、零は肩越しに持っていたモノをスズキの顔へ投げつけた。

ペしやり、と音をたててソレは彼の頭全体に軽く巻きつぶ。

「つめたつ…何、こ」

はずしたソレが何だかわかつた瞬間、スズキは絶句した。

「・・・」

表情をなくした彼は、今どんな顔をしていいかわからないに違ひなかつた。

白地にピンク色の刺繡。

スズキの目には入つていないが、タグには「D・75」と記されている。

普段はレイの胸に装着されているものだ。

零はさつきから、洗濯物を干していたのだった。

「これ・・・」

か細い声で言つて、零にソレを返すと、スズキは一言い残して外へ出た。

「終わつたら、呼んで・・・」

零はそれを聞いて、吹き出す。

「ふふっ」

こらえるといつことを、彼は全くしなかつたので、スズキはマトモにその声を背に浴びたが、アタマの中はそれどころではない。抵抗する気力もないその姿も零には可笑しく、高笑いはしばらく響き続けた。

それもおさまり、数分後、よりかかっていたドアが開き、スズキは転倒しかける。

「入れば？」

そのドアの隙間から、ぬつと零が顔を出す。

「君が出て来いよ。」

我に帰つたスズキの声は、多少不機嫌だ。

「スネるな。紅茶、好きだろ？」

「入れてくれるの？」

驚いた顔で、スズキは聞き返す。

「ああ、入れ。」

零は、さらにドアを大きく開き、スズキを招き入れた。

「…じゃ、おじやま、しまーす。」

スズキは、戸惑いながら中に入つた。
ティーバッグでカンタンに入れた紅茶が、可愛らしいカップに入つてスズキの前に置かれた。

「あ、いいニオイ。アツプルティー、かな?」

すっかり機嫌を直したスズキが、頬をゆるめてそうきいた。

「ああ、レイが気に入つててな。カップもあいつのなんだが、構わないだろ?」

くくく、と意地の悪いことこの上ない顔で零が笑つた。

「えつ、いや、僕は…」

さつきのことを思い出し、困った顔をするスズキ。

「くつくつく。」

零がまた笑う。

「何だよ。」

さすがにスズキも少しムッとする。

「キレイに洗つてあるから、安心しろ。」

まだ笑つたままの零の顔は、とても愉快そうだ。

「わかつてるよー別に僕は…」

その後なんと言つていいかわからず、スズキはカップをガツとつかみ、一気に紅茶をあおろうとする。

「ぶうえあづあつ…!…!」

まだ熱すぎたらしく、盛大に噴き出しながらスズキは叫んだ。

「温度考える、ばか。」

零は呆れた目をして言つと、立ち上がつた。

「だつて君が」

「ちゃんと拭いとけ。床は汚してないだろ?」

涙目で言い返そつとするスズキに、零はキッチンからフキンを投げつけた。

無言でテーブルを拭くズスキに、すっかり満足した零は、低位置に座りなおしながら今気づいたように用件をきく。
（続）

「そういうやお前、何しに来たんだ？」

「君が言つかあ？！」

ハナシをさせてくれなかつた張本人の言い草に、スズキのガマンも限界を迎えた。

「モーアタマきたつ！」

テーブルの横にまわりこみ、零の隣に来ると肩だの背中だのをどつすどす叩く。

ぶつとい腕の攻撃力は、決して本人の顔つきや性格のようにヌルくはない。

「うおっ、重っ、わかつ、たつ！きくつ、からあ！」

振り下ろされるたくまし過ぎな腕を、あまりにもきやしゃな零の手がなんとかキャッチすると、やつとそのささやかな暴力行為は止んだ。

「…なんで殴つてる方が半泣きなんだよ。」

「君が、なんつつにもわかつてくれないから…。」

「何をだ？ そこを言わなきゃ わからんだろう。」

うつかりいらんこと言つ零。

「だからつ！ 言おうとする君がつ！」

押さえる手を振り払つて、再度バイオレンスマード突入。

「聞く！ 今度は、ちゃんとつ！ な？」

攻撃を受け止めつつ、真剣な声色でなだめてやると、やつと暴力ループから抜け出すことができた。

「じゃ、ちゃんときてよ？」

のそのそ元の位置に戻りながら、スズキは釘をさした。

「…レイちゃんがね、今後あまりランコントルに来ないでほしい、つて。」

「なんでもた。」

うつむいて話すスズキに、頬杖をついた零が興味もなさずつて合
いの手を入れる。

「それが、僕も気にしてはいたんだけど、その、周りが、つるさ
くて、ね。」

「その先をいいにくそうに、スズキはさりげなくてをむく。

「うるさい？」

「いぶかしげに、零が問う。

「……前、いわなかつたつけ？みんなが、僕とレイちゃんを……くつ
つけようとするつて。」

「ああ

そういうことか、と零は納得した声を出した後

「勝手にくつつきやいいじゃねーか。」

と言つて笑つた。

「やめろよ、そんな事思つてないクセ！」

スズキの声は、少し怒つている。

「別に構わない。お前だつてあいつの為ならどうなつても構わな
い、だろ？」

挑発的に零が笑顔をうかべると、スズキは嫌悪感をむき出しつけた。

「僕はケンカしに来たんじゃない。なんでちゃんと話が聞けない
かな、君は。あの口のことだから？」

「俺が聞いてないんじやなくて、お前の話し方がヘタなんじやな
いのか。」

しつつと言い返す零に力ッときかけたスズキだが、言い返すこと
はしなかつた。

これでは永遠に話が進まないからだ。

零のペースには、さつきわんざん振り回されたばかり。
キヤツキヤしてるようでいて、スズキもオトナだった。

「それは……悪かったよ。でも、とにかくこのままじや、僕はラン
ゴントルに行けないし、みんなレイちゃんに新しい彼氏候補を次々

紹介しようとするし、君にも僕にもよくなないと思つんだ。

「俺には関係ないだろ。」

「あるでしょ。もしその候補の中に、レイちゃんのタイプで、しかもすつこに優しい男の子が現れたらどうするつもり?」

「は?」

「とられちゃうよ?...」

ぐいっ、とスズキが顔を近づけると、頬杖をやめて零は一瞬身を引いた。

「あいつは俺を」

「人はね! 変わるよ。」

零の反論にさらに強く言葉をかぶせるスズキの囁つきは、妙に真剣だった。

零は口をつぐむ。

「レイちゃんに限って、そんなことないと思いたいけど、それでも可能性はゼロじゃないと思わない?」

「...」

「それで、僕考えたんだけど。」

何も言わないままの零の態度を、納得したものと取つてスズキはみずから思いつきを話した。

「俺が、ランコントルに?」

疑問を含んだ零の声に、スズキはうなずいた。

「そ。お客様としてでもいいし、同居人として迎えに来た、でもいい。イヤなら彼氏だなんていう必要もない。あ、ただし ちゃんと大人バージョンで来てよ?」

ここで、軽くスズキは零の全身に視線を走らせ、笑つた。

零は表情を変えないが、それは何も感じないのと同義ではない。

「“零”的ことはみんな知ってるはずだし、レイちゃんの態度でわかつてくれると思う。」

「...結局彼氏アピールだろ、それ。」

「だるそうに、零。」

「だから、イヤならそこまでしなくて、レイちゃんの好きな人が、彼女の手の届きそうな距離にいるってことだけでもわかればいいんだって！」

スズキは熱心に、とこりより必死に零に語りかけた。

「あいつは調子に乗るとウザいんだ。」

零はだるそうな顔から、イヤな顔に変わり果てている。このふんぞり返りつぶりには、スズキも眉をひそめた。

「たまには喜ばせてやれよ、家事だけじゃなくてさー！」

「家事をなめるな。」

どっちを向いたプライドなのか、表情をひとつこめた零の目は鋭い。

「手抜きでしょ！？」

スズキがぴしゃりと指摘すると、心当たりに

「う

と、零はのけぞった。

勝負あり。

「ねえ、そんなにあの『喜ばすのイヤ？』

悲しげな表情のスズキに、零は面倒くさそうな顔をするだけで、

何も言わない。

「…とにかく、よろしくね。頼んだよ！」

スズキは勝手に話をまとめるど、にっこり笑い、残りの紅茶を飲み干した。

「喜ばせる、か。」

スズキの使ったカップを片付けながら、零が薄く笑みを浮かべたとき、スズキはもうその場にいなかつた。

(続)

「いらっしゃいませ、何召サマでしょ、う？」

レイはメガネをかけた青年に、愛想良くな笑いかけた。

「ひとり。」

からみつく低い声には、聞き覚えがある。

レイは改めて、相手の顔を見た。

「えつ」

思わず漏れた声に、相手はただ、ぬめりと湿り氣のある笑いを浮かべた。

目の色も、彼以外にまずありえなかつた。

「零、さん？」

大きなレイの声で、店内に居たウエイトレスや、数名の客が振り向いた。

“零”が“誰”であるか知らない客たちは、そこにいたごく普通の青年に対する興味をすぐに失い、自分たちの会話や、今までしていたことの続きを戻つた。

ウエイトレスたちは、仕事に戻るふりをして、チラチラ零を盗み見る。

金が無くてレイのところに転がり込んだあげく、急にいなくなつたサイマー男“零”。

それが、レイの周りの者が知つてゐる“零”。

ただし、レイは事実をほとんどそのまま話しただけで、恨み言らしきものをこぼしたことは、ない。

すべて丸くおさめられるほど、ウソが上手くないだけだ。

その零が、久々に姿を見せたことは、ウエイトレスたちの興味を充分ひきつけた。

零を盗み見ながら彼女たちは、みんな同時にほほ同じ感想を持つ

た。

「コイツ、こんなヤツだつたっけ？」

それもそのはず、零はちょっとした擬態をしていた。

ランコントルの面々が知る、そしてレイの知る“元々の零”は、青白い顔でいやに赤さの目立つ薄い唇をして、長い黒髪を不気味に振り乱した恐ろしく背の高い枯れ木のような男。

だが今 来店したこの男は、どこにでもいそうな、大人しそうな青年で、背も人並みなら、髪も首筋があらわになるほど短く、振り乱しよりも無い。

確かに肌は白めだが、顔色が悪いというほどではない。
とにかく、普通だつた。

なんなら、優しそうだつた。

そんな疑問に満ちた視線を送るレイ以外のウエイトレス達に、零はかけていた眼鏡をはずすと、挨拶がわりに微笑みかけた。
もちろん、視線に込めた力で、彼氏像としてありえない以前の零を、思い出せなくなつてもらうためだ。

メガネで彼の力が遮断されるワケでもないが、かけているほうが視線や目の色を強く意識されずにする。
相手は零に怪しさも恐怖も感じないから、彼を人間として認識し、無闇に影響をうけづらい。

子供の姿の零が怖がらないと、同じことだ。

行く先々で怖がられ、みんなが彼のいいなりになつては“彼氏”として成立しない。

人間にはない要素を、できるだけ隠して擬態し、レイの“彼氏”のできあがりというわけだ。

瞳が光らないよう、気を使いながら微笑む。

これで零は、彼女たちにとって“名前くらいしか知らない、レイが好きになつたらしい男”になる。

その上で、優しい彼氏を演じてみせる。

レイには、期待させておいて二人に戻ればいつもの零という肩透かし、周囲には、任せておいて安全な彼氏としての認識を植え付けられる。

これで、他の男との縁は完全になくなる。

スズキから文句を言われるスジアイもなくなり、レイが零以外を気に入ることもない。

カンペキだ。

何より、優しい顔でレイをからかうのは面白い。

零はそんなことを考えていた。

向こうだつて何度もダマされているわけだから、気付きはするだろうが、何も感じないわけはない。

しかし ただダマせば怒らせるだけだが、今回は“スズキのため”というイイワケがある。

人間は、誰かのため、というシチュエーションに酔いやすい。

思い切りレイをもて遊んでやれるこの機会に、それを有効利用しないテはない。

リアルタイムで進行中の零の考え方など全く知らないレイは、席に案内しながら小声で話しかけてくる。

「れ、零さんどうしちゃったの？何で来たの？あ、イヤとかじやないんだけど、でも何で急に？」

この擬態（変身）にも、急な出現にも予想通り慌てまくっている。そんなレイを見る零が浮かべている笑顔は、作り笑いではなく、心底たのしくて出たものだった。

「それはな

レイの肩をつかむと、零は彼女の耳に口を寄せた。

「お前の“彼”を、ここに連中に見せるためだ。スズキに“迷惑”がかからないようにな。

なるほど、と田を大きくした後レイはもう一つだけ確認する。

「お芝居？

それに対しても零が見せた微笑は、恐ろしく優しかった。

「もちろん、スズキのためだ。」

レイはほんの少し眉を寄せ、残念そうな顔をしたが、すぐに納得し笑顔を見せた。

いまさら何を期待したのか。

レイが一度奥へひっこむと、少し間をおいて別のウエイトレスが水を持ってきた。

(続)

金髪タテロールのツインテール、ミミカリヤン」と守佐美瑞希。元々ここにこの客（？）だった零のほうは、彼女たちの顔を知つているし、頼みもしないのに普段から家で彼女たちの話をさんざん聞かれ、誰が誰かはじゅうぶん把握していた。

ミミは、さりげなく“零”をまんべんなくチョックして去つて行つた。

オーダーをとつにきたのは、日向寧々子、通称ネコ。ショートカットの元気少女で、あまりの活発さに男の子とまちがわれたこともあるらしい。

こちらはストレートに話しかけてくる。

「はじめましてー！“零”さんですよね？
あたしネコって言うんですけど、ようじぐ。
で、零さんて、確かレイと一緒に住んでたんですね？
え彼氏彼女でいいんですよね？」
ウエイトレスと零、という立場以外で今までネコと接したことのない零だったが、レイの話からネコがよくしゃべるとは知っていた。それでも。

ハンパねえ・・・。

質問攻めに遭い、零の顔はひきつりかけていた。

ネコの質問はまだまだ続いていた。

「で、ぶっちゃけレイのことどんくらい好きですか？
デートとかつてどこ連れてつてるんですか？
てか何してるヒトなんですか？
あ、トシつていいくですか？
いつから付き合つてるんですか？
前にウチの店来てましたっけ？
あ、そーいえば、注文なんでしたっけ？」

「ヒンパイアショウヒと、モカで。」

多すぎる質問はスルーで、零は何とか笑顔を作り注文だけをすませた。

ネコのまつ毛だけ言つと満足して、オーダーを復唱すると去つて行つた。

ケーキとコーヒーを運んできたのは、亀田結花里、“ゆっくり力メちゃん”。

少し…だいぶほつちやつしているが、まとう雰囲気がとても優しく、ゆっくりした動作と話し方も、接する相手に癒しを与えてくれる。

零には効果もないが。

「おまたせいたしましたあ」

品物を置いた後、丸い顔についた丸い目で、じつと零をみつめてくる。

零は、とりあえず微笑んだ。

「何か？」

問う彼に、カメちゃんは少しアタマを下げた。

「レイちゃん、よろしくお願ひしますね。」

「どうも。」

レイよりいくつか年下だと聞いていたが、まるで姉の態度だ。改めて零は、我が主のしょーもなさを思つた。

お高いランコントルの、さらにチョコレートの中で一番高いケーキをじっくり楽しむと、零はレシートを持つてレジの前に立つた。気付いてレジに入つたのは、御手洗 翔。

レイの幼馴染で彼女を追いかけてランコントルへ来た青年。

が、恋愛感情は無いようで、今のところ零も彼を何とも思つていない。

「2,050円です。」

普段キッチンで雑用をしている彼は、愛想笑いもなく言った。

“普通のヒト”らしく財布から出した金を置くと、零はメガネを

はずした。

「翔くん？」

呼ばれて顔をあげた翔の目が、まともに零の視線にむけられる。

人間には理解できないチカラを含んだ、視線。

意識や記憶に細工をされれば、自我を保っている限り誰でも違和感を覚え、表情にわずかなりとも影響する。

つまり、一瞬フシギそうな顔になるのが普通だ。

それが、翔は違った。

眉をひそめ、不審者を見る目つきで零を見つめ返してきた。

零は慌てることなく、メガネのレンズに軽く息を吹きかけ、ホコリを払う仕草をしてみせる。

その上で、メガネをかけなおすと、敵意が無いことを示すために、笑った。

何か言いたそうな顔で、翔は黙つてレジのキーを打ち、清算する。レイが言うところによると、この翔はオバケが見えるらしい。つまり零たち、人外の持つ力を意識して感じ取ることができる。以前そのせいで女の靈に憑かれた翔を、零は“なゆた”的姿で助けたこともあつた。

もつと強い力で記憶を操作しても良かつたが、思いなおした。この翔は、あまり強引なタイプではないし、レイを姉（たびたび妹）のように慕っているから、おかしな男を紹介することもないだろ？

出てきたレシートを手渡されるときに、零は先手を打つた。

「翔くんて、オバケ、見えるんですね？」

相手は黙つている。

零は警戒に気付かないフリで続ける。

「俺、そういうの引き寄せやすいらしくて、時々取りつかれたりしちゃうんですよね。」

気弱そうに苦笑してみせると、相手は不機嫌な顔つきになる。

「もう、黙つてつて言つてるのに、レイさんは。」

レイへの不満を口にした。

どうやら、零への不信感はぬぐえたようだつた。

さりにつまくいけば、今までの不都合な事実はすべて、その辺で
とつつかれたオバケのせいになるだろつ。

「大丈夫、俺は誰にも言ひません。でも、時々相談させてもらつ
ても、いいですか？」

唇の前で人差し指を立ててから、なるべく人が良さそうに見える
顔で、零は笑つた。

うなずいて、翔も少し笑つた。

零はついでに、翔にも“良い彼氏”をアピールしておくれことし
た。

「レイ、そろそろ上がりですよね。もう来るかな？」

「そうですね、裏口に回つてもらえれば会えると思いますよ。」

ありがとう、と笑い零はランコントル従業員用通用口へ向かつた。

(続)

勝手にドアを開けると、少し奥にド金髪の中年男が見えた。
ランコントルの店長、五月女だ。

ここにキッチンを仕切り、ケーキもほとんどは五月女が作る。全て一人で、というわけでもないのだが、いない日は全てのメニューの仕上がりに微妙な影響がでて、客の中にはそれに気付くものもいた。

五月女が零を見つけ、声をかける。

「ああっ、お密さん、こっちから入っちゃダメダメ。表まわってね。」

「あ、違います。俺、レイを迎えてきました。」

「あー、彼氏さんかあ？」

五月女は、油断しきつた笑顔を見せる。
見るからにダメしやすそうな男だ。

「俺、零って言います。ゼロって書いて、れいです。」

”彼氏の零”を印象付けるため、自分から名乗る。
会ったことはない男だが、零の評判くらいは知っているだろ？
零がメガネをはずそうとすると、予想外の反応が返ってきた。

「へえ、苗字は？」

五月女は、まだ笑っていた。

何気ない一言に、零は一瞬凍りつく。

今まで、上の名前などきかれたことがなかつたからだ。
下の名前がレイと同じ音だから、上も気になつた。
きつとそんなところだらう。

こんな何でもない質問で、あまり間をあけるのは不自然だ。
零はとつさに、よく聞くありふれた名前を口にしていた。

「サトウです。」

髪も黒いし、顔のつくりもそんなに濃くはない。

瞳はカラー・コンタクトだとでも言つてしまえば、スズキほど不自然ではなかつた。

「へー、サトウくんか。待つてな、レイちゃん呼んでやるよ。」

「ここと五月女は奥へ行こうとするが、今思いついた名前をレイが知るはずがない。」

零は内心慌てながらも、平静を装つて止めた。

「いえ、すぐ来るハズですから。あと、俺のことは零って呼んでください。」

「なんで？」

悪気なく聞き返してくる、五月女の鈍感そうな顔が零には腹立たしかつた。

イイワケを考えなくてはいけない。

「自分の苗字、キレイなんです。すごく平凡だから。」

クチからでまかせだが、五月女は笑つて同意した。

「あー、あるよなあ。オレもだよ。五月女、っていうんだけど、オトメつて響きがキレイでさー。」

だからオレは、太市つて呼んでくれ、零。」

「はい、太市さん。」

取りつづくろえた安心感も手伝つて、零は自然にほほえんだ。
また記憶を操作しそびれたが、この男にもその必要はなさそうだった。

そこへ、ちよづじょくレイがやつてきた。

「あ、零さん」

あのまま帰つたと思つたらしく、意外そうな顔をしている。

「おつかれさま。」

優しく零が笑いかけると、レイは誰が見てもトキメキてんこ盛りのとろけそうな表情をうかべた。

五月女が不器用に気を利かせる。

「おっ？ オレ、お邪魔？ ははっ、じゃあな一人とも～。」

「あ、おっお疲れ様でした！」

その声で正気に返つたレイを外へ追い出し、五月女は笑いながらドアを閉めた。

バタン、と音がした瞬間 零の顔から笑顔があとかたもなく消え、レイは残念がる。

「ああっ、”優しい零さん”が終わっちゃったー。」

それに対しても零は、特に不服そうにするでもなく無感情にはき捨てる。

「なんだそりゃ。ほら、帰るわ。」

さつさと歩き出す。

「はあい・・・でも、ホント変に優しくて、ドキドキしちゃった。

あは。」

嬉しそうにレイは笑つた。

「嬉しそうにしていいのか？これでお前に本物の彼氏とやらはできなくなつた。永遠にだ。」

言いながら、何かおかしい、と零は思つ。

「え、それって、なんか。」

夢見がちにうるむ、澄んだ瞳。

コイツが見ている俺は、本当の俺じゃない。

俺が何をしてきたか、知らない。

自分をつけまわしたストーカーが、誰に、どんなふうに殺されたのかも。

たとえば血まみれの俺を、コイツはどんな目で見るだろ？

そんなことを考える、俺は、おかしい。

本当の俺じゃない、俺。

その俺に笑いかける、レイ。

からかって、だまして、楽しいハズなのに、楽しくない。

気分は口調に影響し、必要以上に突き放した言い方になる。

「そういう意味じゃない。一生独身決定つてことだ。」

レイは眉をひそめ、スネた表情になる。

「・・・零さんがいてくれれば、いいもん。」

「俺は彼氏じゃない。」

人間ですらない、お前たちの敵だ。

お前たちを殺すこの手に、本当の俺に、お前は抱きしめられたいとは思わないだろう。

「今は、そうかもしないけどお。」

存在に隔たりが、ありすぎる。

「今も、これからも、ずっとだ。」

悲しい顔をするレイから、俺は皿をそらす。

「俺は、ヒトじゃないんだからな。」

「知ってる、でもいいの。」

すかさず反論した彼女の心は、俺しか見ていない。
はつきりそれがわかる。

こんな時、ふだんなら感じるハズの優越感が、今はやつてこない。
かわりに訪れた、胸の中のもう一人の自分を、誰かが抱く感覺。
その腕は刃。

切り裂かれる。

流れ出していくのは、血じゃない。

リアルじゃないくせに、リアルすぎる痛みが幾重にも勝手な軌道
をとつて俺を貫く。

俺を抱き、刻むのは誰だ。

俺自身とも、見知らぬ誰かとも思える。

寂しく笑うレイの笑顔が呼んだ、得体の知れない俺の一部。

眠つている。

あの日から、ずっと。

時は、僕たちのなかで。

俺は それを 解き放つ

ふたたび動き出した時は、君を苦しめるだろ。

僕は…君を…苦しめる。

君は…僕を…その時、どうする？

もう大丈夫だ、と言った零の言葉を半分だけ信じてランコントルへ行つた僕を迎えたのは、いつもよりさらに明るいレイちゃんの笑顔と、支離滅裂なノロケトークだつた。

僕の予想よりずっと零はうまくやつてくれたらしいへ、レイちゃんには

「残念ですけど、あきらめるしかナイですね。」
と、なぐさめられた。

これで堂々とランコントルにも行けるし、もしかしたらレイちゃん達は今までよりもっとうまくいくかも知れない。
つていうのは、せすがに甘いかもしれないけど。

それでも、レイちゃんの嬉しそうな顔を見た僕は、零をほめてあげたくなつた。

お礼を言うほうがいいのかな。

でも、悪魔つてほめたりお礼を言うの、どうなんだ。

今までも、だいたい最後は叱るか言い合になるか、つてパターんばかりだつたし。

そんなことを考える、とこより悩みながら歩いてくると、小さ

な女の子の声が耳に飛びこんできた。

「なーゅつ！ シュラバ」「うとちゅうだよー？」

数メートル先に、呼ばれた彼は たたずんでいた。

女の子の声がする方でも、僕の方でもない、どこかを見て。

「なゆくふ？」

声をかけると、やつと我に返った様子でこちらを向いた。

「お前か。」

「どしたの？ 呼んでるよ、女の子が。」

声の主である、小さな女の子が駆け寄ってきた。

「なゆー、どしたの？」

可愛いが氣の強そうなその女の子を無視し、なゆーこと零は僕をみている。

「今、レイに似た女が」

「レイちゃん？ 店にまだいるハズだよ。」

「あいつじゃない。あいつより背も、力も、髪も長かった。」

どこかぼんやりとした表情で、ぽつぽつと話す零は、記憶をたどつているかに見えた。

「それって、似てなくない？」

「似てるんだ。雰囲気、みたいなものが。」

「・・・なに、それ。」

ぽんやりしそぎて、いまいち伝わってこない。

零にくつづいている女の子は、困った顔で話が終わるのを待つている。

きつと僕も今、あんな顔をしているのだろう。

「・・・なんでもない。じゃあな。」

きびすを返した零を、僕は呼び止めた。

「あ、待つて待つて、レイちゃんの件、アリガトね。」

お礼くらい言わないと。

と思つたのだが、返事は無愛想そのもの。

「ああ。」

やつぱり、お礼言われるのとかキライなのかな。

無表情はいつもの事なのに、僕は焦つて話題を探した。

珍しく協力的な零に、無意識で期待したのかもしれない。

彼と、僕たちとの関係改善を。

「おかげでさ、あのストーカーもいなくなつたよね。」

たまたまかもしれないが、いつもレイちゃんを変な団つきでジロ

ジロ見ている、気味の悪い男に今日は出会わなかつた。

彼氏がいるとわかつて、あきらめたのかもしれない。

零も気にしていたし、それが今度のことの成果であれば、悪い気はしないだろ？

ところが、零は本当に、僕が思う以上によく動いていた。

「ああ、アレなら殺した。」

「え・・・」

すべてがうまく回り始めた。

そんな僕の幻想を、目の前の悪魔はたつた一言で、無表情に打ち砕いた。

そうだ、思い出した。

思い出さなきやいけないくらい、忘れていた。

僕の前に立つてるのは、よく知っているはずで、だけど理解なんか到底できない、悪魔。

そして、僕たちは友達なんかじゃない。

どんなに、願つても。

僕だつてもう人間ではないから、かなり長い時間を生きて、色んな経験をした。

彼が当然のこととして人を殺すことも知っていたし、僕に絶望を与えたいがために、それを詳しく話して聞かせることも一度や一度じやなかつた。

なのになぜ、忘れたりしたんだろ？

零の声が、僕を突き刺す。

「自分でけしかけておいて、なんだ。まさか、そこまでしないだ

「ううなんて甘い事考えてたんじゃあるまいな？」

その通りだつた。

そこまでするなんて、思わなかつた。

だけど、当たり前だつた。

悪魔なんだ、零は悪魔なんだから。

僕の考えは、いつでも甘い。

いつも、手遅れになつてから思い知らされる。

あの時だつて。

「ねー、つまんない。」

女の子に手を引かれるまま、零が去つていく。

僕は、動けない。

進めばいい？

戻ればいい？

何もかもを修復するには、どっちへ行けばいいんだろう。

レイちゃんと居て、彼女に愛されて、彼もまた彼女を大切に思い始めて、それでもまた零は、人を殺した。

愛も、優しさも、ふりそそぐ笑顔も、彼を変えられない。

彼は、悪魔だ。

悪魔と人間で、幸せな結末なんてありえない。

やつぱり、ダメだつたんだ。

最初から、うまくいくわけなかつた。

今度も、また。

目の前が暗くなり、僕は手の平で顔を覆つた。

このカラダには、本当はもう血なんて流れていない。

なのに、さあつと血の気が引く、冷えて行く感覚がした。

取り返しのつかない絶望に、自分が沈んでいくのがわかる。

「久しぶりだね。」

誰だ、僕の名を呼ぶのは。

顔を上げた僕の前にいたのは、そこに居るはずのない、懐かしい

笑顔。

そうだ、君以外にその名を呼べる者は・・・。

「どうして、きみが」

彼女が、僕を抱きしめた。

「もう苦しまなくていいんだよ、全部、全部忘れてしまったアイツが悪いんだから。」

その言葉に、救いを求めるようにすがりつき、僕は 目を とじた
・・・。

(続)

「プレイブのヒトがね、無断欠勤もう三日目って、心配してて、でも手が足りなくなっちゃうから、新しいヒト探そつかつて。」
帰つてくるなり、レイは自分自身ひどく心配そうに、スズキがいなくなつた事を話し始めた。

零は、眉一つ動かさない。

「そうか、大変だな。」

一応、話を聞いていた事だけは伝えておいつと、返事はする。
その態度に、レイが軽くキレた。

「何ソレ、心こもつてない。心配じやないの？」

零は相手にしない。

「あいつはガキじやない。」

そう言つ彼の見た目は子供だが、面白がる場面でもなく、レイは
せらりと言いつのる。

「だつて無断欠勤だよ？ もう三日なんだよ？ いるのに仕事しない
ことはあっても、来てないなんてスズキさんらしくないよ、何かあ
つたんだよ！」

一人焦り始めたレイに、零はなかば叱り付ける調子で返す。

「あつたら何だ、俺が何かしなきやならないのか？」

「友達でしょ？」

「違う。」

「ちがくない！ だつて零さん、嫌いなら相手にしないもん。」

レイは顔を赤くして、目をうるませている。

対する零は、声にけだるさがにじむ。

「あつちが突つかかつてくるからだ。」

「もういいよ、じゃ勝手に意地張つてなよ。あたし、ちょっと探しに行つてくる。」

レイは、何を言つてもダメだと思つたらしく。

「メシは？」

「あとでいい。」

玄関へ向かうレイは、零を振り返りうつむきしない。

「どこを探す気だ？」

靴をはくレイに、零が問う。

「いろいろ！」

珍しく、レイの声が苛立つている。

「俺が行く方が早い。」

「え？」

ドアノブに手をかけたレイが振り向くと、もう零の姿はそこになかつた。

気温の下がり始めた薄闇は、氣体となつた零自身が世界を覆つているようだつた。

まさしくそんな具合に、零はほどいた自分を意識できるギリギリの範囲まで広げ、暑苦しくて面倒くさい、よく知る気配を探す。じつして探さなければ、スズキが実体をほどいていたらレイたちにはわからない。

ヒトや動物以外のおかしな気配はいくつかあるが、覚えのあるものではなかつた。

気付かれる前に一瞬でその範囲から移動する。

零たちの部屋の周囲にも、ブレイブ周辺にもいない。

なら、あそこはどうだろう。

零はさらに移動した。

夜とは言つても、町には明かりがあふれている。

その中で、ゆっくりと、よく見なればわからないほど、ほんのわずかに明るさのトーンを変化させている店があつた。

明るくなつたり、薄暗くなつたり、しかしその差は、気のせいと思えるほど。

ランコントルだった。

そこに零は、スズキの気配を感じていた。

少し違和感のある、それでもよく知っている気配を。

おそらくスズキは、零と同じように氣体化しているのだろう。目標を探り当てる、目立たない場所を探して零はいつも姿に戻る。

彼は、今見ている光景に疑問を感じていた。
なぜランコントルは、明るくなつたり“暗くなつたり”しているのかと。

零やスズキは元々実体のない、思念だけが集まつてできた生き物だ。

食性の違いから、“天使”や“悪魔”と呼ばれ、彼らが氣体としてただよっているとき、その場所の明るさ、暗さに影響をおよぼすことがあった。

天使がいれば明るく、悪魔がいれば暗く。

わかりやすいが、人間は気付かないことがほとんどだ。

したがって、ここにスズキがいるなら、ランコントルは他の場所より明るく見えなければおかしい。

こんなふうに明暗をいつたりきたりしているのは、“天使”的存在自体が点滅しているのかもしねれない。

“天使”的寿命というのはこんなふうに、電球みたいに切れるのだろうか、と思いながら零は呼びかけた。

「スズキ？」

「ごく細かい粒子の打ち上げ花火を逆再生して、光が零の前に集まる。

それが消えると、そこにスズキが立っていた。

(続)

笑っていない。

人目がありすぎる中で、派手な超常現象を起したスズキに、零が驚く。

「お・まつ、こんな所で何するんだ。」

彼らの周囲にいた人々が、いつせいにスズキに注目し、ざわめく。

「何？ 気のせいだ。」

冷ややかにスズキが言つと、彼を中心に光の円が広がりながら淡く駆け抜けていく。

その銀色の光が走った人々は、急にスズキから関心を失つた。何か見た、が。

気のせいだ。

とでもいうように。

こんな話し方をする男ではない。

こんな力の使い方もしない。

怒っているのだとしても、零の知るスズキはもつと暑苦しかった。

何の表情もない顔、敵意しか感じない話し方。

いつか、甘えるなど突き放された時でさえ、こんなに遠くは感じなかつた。

「スズキ、お前どうかしたか？」

急に姿を消したことよりも、彼の変わりよつのほづが気にかかつた。

周囲にはばかることなく、光からヒトに変わつたり、必要かそうでないかに関わらず、あたりにいた人間全てに無差別に“何も見なかつた”暗示をかけたり、チカラの無駄遣いぶりを見れば、存在の危機はとりあえずなさそうだった。

だが、それ以外はすべてがどうかしている。あたたかみのある青ではない、銀色の光も。

スズキは答える。

「いいや、今が正常なんだ。どうしてもっと早」

淡々と吐き出された言葉の途中、零が軽く後ろへ跳ぶ。

「く、こうしなかつたんだろう。悪魔」

スズキは話し続けている。

零のいた場所には、銀色の大きな斧が突き立っていた。柄にある部分はなく、刃の伸びる先をだごると、スズキの背につながっている。

「と人間なんて愛し合えるハズないじゃないか。だって、あの時もそうだったんだから！」

路面に突き立っていた斧が生き物の動きで抜けると、そこに傷はない。

スズキの背でもう一つの刃と対をなすそれは、広げると両方で3m以上はありそうだ。

零は、目を見張った。

天使たち特有の、羽毛をかたどつた光でできた翼を、スズキも持つていたハズだった。

それが今は、ギラギラ光る刃に変わってしまっている。

零は混乱した。

天使ではなくなったスズキに。

彼から殺意を向けられることに。

「なんだ、なんなんだ？！何だそのハネ！それに何の話をしている？」

「じゃ僕も訊こう。」

いいながらスズキが跳んだ。

銀翼が伸びて零の背後に刺さり、そこに向かって一瞬で縮む。

「スズキって、誰だ？」

そのスピードと、スズキのパワーが合わさった拳を、零はギリギ

リ顔の前で受け止めた。

受けたこぶしを、逆に握り締める。

短かつた髪が、一気に伸びて無数の束をなし、スズキに襲い掛かつた。

「ふざけるな。」

強く言つた零の髪は、瞬時にスズキの全身をからめとつた。

銀の翼も、それを断ち切れず縛り付けられる。

「このままぶち殺してもいいんだぞ。」

零をにらみつけていたスズキの姿が一瞬光り、次の瞬間にはそのカラダは髪の拘束から抜け出していた。

スズキは言つ。

「お前こそふざけてるんじゃないか？ 悪魔。」

スズキが半身をひねつて、一步踏み出す。

その勢いのままに、背の銀翼が零に向かつて射出された。

回転しながら高速で飛んでくる斧は、零にとつて動きが読めないほどではなかつた。

零はそれが自分を通過する瞬間にあわせ、軌道部分の自分をまいにほどく。

空気を切ることなどできないから、それでかわせたハズ、だつた。

「んっ？！」

零がうめく。

「僕は、本氣だ。」

スズキが、低く言つた。

刃が空気を切れなくとも、刃のまとう殺氣はある種の“空氣”としてそこに働きかけることができる。

斬ることが、できる。

零を斬り付けた斧は、ブームランのようにスズキの背に戾つた。

零は、まだ状況がのみこめなかつた。

「今さらか？！ もうかなわんと知つてるだろ？ それとも俺に殺されたいのか？」

脅し文句のよつひでいて、自身に回つてこる今は強がりにも聞こえる。

しかし、どちらでもない。

ただ、疑問だった。

零が本気でそつしょくと思えば、スズキを殺すのは難しくない。スズキは急に動きをとめ、翼を収めた。

ゆっくり歩み寄る。

零は、少し警戒しながら、それでも危険は感じていなかつた。スズキは零のすぐ前で止まると、彼の両肩にそれぞれ手をおく。チカラがこもる。

「できもしないクセに。」

歪んだ顔で笑い、全身から殺意をにじませた。

(続)

「つ！」

零はわずかに眉をよせた。

肩が焼ける。

スズキの掌から直接伝わる殺意は、物質的な零の体ではなく、実体を持たない彼そのもの、存在 자체を否定し、反発し、それを消そうとする。

スズキがしていたように、一度カラダをほどいて逃れることは、今はできなかつた。

逃げるとすれば、相手の殺意にとらわれている部分を捨てることになる。

普通の生き物で言えば、その部分の肉を「ソレ」そこそげとられるのと同じだ。

それよりは、力ずくで引きはがす方がはるかに損害は少ない。痛みを感じた怒りのまま、零は背から翼をくりだした。

零の頭越しに伸びた翼が垂直にスズキに振り下ろされる。が、彼を斬ることはない。

翼が、スズキの肩に食い込む。

「くつ！」

刃といえるほどの鋭さはなくとも、速度が圧力となつてスズキの肩を破壊した。

明るい色合いの服が、見る見る血に染まる。

肩は、不自然なところで曲がり、崩れたラインを描く。

骨が砕けたのだろう。

本当はないはずの骨格を再現しているあたり、ものの感じ方だけではなく、スズキは何もかもがどこまでも人間じみていた。

人外のくせに、これじゃ心臓の位置を一突きすればカンタンに死んでしまいそうだ。

苦痛の中で、零はチラとそんなことを考えた。

スズキは、零の攻撃のショックでより強く彼の肩をつかんだ。

そこから流れ込む殺意も増す。

余計なことを考える余裕がなくなる痛みが、零の全身を駆け巡る。こんなときに、痛覚をオフにするのは一見便利そうでもそつてもない。

ダメージの深さが、知覚できなくなるからだ。

今のところ、零は捨て身で戦つてもいいし、フシギと、一二三四五つてもスズキを殺して終わりにする気もなかつた。

だから、どれだけやられたかは知つておく必要があつた。

本当にマズそしたら、手加減もしていられない。

零の肩が、ぐずりとくずれた。

その分だけ、スズキの手が零の中にめり込んでいく。

「ぐつ・・・う・・・」

零が、

「うつ、ああっ・・・」

スズキがうめぐ。

肩が崩れても、零の手は動いた。

カラダから離れたとしても、必要なだけの集中力があれば、それは可能だ。

零の手が、妙に低い位置からスズキの腕をつかみ、押し上げる。

それにつれて、肩の位置も戻っていく。

お互いで、真っ赤に焼けた鉄でつかみ合いをしていくようだつた。

「ぐあうっ！」

スズキがほえる。

銀翼が左右から水平に、零を襲つた。

ドンッ。

振動をともなつて、地面に黒い翼が突き立つ。

スズキの両肩、両翼を落として。

零は、もう苦痛の表情を浮かべてはいなかつた。

叫びながら、ヒザから崩れ落ちていくスズキを、ただ見ている。切り落とされた腕も、翼も、少しの間その形を保つていたが、やがてゆっくり空気に溶けていった。

光つてもいない、影にも見えない、その溶けていく姿は煙に似ていた。

本当なら、本人が戻そうと思えばそれは元通りにつけることもできた。

大怪我に錯乱して、叫びながらのたうち始めたスズキが正氣であったなら。

クチからよだれをたらし、顔は己の血と涙でぐちゃぐちゃだった。肩から胴体の一部にまで及ぶ切断面からは、ビブビブ勢いよく血が出ては乾いて、少しづつ空気に溶ける。

これも、本人がおちつけばすぐに止まるものだった。

グロテスクでみつともない姿と、狂氣をふくんだ悲鳴は零を大いに誘惑した。

このまま、もっと。

それを振り払うと、零は地面に頬擦りするかのような動きをするスズキの顔を、思いつきり蹴り上げた。

「しつかりしろ、スズキ。」

心配していたレイを『まかすのなど、本当はカンタンだ。

それでも、彼は悪魔としての本能を、この一蹴りでおさえこんだ。なぜだかは、わからない。

何かを思い出せそうで、思い出せない。

スズキの瞳の色が、頭によぎった。

わからぬ、何か。

俺はそれを知りたいのかもしれない。
そんな思いで。

ぐちゃぐちゃのスズキの顔に、さらに鼻血が加算された。少々歪んでしまった顔は、もう笑えるレベルではなくなっていた。その顔を見ながら、零は考える。

レイがいて、俺がいて、コイツがいて、その“あたりまえ”を、
俺も少しさは望んでいるんだろうか。

スズキの口元が、がくがくと揺れた。
しゃべれないほど、痛めつけてしまったか。

(続)

“耳”を使うのはあきらめ、スズキの思考を意識した。

こりして。

ぎくりとして、零は一瞬スズキからわずかに意識をそらした。汚れ、ゆがんだスズキの顔を、あらためて見つめる。

翼も両腕も失くし、そこから血はふきだし続け、地に這いつぶばり、その姿はみじめで、今にも死にそうだ。

それでも、本当は今すぐこの場から逃げる事ができる。

零は今、スズキの動きを制限するような力はいつさい使っていいからだ。

なのに、彼は死を望む。

鼻からあごにかけて腫れ上がつて変形した顔の、いまとなつては目だけに表情がよみとれた。

底知れない悲しみ、何もかもを呑み込む諦念。

最後の一撃をうながらすように、スズキが目をとじ、涙がながれていく。

抵抗の気配はない。

「いつたい、何があつた。」

きょう何度目の質問だろう。

そして、何一つ「コイツは答えない。

零はイライラしたが、これ以上何かすれば本当にスズキは死んでしまいそうだった。

答えない彼の心をさぐる。

お前は、思い出さない。

殺せないなら、僕に救いはない。

なら、死だけが僕を救える。

この辛い記憶から、解放されるんだ。

「記憶つて……なんだ……」

なにか思い出せそうな、だけどどうしてもわからない、あの感覚。零が考え込んでいる間に、わずかな物音がしてスズキの体から力がぬけた。

氣絶したらしい。

本当に人間に似たその弱さに、小さく舌打ちすると零は彼の前髪を乱暴につかみ、顔を引き上げた。

「起・き・ろ。」

まぶたを閉じたままの顔にただよつ、儂さ。流れ続ける血。

ほうつておいても、死ぬ気がした。

傷をふさぐなら、同じ天使じゃないとうまくいかないだろうな。そう思つてから氣付く。

今のコイツは、天使じゃない。

俺の力でも、同化できるかもしれない。

傷口をふさぐイメージで、力を注いでみる。

思つたとおり、ひとまず血は止まつた。

腕を再生してやるのは、パーセンの割合が大きすぎて いくらなんでも負担が大きかった。

とりあえずこれで死ぬこともないが、拒否反応だらうか。

傷口は黒く変色し、肉が盛り上がつた表面は いぼが重なり合つてできたかと思つほどにでこぼこだった。

「み、醜い……」

思つても見なかつた副作用に、零は思わずつぶやいた。

それでもとにかく、一応の危機は去つた。

つかんだ前髪ごと、スズキの頭をゆらしてみる。

「おー・・・・い。」

かくかくかく。

「・・・」

取れても、治せるしな。

零は思った。

跡のこるけど。

がつくんがつくんがつくん。

激しく高速で腕を前後させる。

「あぐア？！…あー…」

今度はわりとすぐに反応が返ってきた。

だらしない発音からすると、蹴った時にアゴをこわしたようだ。

ついでに口も治しておく。

「アーッ…があ、いたつ…何を？」

どうやら悪魔同士と言つても、やはり性質が全然違ひりしく、確かにケガを治してやることはできたのだが、跡は残るわ痛いわで、あまり具合はよろしくなさそうだった。

今度は顔面の下半分が、青黒いアザになつた。

「んー、形、は、戻つた。」

零の言葉で、スズキは自分の体の変化に気付く。

「治した、のか？」

「多少。」

一瞬驚いたスズキの顔が、みるみる怒りにそまる。

「殺せばよかつたのに！忘れてたいんだろ？なら殺せ！」

また同じことを言い始めた。

「だから何のハナシだ！」

話が見えず、零は苛立つ。

「俺が忘れてんなら教える。それから、殺せ殺せってな、じゃそうしたら俺はレイに何ていえばいい？あ？！うまいイイワケがあるならそれも教えてくれよ、なあ！」

逆に零の方から責めると、スズキはうつむき、苦しみだした。

零のつかんでいた髪が引っ張られ、何本も一度にぞろりと抜けて

スズキの頭部は自由になつた。

痛いはずだが、本人は気づいてさえいない。

荒くなつた息の間から言葉をしぶりだす。

「ち、が、…君、嘘つき、イイワケ、なんて…」

背を丸め、全身をこわばらせる。

「おい…？」

性質の違ひすぎるチカラが体に入ったことが、毒として作用したのか。

他愛ない会話の中でもいつも見ている、少しスネた顔が不意に思い出され、一瞬でかき消える。

消えていく。

(続)

つなぎ止める言葉を。

「レイが！」

あわてて、たぐる。

「レイが心配してたんだ、あいつはどうする？ 守るって言ってた
ガキは？ ブレイブは？」

一言ごとにスズキは身をよじり、深く体を折つていく。

「お前には関係ないっ！」

叫んで顔だけを上げたスズキの目から光が走る。

腕のあつた場所には、鈍い銀色のいびつな大鎌が生え、零に襲いかかる。

慌てるでもなく、零は後ろに身を引きながら横なぎの蹴りを繰り出した。

「めんどくせえ奴だな。」

大鎌はサビきつた金属のモロさであつさりと折れ、あとかたもなぐ崩れて消えた。

血をだすことなく、スズキの肩口は、さらにえぐれた。

「・・・そうだ、面倒なんだ、僕を生かすのは。なのに、それで
も“君”は、殺さない…」

疲れ切つて、放心した顔のスズキがつぶやいた。

零はそれに答える。

「レイが泣くほうが面倒なんだ、使い魔としては。」

はは、と乾いた笑いを漏らすと、スズキはまたつぶやく。

「あのコの言うことなんか、いつも聞かないせに。」

殺意はもう消えていた。

なにもかも諦めた顔だった。

それでも敵意は完全に消えたわけではないが、零は気が楽になるのを感じた。

殺さなくて済むことになるのか、レイを悲しませなくて済むことになのか。

「別に、いつも無視してるワケじゃない。」

ほら、もう一つもの会話だ。

戻つてこい。

零は知らぬうち、そう願つていた。

うまく笑えないのか、スズキの顔がゆがんだ。

「そやつて、僕を生かすためのイイワケを考えたり、ギリギリ手加減するのは、殺すより、ずっと面倒だよ。」

殺意は、消えたのではなく、向きを変えたのかも知れない。

「だから、レイが

「君は…」

零のイイワケを、スズキがさえぎる。

「君は、ホントはウソがうまい。僕は、君にだけ別れをつげて遠くに行つたとでも言えばいい。」

「…」

零は、一瞬言葉に詰まつ、反論をさがす。

「理由は。遠くに行かなきゃいけない理由なんか、お前にはないだろ?」

どうしても殺さなくてはいけない理由も。绝望的に無表情な顔で、スズキが答える。

「“さあな”。君らしこ答えだる。」

完璧だった。

零の態度次第で、レイはそれを信じるだろう。

二人を“友達”と思っているのだから。

「そうしてほしいのか?」

「そう言った。」

残念そうにスズキが笑つた。

その表情には、わずかにいつもの彼らしさがつかがえた。

何も言えずにいる零に、スズキは続ける。

「けど君はそうしなかった。」ひちは本氣で君を…。なのに、こんなに、言つても…だから

スズキの体から、淡くあわぐ、揺らめく煙が立ちのぼりはじめた。

「だから、僕は…きみ、を

つぶやくスズキの声が小さくなりはじめ、目つきもうつりになつてきだ。

思わず、名を呼ぶ。

「スズキ！」

消えた腕と同じ色の煙。

ゆらめきながら、後から後から湧き出でていく。

スズキはまだ何か言い続けている。

「しんじ…」

しかし、最後の音がそれをかたどった唇から出でることはなかつた。

彼の体から完全に力が抜け、その場に横たわる。

消える。

零は思った。

主観的静寂の中、目の前の存在は変化を見せない。また氣絶らしかつた。

もう無理に起こそうとは思わなかつた。

「ホントにめんどくせえな、テメーは…」

拍子抜けし、独り言が口をついてでた。

その時唐突に、スズキのすぐそばに立つ影が見えた。

(続)

「あたリは、広範囲に向けてスズキが無差別に飛ばした暗示のせいで、零たちを見て立ち止まる者は居ないはずだった。

零は不審に思いながら、相手を確認する。

それは、本当に“影”そのものだった。

黒く細長く伸びた、零の“影”。

たまたま遠くガラスに映りこんだモノとも思える、不鮮明でぼやけた姿ながら、目の前にいる。

ほとんどのチカラを使いきつて、存在を保つのがやつとなのか、わずかな空氣の流れにさえ、ゆらめいた。

「“影”…。俺、かよ…。」

天使が悪魔につかれる、というのはレアなケースに思えた。

それよりも何よりも、自分の一部がスズキをあんなふうに狂わせたことに、零は驚いていた。

その影と思しき声が、アタマに響く。

違う。俺は、記憶。

「記憶？」

今日初めてではないフレーズを、零は疑問形で繰り返した。

お前が封じ込めた、記憶。

……と、共有する記憶。

“スズキ”、ではない、それでもなぜかスズキの事だとわかる名

前の部分だけが、聞き取れなかつた。

そこに入る名前も、また封じ込められた記憶の中にあるのか。

そして俺は、お前の死を望む、“俺血跡”思い出せ。

「俺に自殺願望はない。」

零が言つ間に、影は大きくゆらめき、姿を変えた。やはり不鮮明ではあつたが、見覚えはある。いつか見た、レイに似た女。ぼんやり、笑っているのが見えた。

つくん。

とてつもなく まがまがしい刃の切つ先が、胸の奥を軽くつついた。

だめだ、たわるな。

「来るな、お前は、いらない！」

全く原因のわからない、恐怖に似た感情が零を支配した。今までに覚えのない感覚。

消えそうな影に、零は怯えていた。

思に出してよ。

影が、女の声でしゃべった。

知らない声だ。

こんな女は、知らない。

全部、忘れちゃったの？

女が、涙を流す。

胸の奥の刃が、食い込む。

呪いが、しみだす。

唇を震わせ、零は何も言えない。

涙だけが、なぜかはっきり浮き上がり見てえた。
細く淡く、朱のすじが混じったと思つと、見る見る涙は血にかわる。

忘れて、なかつたことにして、繰り返すの？

クチから、鼻から、髪の間から。

赤い、幕が降りる。

彼女の全身が赤く染まる。

ぐらり、と彼女の身体が零にむかって傾いた。

倒れる、と零は思つた。

これは影で、あれは本当の血じゃない。

この影は、何か忌まわしいモノ、忘れるべくして忘れた記憶に違いない。

いらないモノだ。
わかつていた。

全てアタマではわかつていたのに、真っ赤に染まつた彼女を抱きとめていた。

ほら、もう

女の声が言つ。

彼女の身体が赤黒い霧にぼどける。

思いだしあじめてるんだ。

自分の声。

その言葉に気をとられた一瞬で、みずからを“記憶”と言つて、
た影は、全て零のなかに戻つた。

身構えたが、肩透かし。

何も起こらないし、思い出さない。

だが、封じ込めた、らしいそれが解き放たれたとき、自分は死をのぞむのだろうか。

零は、ついさっきまでソレにとりつかれていたスズキの、今はなんの表情も浮かんでいない顔に視線を落とす。

答えはない。

その時が来るまで、わかりはしないだろう。

「・・・じゃ、帰るか。」

見苦しいことになってしまったスズキの上半身を隠すために、チカラを一部、ジャケットの形にまとめる。

子供の身体ではスズキを運ぶにムリがあるから、“元の姿”に戻る。

ジャケットをかぶせた状態で運ぶためには、…お姫様抱っこが一番安定していた。

すごくきもちわるい。

この借りは、ゆっくり返してもらおう。

零は、周りの人間たちが暗示から完全に解放される前に、夜空とよく似た色の翼を思い切り広げた。

腕の中で、金色の髪がさらさらと揺れる。スズキの体は重く、温かかった。

実体がある状態で気絶したスズキは、ドアを通り抜けることができない。

俺はドアを足でガンガン蹴りつけた。

部屋から出てきたレイは、元の姿に戻った俺がスズキを抱いて立つている光景に、ぽかんとクチをあけたきり、数秒絶句していた。

「それ、スズキさん？」

やつとのことで出てきた言葉が疑問形なのは、スズキの上半身が

俺の“出した”ジャケットでくるまれているせいだ。

それでもカラダの大きさと、少しのぞいたストレーントの長い金髪でだいみたいわかる。

そもそも、俺はコイツを探しに出たのだ。

「ああ。」

答えて、キッチンの床に放り出されると、レイが慌てて止めた。

「ちよつと！ 何でそこへいきんとベッド連れてつてあげてよー。」

不本意だが、仕方ない。

「舌打ちしたでしょ。」

レイが顔をのぞきこみてきたが、俺は少々の抗議をこめ、口をそらした。

スズキをベッドに転がすと、俺はいつもおり子供の姿に変わった。

部屋の狭さが、それでだいぶマシになる。

「ひやつ・・・

レイが小さく悲鳴をあげた。

転がしたはずみで、スズキにかけておいたジャケットがはだけたのだろう。

「零さん、これ・・・

恐怖、混乱、憐憫が同時に強くレイの顔に浮かぶ。

「俺が痛めつけて、俺が治した。」

「治つてないよ！』

説明と同時にシツコミが返ってきた。

「待て待て。」

「きゅきゅきゅ救急車！…ヒドイよ零さん…ヒドイ…！」

レイが携帯に手を伸ばす。

「だから待て！』

大きな声を出したのは、泣きそうな顔にイラつときたせいもある。「暴れたから仕方なかつた。それに、人間じゃないのは知つてるだろう？救急車なんか呼んでどうする気だ。』

少し迷つてから、救急車を呼ぶことを諦め、レイは携帯を置く。

「だつて・・・でも、何もこここまで・・・

スズキのほうに向き直り、悲しげにその眠る顔を見つめる。

「スズキさん・・・

青黒い頬に、そつと指先で触れた。

俺はそれを注意深く観察する。

思つていたとおりだつた。

何も気付かないレイを、からかうフリをする。

「キスでもしてやれよ、目をさますかもしれないぞ？」

レイが、キッとこちらをにらんだ。

「ふざけてる場合じやないでしょ？」

かなり怒らせたようだ。

「いいから、ちょっとやつてみる。』

俺の言い方で、何か感じたのかレイは怒りをおさめた。

ためらいがちに、スズキに顔を近づける。

「・・・うん、じゃ、えと・・・やつて、みるよ？」

俺はうなずいた。

ゆるくウエーブのかかったレイの髪が、スズキの顔にかかる。

俺の方からは見えづらいが、頬にしたのだということはわかる。

「おーい、そこじやないだろ?」

振り返ったレイの顔が、少し赤い。

「あつてるもんつ、友達なんだからつ。」

必死なのが面白い。

俺はわざと何でもない口調で、そらにからかう。

「前にもしただろ、もう一回くらいサービスしてやれよ。緊急事態なんだから。」

スズキが俺をたきつけようとして、目の前でそんなことをしていくれた過去がある。

きゅうつとレイの眉尻が下がり、困惑全開の表情になる。

「ちつがーうもんつ、あの時はギリギリで止めてくれたの一! お芝居だよ、知らなかつたの?」

知らなかつた。

俺、カツコ悪くないか? 今。

・・・そういう時は、コマカすに限る。

俺は全く動搖などしていないフリで、視線をスズキにうつした。ちょうどよく、変化が現れていた。

「見る、レイ。」

「え?」

黒ずんでいたスズキの顔が、部分的にだが やや青みの残る肌色にまで戻っていた。

「ウソ、なにこれ、どーゆーこと?」

軽くパークリつていてるレイに、俺はさつきまで仮説でしかなかつた自分の考えを話した。

「コイツらにとつて、同情はエネルギーになる。コイツとお前はオトモダチで、その結びつきの分大きなエネルギーが期待できる上に、お前はコイツにとつちや“好きな相手”で、その力は特別なものだつ。だから、コイツの世話は、お前が適任なんだ。今見たようにな。」

そんなことを言われて、急に信じるのが難しいのかレイはぽかん

としている。

「そう、なの？」

(続)

「だいたい合ってるよ。」

答えたのはスズキの声だった。

「遅いお目覚めで。なんでそんな風になつたか、覚えてるか？」
腕がないと起き上がるのも難しいらしく、スズキは勢いをつけて腹筋だけで体を起した。

「はつきり、つてワケじゃないけどね。・・・とりあえず、ごめん。」

表情は暗い。

「え？ 何で？ 何でケガした方が謝るの？」

レイにはワケがわからない。

「なんでもいいだろ。」「

過ぎたことだった。

殺そうとした、のは俺の記憶がそつさせたせいでの、肝心のその理由は“思い出して”いない。

思い出したくない気がする。

俺が流そうとした質問に、スズキが答える。

「僕がいけなかつたんだ。僕が、彼を殺そうとしたから。」「え」

レイは不可解そうな顔をする。

ふだんのスズキを知つていれば、信じられるはずがない。

「正確にはお前じゃない、俺の“影”だ。」「

うつむいていたスズキが、さつと俺の方を見る。

「違う！ 影なんかじゃない、あれば、記憶だよ。・・・大切な、
だけど・・・。」「

強く打ち消したのは一瞬で、だんだんと声に力がなくなつていき、それから遠慮がちに、ほんのわずか寂しげに、笑った。

「まだ、思い出せない？」

「ああ。

「そつ、か。」

残念そうに、それでいてわかつてていたようこいつと、スズキの力ラダ全体が淡く光った。

身体を復元しているのだろう。

だが。

「じゃ、僕は失礼するね。」
と、出て行こうとするスズキに、とりあえず俺はわかりやすいところから指摘をしてやつた。

「おい、お前 透けてるぞ。」

復元するにも、材料が絶対的に足りていらないのだ。

腕も翼も、パーツとしてはデカく、俺に比べれば大した力をもつわけでもないスズキの存在の3～4割は食ってしまう。

それを景気よく空気の中へ放ってしまった上に、もう一度、腕だから翼だかよくわからないモノを生やし、それも失っている。

記憶がはつきりしないだけあって、ダメージの計算ができるいかつたのだろう。

それで、“元通り”に戻るうとしたものだから、結果として半透明になってしまった。

「ええっ？ ウソッ！」

驚いて声をあげるスズキに、俺はさらにツツコまねばならなかつた。

「なんで胸かくすんだ、バカ。それから、鏡見る。」

レイの使っている卓上ミラーを差し出す。

「うわあナニこの顔！ 何、つて、手エー！」

顔も、腕も、俺が治した部分には、黒々とアザがグロテスク極まりない模様を描いている。

「お前がああなつてたから、俺の力でも応急処置くらいはできたが、相性が悪かったみたいでな。それで外に出る気か？ 少なくともしばらく店には出れんぞ。」

さつきから俺たちのやりとりを、心配そうに見守っていたレイがそこに入り込んでくる。

「あのね、ウチ、いてもいいですよ？」

笑った彼女から、スズキは腕で顔を隠した。

「み、見ないでっ！ ああ、僕どうじょう、あー、あーもお……」
その悩み方が、うつとうしかった。

俺は面倒になり、レイに説得を任せることにした。

目が合うと、レイはバカなりに空気を読んだ。

「もう遅いですーう、しつかり見ちゃったし。ね、元に戻るまで、ウチにいましょ、スズキさん。ね？」

自然に、スズキの奇妙な模様のついた手にレイが手をのばす。

つきぬけた。

「え？！」

「あつ。」

驚くレイとスズキ。

「人間がさわるには密度がたりないんだ。わかつたら戻れ、腕が無い方がケガ人らしい。」

あきれた俺がそう言つてやると、レイがフォローのつもりなのか、スズキに言葉をかける。

「あのつ、大丈夫です、あたしスズキさんなら怖くないですよ！」

別に死んでるワケじゃないから、怖いはずもないのだが、バカなりのケナゲなセリフにスズキは少し笑つて、また光つた。

「つて、あれ？ 何か……」

そこに現れたのは、腕のないスズキではなく、模様が浮かんだ腕を持つたまま、少年の姿に変わったスズキだった。

俺は

「不正解。」

と言つて鏡を差し出した。

「わあっなにこれ！ なんでえ？」

「俺と同じだ。」

「

足りない力の分、縮んだとことだ。

「あそつか、そうだよね。」

「やーん、スズキさんかわいーっ。」

顔、腕の変色をモノともせず、レイが金髪の美少年に食いついた。

スズキはスズキで、舞い上がってだらしなく一ヤける。

「え？えへ。じゃこのままでもいつかな。」

俺は素早く反対意見をはさむ。

「いいわけないだろ？、それじゃ口クに同情を引けんだ。」

いつまでも弱つたまま、ここに居られても困る。

というよりも、それでは みつともない姿をレイの前でイジり倒して楽しむことができない。

スズキがムツとした顔をする。

「同情じやないもん。思いやりだもん。慈愛だもん。」

“可愛い”スズキを、レイが甘やかす。

「このままでいいよー、かわいいし、それに黒くなつてるとこ、
充分カワイソウだよ？」

少し考えて、スズキは気づいてしまった。

「ねえ、君もしかして、ケガした僕をからかつて遊ぼうとか思つてない？」

レイも

「あ。」

と言つた後、非難のこもつたまなざしで俺を見てきた。

(続)

俺は、この瞬間に決意した。

この俺の全力の演技で、悪魔としてのプライドをかけて奴らと勝負することを。

タダでスズキにいい思いをさせるのは、絶対にガマンならなかつた。

素直になれないけれど、失いかけてはじめて気付いた友の大切さ。それが俺の演技プランだ。

行くぞ。

まず、スズキはこちらの心が読める。

探りを入れられる前に、強い自責にかられた自分、を しつかりイメージして、そこに入り込む。

実際にスズキを傷つけたことで自分を責めるのは、俺には難しい。今まで食ってきた人間たちの感情から、それらしいものを思い出し、分析して自分なりに再現する。

ここ数百年は出した覚えが無い本気の集中力で、そのシチュエーションに入り込んだ。

とにかく大事なのは悲しみと、“しでかした感”だ。

わざとらしくならないよう気をつけながら、わずかに目をふせる。

「そう思われても、仕方ないな。」

レイとスズキが、視線を合わせる気配。

恐らく、信用していいのか迷っているのだろう。スズキが、口を開く。

「・・・僕のため、なんだよね？」

よりによつてこの俺に、やさしさを期待した質問。どこまでバカなんだ…と、こんな考えはダメだな。俺は今“反省中”なんだ。

ナンテ ロト ヲ シテシマッタ ノ ダロウ

心の中で“反省の呪文”を唱える。

その上で口にする言葉を選ぶ。

「それでも、腕がなければ自分では何もできない。みじめな思いを強いることは……。レイの言うとおり、黒くなつちまつてゐるだけでも、“充分カワイスウ”だしな。」

「あ……。」

スズキは、その変色の原因を思い出す。

そうさせた本人の言葉は、自責に聞こえたハズだ。しかもそれは治そうとして、つまり善意からの行動が裏目に出了るものだ。

当然、実際の俺は助けてやつたのだから反省などしていない。遠まわしに恩を思い出させた上で着せてやつているわけだが、スズキは致命的に甘いヤツだつた。

すっかりカワイスウなモノを見る目になつて、変にやわらかい声を出す。

「零くん、やつぱり僕、君の言つとおりにしてみるよ。面倒かけちやうかもしけないけど、甘えさせてもらひ。」

カンタンすぎるが、それでこそ“天使”だ。

「どうか、お前がそのつもりなら、俺もできるだけ協力する。」「どうせ面倒を見るのはレイだ。」

話がまとまったのに、スズキは困り顔を浮かべた。

「でも僕、変身苦手でさ。こんなんなつちやつたし、うまくあの状態に戻れるかどうか……。」

想像力が足りないんぢやないか、とバカにしたいのをガマンして、俺は誘導してやることにした。

「手伝つてやる。目は閉じた方が集中できるだろ？。」

スズキは、黙つて素直に目を閉じた。

「まずは、元の自分を思い出せ。これは、さつきもできたな？」

「うん。」

そんな俺たちを、レイは珍しいモノを見る顔で、だが黙つて見守

る。

俺は、スズキの両肩に手をおく。

「あの時、俺はここからお前の腕を…落とした！」

軽く叩くと、急にその部分の感触がなくなる。
腕が消えた。

「できたじゃないか、ああっ？！」

褒めてやつたのも束の間、出血が大サービスなことになっていた。
腕が落ちた瞬間を思い描いたスズキは、盛大に血をまき散らし始めた。

本人も気付き、動搖する。

「うわっ、うわあっ、どうじょ、うわあーっ！」

レイの悲鳴がかぶさる。

「いやああーっ！」

まるで事故現場だ。

血と悲鳴には慣れていますが、ここは收拾しなければ何もできない。
俺はそれらに勝る大声を張り上げた。

「うるせえっ！！」

すかさずスズキの傷口に、両側から手を当てる。

「血は俺が止めた！」

スズキはそれで正気を取り戻す。

「あ、あれっ？ そうだ、そうだよね。」

血は消え、淡い光となつてスズキの体に戻つていいく。

“なかつたハズの”出血だからだろう。

そうして、血が消えると元の変色した傷口が両肩に現れた。

「まったく…」

面倒なヤツだ、といいかけて慌てて口をつぐむ。

もう少し長くいい人の芝居を続けなければ、ウソがバレてしまい

そだからだ。

「ありがと、零くん。」

スズキが微笑み、俺は二つの意味で胸をなでおろした。

それでね、とスズキが俺の後ろを指差した。

「レイちゃん、倒れちゃったみたいなんだけど。」

今度はエンリョなく言わせてもらひつ。

「めんどくせえやツ。」

他者と関わることは、本当にいつも面倒ばかり運んでくる。

・・・ そうだ、面倒なんだ、僕を生かすのは。なのに、それでも

“君”は、殺さない…

あのときのスズキの言葉が、不意によみがえる。

俺は、“忘れた”過去が気になっていた。

だから、それを知つてゐるスズキを殺さなかつた。

だけど今は、絶対に思い出すべきじゃない、とも思つてゐる。

思い出すべきでないなら、スズキは、いらない。

なのに、それでも俺は、殺さない。

氣絶しているレイの顔をながめながら、俺は言った。

「面倒だ、放つておこづ。

(続)

同日、夕食時。

「食つたほうが治りも早いぞ、スズキ。」

困り顔のスズキを見ながら、俺は愉快さに任せて微笑んだ。

「だからって、でもお。」

スズキは弱つた声を出して、俺を見る。

俺は揺るがない。

「優しくしてもらいつと、それも治りがいいんだろう？」

レイもハシでつまんだオカズを差し出して言つ。

「エヘンリョしちゃダメだよー、はいアーン。」

「手伝おうか？」

俺は言つて後ろにまわり、スズキの顔をつかむと口をムリヤリあけさせた。

その後のある日。

「やつぱり、直接触つたほうがいいだろ。」

「いやー、零さん、あたしそれはちょっと・・・」

「ぼ、僕も困る！」

「いいから脱げっ！」

腕がない体にはひつかかりもなく、スズキの上半身はカンタンにムくことができた。

「ふつ、別にいやらじいコトをさせよつてワケじゃない。ただのマッサージだよ、マッサージ。」

肩の傷跡だけでなく、翼があるハズの背中もなでてやれば治りが早くなるだろう、というのは当然イイワケだ。

レイが抗議の声をあげた。

「零さん今 超 悪人顔してるんだけどー！」

「そおんなことないだろ、ほらこつだ、こいつ。」

俺はレイの手をとつてスズキの背に当てた。

スズキの体がびくんと跳ね上がった。

「く、く、くく、く。」

笑いをこらえきれず、このイヤガラセは一度きりで失敗に終わつた。

別の日。

「ほらー、スズキさん照れないでー。」

レイに化けてスズキにキスを迫つてみる。

俺の変身は、スズキと違つて完璧だ。

「やだー！ばかー！やーめーでー！！！」

「本人が留守の今がチャンスだぞ？夢を叶えてやる、こっち向けよ。」

「声つ、声だけ元に戻さないでキモチワルイ！君だつてわかつてするわけないだろ！変態つ最低つっ！」

「はははは！冗談だ、ただのタイクツしのぎだ、はははははは…」

久々に死ぬほど笑つた。

からかい倒して、それでもまだ足りないのに、残念なことに変色はすぐ元に戻り、腕もしつかり実体のあるものが出来上がりてしまった。

これからはこちからプレイブにでもいくか、子供“で”遊ぶしかない。

スズキがきて以来、しばらくコウたちとは会つていなかつた。レイはにこやかに声をかけた。

「もう大丈夫だね、スズキさん。退院オメデトウ。」

スズキも笑う。

「あは、ありがと、院長さん。」

鳴神医院、という設定らしい。

玄関に立つスズキは、本当にすっかり元通りだった。

「ねえ、零くんちょっと。」

部屋にいた俺を、スズキが呼ぶ。

「なんだよ。」

顔をむけると、手招きされた。

「呼んでるんだから、こっち来てよ。」

スズキがいふと、レイも賛同した。

「お見送り、しよ？」

俺は、渋々立ち上がる。

めんどくせえ。

「治つたんならさしだとでてけ。」

目の前のマヌケに声をかけてやると、ヤツは珍しく不敵な笑みを浮かべた。

「こら。君の目的くらい、僕は最初から気付いてたんだからな？俺は少し驚き、目を見張った。

レイが俺を見る。

じゃあ、わかつててレイとの接触を楽しんでたのか？

コイツはそんなに器用だつたか？

そんなことより結果的に

俺、カッコ悪くないか？

一気に色んな考えがアタマにあふれた。

スズキが、微笑む。

「確かに、何されるまではわからなかつたし、僕のリアクションは演技じゃないよ。君のイタズラ自体は失敗してない。」

なぜそんなことでスズキが俺をなぐさめるのかがちょっとわからぬいが、少しほつとする。

「じゃ、どういうことだ？」

訊いた俺に、スズキがおおいがぶさつた。

「ん？！」

驚いて、声が出た。

やわらかく、スズキに抱かれていた。

けつこう、きもちわるい。

友情とか思つてゐるんだろう。勘違いだからなー。」「そうだね」

スズキが言つた。

同意するとは、意外だ。

だが続きがあった。

「これは僕の一方的な気持ちなんだろうね。でもね、ありがと、零。」

腕に力がこもる。

「放せ、本気でキモチワルイ。」

俺がスズキの胸を押し、ひきはがそつとすると、案外カンタンに離れた。

それでもスズキは笑つている。

「反省したフリしても、いいこと言つても、そんなカンタンに君が変わるワケない。でもね、言葉じやない。僕は、君を信じたんだ。これからも、信じる。もう迷わない。」

ちよつと意味がわからない部分がある。

だが、それで一つだけわかった。

俺を信じられなくなつて、その迷いが影を呼び寄せたといふことだろう。

「信じるな、『悪魔』なんか。」

俺はスズキのバカさ加減に嫌気が差し、吐き捨てた。

スズキは、笑つたままで目を伏せ、ゆっくり首を左右に振つた。

「『悪魔』かどうかなんて、どうでもいいことだよ。君は君、『零』だ。」

俺がその意味を考えていふうちに、スズキはレイに小さく手を振

り、またね、と言つて出て行つた。

閉まつたドアに鍵をかけて、レイがつぶやく。

「片思いなんかじゃないと思つた、あたし。」

「あ？」

俺が聞き返すと、レイは俺の表情をうかがうそぶりを見せた。

やるべきの話、友情。あたしと違うでちゃんと向かいになつてゐる

「零をえたあ」

まんで引っ張つた。

「二十九日——二〇一〇年十一月二十九日」

「一度と言つた、氣色悪い!」

は「きりした不快感と同時に、どこか落ち着かない感覚

も、
レイのおかしな語

「めんとくせ」

そうだ、面倒なんだ

それでも君は・・・

「おい待て、今手前からとつたる。賞味期限は見たんだろうな？」
短髪にメガネの“彼氏”スタイルの零に注意されて、レイがごまかし笑いをうかべる。

「あ。えへへ…」

零の持つ買い物がごじの中の牛乳と、商品棚に並んでいるものを見比べ、そのまま戻す。

「大丈夫だつたよ。」

機嫌よくレイは笑つた。

二人一緒にスーパーで買い物をしているのは、夕食の献立を考えるのに飽きた零の思い付きだつた。

ランコントルに顔を出し、レイにちょっとかいを出そうとする男がないいかチェックして、ついでに買い物、というコース。レイはその行動の意味するところをなんとなく感じてはしゃぎ、零はそれを全く意識していなかつた。

確かめれば、共有しようとすれば消えてしまつだらう幸せを、とりあえずレイは自分の中だけで楽しんでいた。

そして、こうこう出来事は後日ランコントルのウエイトレス達や、スズキに垂れ流される。

ウエイトレス仲間は正直さをやかすぎる幸せを、いっぱいに噛みしめるレイを理解できないと思いながらも、まあわりと暖かく見守つていた。

スズキは零を知つてゐるだけに、レイに負けないくらいそういう話を喜んで聞いてくれていた。

零はそれを、せいぜい誤解させておけ、と笑うのだった。

清算をすませると、店の名前がプリントされている大きなビニール袋に品物をつめこみ、零がそれを持つ。

片手に荷物、もう片方は空いでいる。

店を出ながら、チラシとそれを見たレイに、零が気付く。

「ん。」

空いた手を、差し出す。

意外な展開に、店の出入り口でレイは立ち止まつてしまつ。

差し出されていた手は、そのままレイの手をつかんで引っ張つた。

「そこに立つてると邪魔だ、行くぞ。」

手をつないだまま、歩き出す。

レイは戸惑う。

嬉しいことは嬉しいはずなのだが、出来事に気持ちが追いつかない。

「なんで？零さん。」

呼ばれて、零はレイに顔を向け軽く笑つた。

「このナリん時は、“彼氏”だ。」

一瞬、あっけに取られるレイ。

すぐに思いつきり手を振り解いた。

これには零が驚き、目を大きくして薄く口を開いている。レイは零をにらんで、思いつきり頬をふくらませた。

「手なんかつないであげない！」

自然な気持ちからでないことが、少し寂しくて。

スネてしまつた彼女に、零は呆れを隠そともしない。

「自分で物欲しそうな顔しておいて、何だ？」

「それはー、そう、なつたらいいな、って。思つだけなら自由でしょ？」

早足でレイは歩き出し、歩幅の違いから零はそれに続いてゆつたりとした歩調で歩く。

「だから、そうしてやつたんじゃねえか。」

レイが勢いよく振り返る。

「“やつた”つてナニ？そういうのがムカツくんですかーー！」

語尾を嫌みつたらしく、レイが言つ。

ケンカがしたいのではない。

言い合このカタチでじゃれる『//』ケーションだ。

呆れたり、少しの苛立ちを見せることはあっても、いつこうじとで零が本当に怒ってしまうケースは まずない。

レイは確信犯で、わざと零に食つてかかつていた。甘噛み、といったところ。

零とは、今のところこの会話が、一番距離を感じずにいられるのかもしれない。少しづつ縮めればいいんだから、と言い聞かせて、切なさから田をそらす。

そして零の反論タイム。

「ですーう、つてのもムカつくがな。だいたい、こいつはお前が喜ぶと思つてやつてやつたのに、何だその態度は。え？」割とまともな内容で言い返してくる零を、心中でちょっとオモシロイと思ひながら言ひ返そうとして、レイは気付いた。

「え、まつて。喜ぶ、と、思つて？」

零は憮然として答える。

「ああ。」

そうはいっても、その喜んでいるのをひそかに笑うだけなのかもしない。

ただ喜ばせたい、といつのは零の場合考えづらい。でも、考え方でもしらべてもレイとしてはそれを期待し、信じたいと思つた。

確かめたら消えてしまいそうな、幸せの可能性。そうであつてほしい、と祈りをこめて告白する。

「いつしゅん、うれしかったよ？」

零の瞳の中、彼の考えを探る。見つからないまま、再び差し出される手。

「ん。」

だるそうな音に、それでもレイは微笑み、手をにぎつた。零がこのとき、レイと同じような気持ちであつた可能性は、実は

少くない。

なぜなら、後ろから忍び寄る怪しい影に全く気付かなかつたからだ。

「れーいー。」

急に声をかけられ、レイは悲鳴に近い声をあげた。

「きやつ」

反射的に素早くレイの手を自分の方にひきよせてから、声のほうに振り向いた零の動きはゆっくりとしききていて、“彼氏”の時特有の優しげな印象が邪魔をしなければウンザリしているのが誰の目にもあきらかだつた。

そこには、不機嫌な御雷がいた。

(続)

「新しい彼氏できたらお兄ちゃんに言えって、いつも言つてるだろ？」

これに対してもレイが言い返す。

「言つたら邪魔しにくるでしょー？ とか零さんは、あつー。」
報告などすれば、すぐブチ壊しにくる兄だった。

もちろん、女装で。

それを途中まで指摘して、レイは零がすでに襲われていた事を思
い出したらしく、言葉につまる。

零と御雷は、ずっと以前零がまだ“元の姿”だった頃に一度会つ
ていた。

それはランコントルのみんなと同じだったが、あちらではレイの
知らないところで記憶の修正がなされていた。

御雷にも同じことができれば、何の問題もない。

しかし、彼に対しても“操作”をする事はレイが固く禁
じていた。

御雷が気付く。

「れ、い？ れいつて、あの零？」

御雷の言つ“あの零”と今の姿は、かなり離れていた。

名前の事は、どちらも零がつくのだという事にして兄弟とでも言
いはるテもあるのだが、それでは両方とつきあつたことになってしまつ。

それはレイの人格から言つて、話にムリがあつた。

ここは同一人物で通すしかない。

レイの兄なら、バカさ加減も似ているはずだ、似てくれ。
零はそう思った。

「あ、お兄さん、お久しぶりです。」

にこりとした零に、御雷が笑顔を見せることはなかつた。不性感もあらわに、零を観察している。

「いや、ぜつてー、違つだろ。何だ？ 弟かナンかか？」

零は動じず、「こつ押しする。

「いえ？ 僕ですよ。確かにかなり雰囲気変わりましたけどね。」 同意を求めるため、自然にレイに笑いかけると慌てて彼女も同調した。

「あつ、うん、そーだよね、すつしーにイメチェンしたんだよね！」

不自然に二三二コと笑うレイ。

御雷の目が険しさを増した。

「冗談ならこのへんでやめとけ。面白くねえ。どう考えたつて別人だろ、イメチェンで背が縮むかよ。前会つたヤツは確實にもつとデカかつた。」

それでもまだ零は笑っていた。

顔色一つ変えずに。

「ああ、あの頃は威圧感あるつて言われてましたから。氣のせいですよ。」

御雷は、ふだけやがつて、と低くつぶやくとレイに視線を移した。

「レイ、お兄ちゃん送つてやるから、今すぐ実家帰れ。俺にウソついてまでこんな怪しげヤシラと付き合つなんて、いくらなんでもおかしーわ、お前。」

御雷は本気だった。

レイが逆らう。

「ヤツらつてナーヴ零さんは一人だよ。」

御雷の表情がさらに不機嫌に傾ぐ。

「お前まで、まだ言い張るか？ 言いたくなかったけどな… こんなこと。じゃ言うわ。兄弟両方どテキちゃつただけの話だろ？ それをヘッタクそなウソでゴマカし切れると思つたんだよな？」

そつちか！

零は心中でツツ「ミニ半分に思つた。

レイの人格を無視して自分の基準で状況を判断するとは、少なくともバカだという部分だけにおいては零の予想通りだつた。思えばバカを相手にするのに、変にヒネリを加えることもなかつた、と零は少し悔やんだ。

後の祭りだつた。

御雷の表情は、怒りだけでない暗さをただよわせていた。
彼は妹が大好きだつたから。

おかしな意味合いにおいても、そうでない意味でも。

これにレイが思いつきりキレた。

「なつなつなに何言つてんのぉ？！」

興奮してうまく言葉が出てこない。

顔も赤い。

「お兄ちゃんと一緒にしないでよ！」

憤怒のあまり、ストレートなののしりが兄を直撃した。

御雷はひるまない。

ののしられ慣れている彼は、打たれ強かつた。

「うるせえつ、お前の言つてる通りならソイツ人間じゃねえだろ
が！それとも急に背が縮むアヤしい病氣か？どっちにしろ“そんな
モン”と一緒にほっぽつとけるか！」

「人間じゃなくたつて」

レイが真実を口にしかけ、零が素早くそれを片手で制する。
つないだ手が、はなれた。

「レイ、それじゃ俺がバケモノみたいだろ？」

零は、ありえない冗談を聞いてしまつたという顔で軽く笑う。
レイは一応黙つたが、まだ何かいたそうにしていた。
そのレイの腕をつかんで、御雷は自分の方へひっぱつた。

「お兄ちゃん？」

呼ばれても御雷はレイでなく、零のほうをみていた。

「手え切れ。な？どっちもだ。」

兄弟どちらも、とこうことだらけ。

零は困惑した表情を作る。

「誤解です、お兄さん。…でも俺、今日はこれで失礼しますね。」

片手に持ったスーパーの袋を、レイの方へ差し出した。

「レイ、悪いけどこれ、持てるか？」

「え？ うん、でも零さん」

あの部屋のほかに、どこへ帰るのかが気になるのだらけ。
だが、このまま話を続けても今の零と冷静でない御雷では、うまくまとめるのは難しい。

「じゃ。」

短く言つて、御雷に軽く頭を下げると、零はレイの部屋とは違う方向へ走り出した。

追いかけようとするレイの腕は、御雷にしつかりとつかまれていた。

「え、零さん、零せーん！」

(続)

とにかく、当分必要な荷物だけでもまとめて、と一回レイは御雷につれられ部屋へ帰った。

頭の中は零のことばかり、不安でうなだれるレイが部屋の鍵をあけようとすると、中からドアがあいた。

「おかえり。ん？ 零は、どうした？」

白い小さな顔を見て、レイは安心する。

「れ・なゆくんつ！えと、零さん、は…なんか帰っちゃった、お兄ちゃんのせいだ。」

レイは横にいる兄を、不満げににらみつけた。

レイの視線をものとせず、御雷はいう。

「いたのか。なゆ太も帰るつ、お兄ちゃん車呼んでやるか。」

御雷が取り出したケイタイを、レイがパツと取り上げる。

「大くん呼ぶ氣でしょ？タクシーじゃないんだからやめなよ！」

大、とはレイと御雷の幼馴染でランコントルにいる翔の兄だ。

レイは、御雷にたびたびタクシーがわりにされる彼にたしかに同情も感じていたが、今はどちらかといえば実家に連れ戻されることへの抵抗で彼をがばつていた。

「じゃ本物のタクシー呼んでやる、返せ。」

御雷は特にイイワケもせず、マジメな顔で言った。

こいついう時の御雷には逆らえないと、レイは知っていた。

レイが嫌がつても、怒つても、泣いても、憎まれようとも、兄は自分の思ったようにしかしない。

それが、本気の御雷だ。

もうこの生活も終わりかもしれない、とレイが観念する。不意に、なゆたが話しかけてきた。

「レイ、御雷はどうしたんだ。何で急に俺は追い出されるんだ？」

何も知らないふうを装つてゐる。

彼の意図が読めたわけでもなく、ほほ反射的にレイは答える。

「えーっと、何か、大きい零さんとちひぢや、普通くらいの零さんが両方あたしとテキてて、ってなんかお兄ちゃんが勝手に怒つて、ねえそんなことないよね？なゆくん。」

最終的に、助けを求めていた。

そこへ御雷がかぶせ氣味に口をはさむ。

「そういうことなんだ。フタマタはいけない事だから、オヤジとかあさんに叱つてもらつ。その間にこは誰もいなくなるから、なゆ太も一回家に帰れ。」

と、普段平気で二股三股する男は、子供にもわかりやすく説明した。

それを聞いた　なゆた　は急にうつむいた。

レイはピンときた。

御雷は心配する。

「どした、帰りたくないのか？それともレイの事心配してくれたのか？」

なゆた　は、零はそんな可愛らしさなど　みじん　も持ち合わせていなかつた。

ただ単に、芝居の幕が上がつただけだ。

レイは、なんとなくそれに気付いていた。

零は言つ。

「…違うんだ、御雷。」

けげんな顔の御雷に、言つてくうちに零が言つ。

長い身の上話、というフレイクションが始まる。

「レイは一股してるワケじゃない。その一人は本当にぢりぢりも零なんだ。」

本当のこと話をすのか、とレイは心配する。

御雷は難しい顔だ。

零は一人を見ようともせず続ける。

「メガネは、レイと…付き合つてゐる方で間違いない。」

違う表現を使いたかつたのか、単にそれを言いたくないのか、零

は“付き合つてゐる”という部分を少しためらつた。

それでも、レイの表情はだらしなくゆるんだ。

零の話は続く。

「あつちは、俺の叔父にあたる。」

レイは目をむき、御雷もピクリと眉を動かした。

そこからが本当に長かつた。

デカくて髪の長い方は、自分の父だと彼は言つた。

彼らは兄弟であり、兄の方が生まれたとき両親は何かの理由で経済的に追い詰められていた。

そこで、いろいろ考えた挙句、泣く泣く施設にあづけたというのだ。

その後数年して、弟が生まれた頃には余裕もできて、弟は親元で育つこととなつた。

憎くて手放したのでない長男を、両親はできればひきとりたかったが、そのときには兄はどこかに養子として貰われており、取り戻すことはできなかつた。

それでもその子を忘れられず、両親は弟に兄と同じ名前をつけ、大切に育てた。

大人になつた二人が偶然再会したのは、ほんの数年前。

弟の方は、兄の話を聞かされていましたから自分とよく似た男の名前を聞いて、それとわかつたといつ…。

(続)

昔のドラマみたいだったが、子供の作り話にしては出来過ぎたそれに、御雷は振り動かされた。

少し考えてから、彼はたずねた。

「でもな、俺が前に会ったのは、そのアーチの方なんだ。なのに弟が“おひさしふり”って、アーチのフリをした。これは、なんでだ？」

「名前が同じだから、あっちも勘違いしたんじゃないか？つきあつてゐる零なら自分のことだから、話あわせたんだろ。途中で気付いたろうが、修正しようにもアンタは怒っちゃまつてるし。」

見てきたような（実際そうである）物言いだが、御雷はそれに気付くよりも話に納得していた。

「そ……か。なるほど、な。じゃ、ついでにもつときいてもいいか？」

零は良いとも嫌とも言わず、黙つている。

御雷は、なゆたについてずっと気になつていていた事を口にした。

「あのさ、なゆたん なんでいつも居るんだ？ 家、帰つてないだろ？ あのオヤジが意地悪だからか？」

前回会つたとき、元の姿だった頃の零は御雷の都合の悪い内面を丸裸にしてしまい、印象は最悪だった。

零はまたうつむいてみせる。

レイはハラハラして見守る。

「いや……母親のほうに、ギャクタイ、されてて。」

兄妹はのけぞつた。

それぞれ違う意味で。

御雷は優しくはないが“可愛いモノ”に弱く、なゆた の見た目は、間違いなく可愛かった。

御雷は解決策を一緒に考えようとする。

「オヤジは何もしてくれないのか？弟の家にひきとつてもりつとか。」

なゆた、零は弱々しく首を横に振った。

「父親は、精神的にオカシくなつた母親の相手で精一杯なんだ。弟の方の零も、ばあさんが3年

前から入院して、そのせいで　じいさんも参つてて世話をしなくちゃならなくて、だから、レイが。」

ここで零がレイに視線をやる。

あわせろ、という合図。

レイはうなずいた。

「そ、そうなのー零さんタイヘンだから、あたしがね？でもれ、じゃない、なゆくんイイ子だから全然手がかからなくて、返つて助かつてるくらいだよね、ねー？」

零の話は何もかもが、テレビの中のようだつた。

あとでレイが何気なくたずねてみたところ、事実テレビドラマとニュースなんかを参考にでつちあげたということだった。

それでも、全く信じられないということもなく、とこより結果的に御雷は全て信じた。

「そつか、タイヘンだつたんだな、なゆ太..。」

そつと御雷に抱きしめられた零のすゞく迷惑そうな顔が、レイからは丸見えだつた。

「あは、あはは、そうなの。だから、今までどおりでいいでしょ？お兄ちゃん。」

やや乾いた笑いと共に、レイが言つと、御雷は冷たい顔で答えた。

「ああ、その弟くんを認めるかどうかは別の話としてな。」

「じよつ、女装はやめてよねーもうバレてるんだから…あの、お兄さんから聞いてるし。」

本当は、同一人物だから知つてているだけのことだが、レイなりに氣をつかう。

兄はさらに言つ。

「じゃ面接な。ぜつて一不合格、うん、ウソとかついたし。」

「話あわせた、つて言ったでしょ？だいたい最初から不合格じゃ

意味ないじゃん！」

レイは不満を口にし、零は何も言わなかつた。

結局、零が一人に増えてしまい変にフクザツになつたが、おかげで、どの零がレイの周りをうろついても不自然ではなくなつた。

もちろん、なゆたの父親である“大きいほうの零”も。

その日はそのまま、御雷は零が戻つてこないようとにかく何か言つて泊り込み、“可愛いなゆた”と風呂に入つて彼のヘソを曲げさせた。

(続)

翌日、御雷のいなくなつた夕方に、レイは
「はあ、どうなることかと思つたけど、なんとかなつてよかつた
ね、零さん。」

と笑つた。

表情もなく、ああ、と答えた零は昨日のことを考えていた。

人間じゃない、と言つた御雷。

人間じゃなくたつて、と言つたレイ。

御雷は兄弟どちらとも付き合つている、といつ乱れた関係を心配
したらしいが、眞実はそうではない。

が、そうでないからいい、という状態とは言えない。

まず、本当に“人間じゃない”こと。

そしてその上、人を殺すこともある悪魔だということ。
妹を溺愛する御雷が、いや、彼でなくとも兄であれば、家族であ
れば、“そんなモン”とレイが一緒に暮らすひと、どこか近づく
ことすら許さないだろう。

許されない。

それが自分たちの“今”ではないか？

そう考える一方で、許すも許さないもない、と零は思う。
自分の好きにするだけで、誰がどう思おうが関係ない、俺はそう
思つてゐる、と。

俺、は。

知らぬうち、レイをじっと見つめ返していった。
照れた顔が、じけらを見つめ返していく。

「なに？」

「……股できるシリカ、って思つただけだ。
たちまち悔しがる顔になり、レイは文句を言つ。

「えー、ヒドーイ！ それ絶対けなしてるよねー？」
自分がからかって、レイが振り回される。

“今まで通り”の会話に、ほんの少しだけとはいって、不本意ながら零は安心を感じていた。・・。

「なゆ なゆ、見てえ。」

『機嫌のコウちゃんが なゆ、』と子供の姿の零の皿の前にびっくり下げているのは、ピンク色のクマのストラップ。

小さなそのヌイグルミは、胸の部分にわざと小さな、真っ赤な色をしたハートがついていた。

零はそれを見て、むき出しの心臓に見えるな、といつ感想を持つた。

もちろんそれがコウちゃんとは違つ見方と予想できるから、口に出さない。

「可愛いでしょー？パパとホールしてあげて買つてもひつたの。」

「ヌイグルミに興味はない。」

零が話を切り上げようとすると、コウちゃんのことが気になつているミツチーは彼女の話題に反応した。

「あーっ、コウちゃん“オマジナイ ベア”買つて買つたの？スゴーイ！それ、効くんだよねー！」

零だけがそれを知らなかつた。

「オマジナイベア？」

疑問を含んだ声に、ミツチーが説明でこたえる。

「そう。『れさ、背中があくよくなつててソロに願い事をかいていれておくと叶うんだ。コウちゃんのベアはピンクだから、恋が叶う“ラブリーべア”』。」

「ふうん。」

説明を聞きながら零は、心臓むき出しで背中がパックリ開いてて“可愛い”とはいی趣味だ、と思つた。

そんな彼の前で、コウちゃんとミツチーがじやねはじめる。

「ね、コウちゃん誰の名前書いたの？教えて。」

ミツチーが言い、

「ないしょー、あやははー。」

コウちゃんは楽しそうに笑う。

零には答えがわかっている。

だから必死でそれを知りたがりつつ、“必死や”は纏そつとくるミッキーを見ているのが面白い。

零の教育が良いおかげで、コウちゃんもこの状況を楽しんでいた。必死なのはミッキーひとりだ。

ミッキーのもやもやする気持ちを、もつと楽しみたいとも思ったが零の手には荷物がある。

特売のタマゴ他、本日の食卓に乗る予定のモノだ。

買い物帰りに呼び止められただけの彼は、せりて子供達の遊びに付き合ひう氣はなかつた。

「じゃあな。」

「えー、行ひちゃうの？』

引きとめようとするコウちゃんを、いつもと回じよたひみじ回して

「俺は死しいんだ。』

といづ一言で撃退すみると、わざと背をむけて歩き出した。

(続)

軽快なメロディーが部屋に鳴り響く。

レイのケイタイからだ。

充電中だったそれを手に取り、レイは話し始める。

「もしもーし。…え？あ、うんうん……」

楽しげに話すレイの顔の横で揺れているのは、ピンクのクマのス

トラップ。

20分ほど話してやつとレイが電話を置くと、零はそれを手に取り、ストラップをしげしげと眺めた。

「零さん、それ知ってる？」

レイが言つたそばから、零はクマの背中をあけようとする。

レイは慌てた。

「あつ、ちよ、ダメだよー！」

零は彼女に冷めた目をむける。

「どうせ俺の名前書いて入れたんだろう？お前、マジナイつて漢字で書けるか？」

零からケイタイを取り返しながら、レイはそれに答える。

「知らない。もー。零さん以外の名前かもしないじゃん。勝手に見ないでよ。」

「ふふん、なら俺もせいせいやる…おじない、つてのはな、『呪い』って書くんだ。」

レイが意外そうな顔をする。

「え、そうなの？えー、同じ字なんだあ…えー…」

残念がる声をだすレイに、零は無表情に言つ。

「だから、お前は俺にノロイをかけることになる。」

レイは動搖する。

「ええつ？そんな、そんなことないよー…」

「へへ、やつぱり俺なんじゃねえか。」

あ、と小さくつぶやいてレイが下を向く。

「…俺に呪いはきかない。“悪魔”ってのはな、憎しみだとか恨みだとか、そういうノロイの元になるモノでできるんだ。」

「違うよ?」

少し顔を上げたレイは、悲しそうでいて、だけどちょっとだけスネた表情をしていた。

「零さんに、かけてるんじゃないもん。あたしが、もつと勇気を持つてるように、クマさんに応援してもらつんだもん。」

「は?」

「それにー、このオマジナイは、憎しみとかうらみなんて、全然関係ないじゃん。」

視線に少々の呆れをこめ、零は呪いの仕組みをさらに説明してやる。

「最初はな。だが、好きな相手がいつまでも振り向かなければ、変わつてくるもんなんだ。自分を見てくれない相手を憎んでみたり、相手の恋人を恨んでみたり。本当にそんなもんが効くとしたら、その時だろ? よ。」

零はピンクのクマを指差した。

レイはハッキリ不機嫌な顔をしている。

「そんなことないもん。あたしは、零さんを憎んだりしないし、もし…零さんに好きな人いるなら、応援するもん。その人とだつて仲良くするよ。」

天使の好みそうな言葉は、零をいつも苛立たせる。

たとえそれを口にしたのが、気に入った相手であつても。

「いい人のつもりか? それじゃ欲しい物は全部誰かにとられてオシマイだ。ほんとにバカだなお前は。」

レイがショックを受けた顔をしているのは、零の表情と聲音が最早冗談を言つている時のそれではないからだ。

子供であつても ゆうな(ユウちゃん)の方が余程賢い、と零

には思える。

彼女と零の相性は悪くなかった。

あいつなら、ノロイを利用して俺を手に入れようとするだろう。

他の女がいたなら消そうとする。

ためらわないはずだ。

ゆうな と主従契約を結びなおしたいと言つたら、応援するといったコイツはそれを許すだろうか。

本気だと言えれば、もしかしたら。

零のアタマの中だけで行われた、レイを捨てるシミュレーション。さつきの言葉のせいであつむいっている彼女は、それを知っている

かに見えた。

(続)

小ちく、つぶやく。

「零さんには、わかんないよ。あたしの気持ちなんて。」
その言葉どおりなら、自分が感じはじめた重苦しさは一体何なのだろう。

わかつていてる。

わかつていて、それが愚かさからくるものだとも知つていて。
共感など到底できない、それだけのことだ。

「説明してみろよ。」

レイの手が、ピンクのクマをきゅっと握るのが見える。
顔をあげたレイは、もういつも明るい目をしていた。
「だからね、これはノロイじやなくてオマジナイなの。零さんに
イジワルされても、クマさんがガンバレガンバレ、って。そして頑
張ったあたしは、もっと可愛くなつて、零さんの気持ちもわかるよ
うになつて、一人は末永く幸せにくらして、めでたし！わかつた？
零さん。」

バカだからこりない。

そう思つてしまふこともできる。

さつきまでのうつむいていた姿を忘れて。

クマを握った指の、かすかな震えも無視して。

その彼女を忘れることも、無視することもできない零には今、レイがただ強がつていてるのだとわかる。

零への想いをこめたオマジナイを、その当人に否定され、気持ちまで否定されたと感じているはずの彼女。

たつた今も、きっとくじけそうなのだらつ。
強がつて、無理をするためのオマジナイ。
無駄な努力。

何も得られなくても、自分ひとりが損をして、きっとレイは誰

かのために笑つてゐる。

愚かで、哀れな我が主に、零は腹が立つた。

今の零なら命令一つで、何でも彼女のために手に入れてくることができるので、彼女は何も望まない。

欲しいはずの零の気持ちをえ、ただ自然に自分に向くのを待つている。

命令なんかできない、したくない。

いつか彼女はそう言つていた。

零は、はつきりと覚えている。

実際、本当に困らせたりしないかぎり彼女はそんなものを持ち出さない。

そうしてくれた方がお互いに、どんなに楽か知れないのに。

零は何も考えず、“彼氏”的演技をしていればいい。

レイはただ、その幸せにひたつていればいいだけ。

悩まなくて済む。

苦しまなくて済む。

それは優しい嘘。

嘘で、いいのではないか？

厳しい真実よりも、優しい嘘のほうが・・・。

嫌がるだらう事は予測できていても、零はそれが正解だと思えた。

「わからんねえよ、回りくどすぎる。命令すれば今すぐにだつて、

俺は“彼氏”になつてやれるのに。」

それが、

大嫌いだ

と聞こえた顔を、レイはしていた。

その顔で、零は全てが嫌になつた。

アタマの中から、腹の奥から湧き出でてくる、気持ちの悪い熱さ。

原因のわからない息苦しさ。

もう何度もなく自分を刻んだ、冷たい刃が光る気配。

少し やりとり を間違うたび、こんな目にあわされ続けるのか。
「いつ いう時の居心地の悪さも、凍える痛みも、そばにいるだけ大きくなつていく。

最近では、からかつてもいつも面白いといつてはいけない。

笑いかけてくるから、悲しい顔が気になる。

ちかくにいすぎるから、離れて行くのを感じる。

ならもう、笑つてくれなくていい。

無理をさせるくらいなら、いつそこちらが離れればいいのだ。
気持ちも、笑顔も届かない距離に。

考えがここに至つた瞬間、おかしな感覚があとずれた。
たとえるなら、デジヤヴ。

くりかえす くりかえす くりかえす

頭の中で、自分自身の声がこだまする。

くりかえす？ 何を？

響き続ける意味のわからない警報を、零は無視する。

「俺は、お前の使い魔だと言つただろ。」

零は“彼氏”に変わり、レイに近寄る。

レイの表情が硬くなつた。

「命令すればいいだけなんだよ、お前は。」

顔を近づける。

至近距離の瞳には、一面の拒絶がうつっている。

予測済みの反応。

かといって何も感じないわけではなかつた。

それでも後戻りする気はない。

(続)

「どんなタイプがいい？ 優しくも、冷たくもなれると、俺は。」
優しく髪をなでてやり、微笑んでみせると、レイの顔が悲しげに歪んだ。

凍りつく痛みと、全身を貫く衝撃。

何を叩きつけられればこうなるだろうか。

一瞬、自分に何が起きたのかわからなくなる。

体が冷えていく気がして、感覚が戻つてくると外側には何も起つていなことを思い出す。

嫌われた、そう思つただけ。

一番嫌がる事を今言つていると、知つてゐるだけだ。

彼女にふれていた指先は、いつのまにか少し引いた位置で宙に浮いている。

どこよりも一番、冷たいこの手は永遠に宙をさまよひんじゃないのか？

不意にそんな考えがよぎり、それがたどりよつもなこ暗をもつた不安に変わる。

一度と、触れられない。

だつて、そうだろう？

彼女が望んでいるのは、愛だ。

それがないから、拒絶された。

だが、俺は知つている。

愛などどこにもないと。

その正体は幻想、愛はエゴの呼び名の一つでしかない。

自分を“愛して”くれるから、“愛され”たいから、“愛する”。

全て結局は自分のためでしかない。

だからこそ、自分が愛など持たない、持つことができない事も、

俺は知つてゐる。

永遠に彼女に、この人に、あなたに触れる資格などない悪魔。心がカラになる気がした。

せめて同じ幻想の中に居たなら。

アタマをよぎる仮想は無意味だ。

それでも表面上はわざと何も変わらない顔をした零と、泣き声うなレイ。

数秒見つめあつたあと、レイがつぶやく。

「そういうの、イヤなの・・・。」

彼女が押し殺しているのは、怒りではない。

今この瞬間、誰かが自分を殺してくれれば内側で暴れるこの苦痛から逃げられるのに。

零はそう考へながら、ウンザリした表情を作つてみせる。

「知つてて、言つてる。」

嘘には自信があつても、今だけは不安が残つた。

レイのまぶたが閉じる。

彼女の頬を、光が駆け降りた。

あれは、キケンなものだ。

零はぼんやりとそう思つた。

触れればきっと、自分は焼き尽くされて何も残らない。

それを手でぬぐうレイの姿は、子供と変わりがなかつた。

すっかり涙声になりながら、レイは今の状況自体を否定しあじめた。

うけいれがたい現実を。

「ねえ零さん。やりすぎ、でしょ？からかつてゐつもり、でしょ？でも、泣く…まで、やつたら、シャレンなんないよ。」

話す間にも、ぱたぱたと涙はこぼれる。

ひとしづく」と、零の中の何がが、ぼろぼろになつていく。

触れてさえいないのに、元の壊されていく。

もう一度レイの言葉を突っぱねるのには、少々の気力を要した。

少し離れれば、つらくなり、ハズだ。

「からかってなどいない。現実的に考えろってことだ。どうせ俺は、逆らえない。」

レイが目を見開く。

まつ毛には、小さな光が幾つも、いくつも。すぐに力いっぱい目を閉じると、顔が赤くなつていき、下を向く。さつきよりも速度と数を増して、光る珠が落ちる。

凍てつき、次の瞬間には燃え上がり、零の体の中を獣が暴れまわる。

だんだんと大きく身体を揺さぶるそれは、鼓動に似ていた。焼かれても、凍り付いても、零は平氣な顔で見ていられると思っていた。

肩を震わせて黙つて泣くレイを。泣き顔を見せらず、声を殺す彼女を。

(続)

しかしそれは、いつまでも続かなかつた。

「・・・きゅう・・・」

押さえきれない声が、細く漏れた。

子犬の鳴き声そっくりな、か細いそれは零の中でぼろぼろになつていたモノを、完全に壊した。

「泣くなならフツーに泣け。『そういうの』がイヤなんだ、俺は。」

レイがわざかに顔を上げた。

かるうじて、零を見ているのがわかる。

彼女が何を言うのか、が怖くて、零は言葉を重ねる。

「隠し事だとかガマンだとか。見えみえなんだ、俺からすりや。だから」

文句をいいながら、零は唐突に氣付いた。

「この後自分がどうするか、どうしたいのか。

らしくない表情をうかべそうな顔を、呆れを裝つて片手でおさえ、隠した。

かすかな熱を感じた。

それでも、そうまでしても止められない自分。

「だから、この件はナシだ。無かつた、つてことにしてくれ。」

レイは鼻をすんすん言わせるだけで、中々答えない。

大泣きしていたので、それがカンタンにはおさまらないのだ。その沈黙が、零を焦らせる。

「・・・あ、泣かせたのは、悪かった。確かに、そこまですることは、なかつた、な。」

レイの反応が気になつて、顔をおおついていた手を放す。目が合つた。

彼女は、信じられないことに出会つた顔をしていた。

「謝つて、くれんの？」

零は声を出すことがなぜかためらわれ、黙つてうなずいた。

その瞬間、空気が軽くなつた気がした。

ゆつくりと、レイの表情から悲しみが消えて行く。

「じゃあ、じゃあね、あのね…ホントは、ね？」

いいにくそつするレイに、零はいつも通りのフリで言つ。

「何だ。」

安心したせいか、うまくダルい声が出た。

レイの上皿遣いがこちらをうががつていて。

「やっぱもつかい、さつきの。イイコ、して？」

許された安堵、与えられた資格。

微笑んでしまいそうな表情を、嘘だと思われたくないで固める。

手を伸ばす。

濡れてしまつた頬を、ぬぐつ。

指が髪に触れる。

逃げないことに安心して、そつと撫でる。

レイが嬉しそうに微笑み、零は田の前が真っ白になつた。

じつなるハズだった。

自分はこれを望んでいたのだ。

やつとそれに気付く。

レイの戸惑つた声で、我に帰る。

「あ、あれ？ 零さん、だつこじやないよ？ イイコだよ？」

声は、腕の中から聞こえていた。

「これも、謝罪のうちだ。」

勘違にさせれば、また泣かせる。

そう思つと、まだ胸のうちは明かせない。
自分でもわかっていないのだから。

「…うん。」

背中にレイの手が回る。

彼女を撫でてやりながら、零は自分を苦しめ、時に喜びを引爆へ、つかまえているものが何なのかを考えた。

一番思い当たる、 “ ありえない それ ” 以外の可能性を。

「何百年たつても、俺は俺か。くつ返すのは……もうゴメンだ。いいかげん思い出せよ、『俺』…」

そう言って諦め顔で笑い、俺の中の俺は消えた。

“夢”を見た。

前は、夢なんて時々しか見なかつた。

どこか、明るい場所に俺はいた。

じのところへ、数日に一度のペースで夢を見る。

キラキラと陽に光る縁が、俺の視界の中で楽しそうに、踊るよう^リにゆれてくる。

思い出せそうで思い出せない何かがひつかつているような、もどかしい田間め。

光、緑、空の青、・・・明るくあたたかい光景の中、けれどなぜか青とも緑ともつかない色が悲しみを運んできて、夢は終わる。

美しい色彩と断片的なイメージを残すその夢の、肝心な内容は、あまりよく覚えていない。

けれど、思い出をなければいけない気がする。
もどかしさが不快で、それでいてなんだか懐かしいあの夢。

やがてその夢を見る頻度はだんだんと高くなつてゆき、起きた後に残る夢の印象や、映像の切れ端も多くなつていった。

そしてそれは毎晩のように訪れるようになり、夢の内容も少しはわかるよになつた。

楽しそうに語りかけてくる、少女の夢。

あの緑色は、深い森。

黒々と茂り、そびえる木々の間を見上げると、その隙間に、高く青い空。

紅茶色の髪をした少女が、すぐそばで俺に笑いかけてくる。まるで、レイの笑う顔みたいに、不快感もなく自然にそれは俺の心に入り込んで・・・。

見続けるうちに、俺は気づいた。

これは、記憶だ。

忘れ去った遠い記憶、封じ込められていた、俺にとつて不利益な記憶が目覚めようとしている。

思い出すのは危険だと、本能が告げる、けれど平和な、タイクツそのものの風景。

木漏れ日の差す美しい、深い森。

笑う少女。

レイに似た、その笑いかた。

なぜ、忘れていたのだろう。

俺は、その笑顔がもたらすもの、”それ”を知っている。

それ？
つて、何だ？

その男の声は、いつもやわらかに響く。

「ねえ、聞かせて」

今はわからなくなつてしまつてている何か。
思い出してはいけない何か。

「君は」

優しげな男の、その瞳は、さわやかでいて、けれど忘れていた悲しみを呼び起しすような色。

腕の中に彼女がいる。

閉じたまぶたは、もう一度と開くことはない。

「おまえは、・・・を…」

涙をためた瞳で、けれど怒りの形相で俺を責めているのはスズキ・

・いや、こいつはスズキなんて名じやない。

このときまだコイツは人間で、俺たちのような“名を持たないもの”ですらなく、本当の名前があつたはずだ。

その記憶も、また夢の中。

お前は、本当は誰だ？

いつから俺を知ってるんだ？

お前と俺は、偶然出会ったのではなかつたのか？

なぜかお前と戦う気にならないのは、お前が悪魔の俺に何もしないのは、この記憶に関係があるのか？

夢としてよみがえる記憶の断片は、だんだんと増えながらも全てはそろわざ、全体像までは把握できない。

「僕は、ずっとそれを待つてた。自分で思い出していくりと、もう少しだ。すべて思い出したら、君にききたいことがある。答えは、・・もうわかつてゐけど、どうしても君自身から聞きたい。」
この記憶は何なんだ？

そう訊いた俺に、複雑な表情でスズキは笑いかけた。

痛みを抱えているような、懐かしむような、愛しいものを見るような、それは分類しがたい、どんな表現もあてはまらないような顔だった。

もう少し、そういうわれても俺には夢しかない。

夢が『えてくる情報以外、自分では何も思い出せそうになかった。

「君は、・・・・・てた?」

ああ、そうだ、その通り。

それは、遠い遠い記憶。（続）

森の奥深くには悪魔が住み着いていて、生贋をさげれば願いをかなえてくれる。

村の近くの森にはそんなうわさがあった。

黒々と茂る大きな森は、どこまで続くのかわからないくらいに広く、大人でもあまり深くまで足をふみいれることはなかつた。薄暗い森のところどころ、光でできた柱のように木漏れ日が、太く、細く差している。

しづかなる風景に、子供たちの声が響く。

少女は、友達と甘い木の実をつみにきていた。

そこへ足を踏み入れるのは禁じられていたものの、そういう場所ほど魅力的なものが隠されている。

森でとれる木の実は、どこのものよりも甘く、大きかった。

子供たちだけが知つている秘密のその場所へゆくと、思った以上にたくさんの中がなつており、彼女たちはきやあきやあと歎声をあげながらそれを夢中でつんだ。

そうするうち、だんだんと森の奥まできてしまつていた彼女は、いつのまにかそばにいた友達が、一人も見当たらなくなつているのに気づいた。

呼べばすぐ返事してくれるよね、と彼女はそれを気にしなかつた。かなりの時間がたち、かごいっぱいに木の実がとれて、満足した彼女は、大きな声でみんなを呼んでみる。

「リディー、ノエル、みんなーどーー？」

耳をすましても、しいんと静まり返つた森からは、返事はおろか物音すら聞こえてこない。

「みんなー？どこおーーー？」

自分がきたであろう方角へ、数歩踏み出す。

なんの気配も、人影もない。

時折、どこから鳥の鳴く声と、高じてここで木の葉同士がこすれあう音だけが聞こえた。

木漏れ日が、その角度と色をゆっくりと変えてゆく。みんなを、知っている風景を探して、闇雲に歩き回つてみるが、いつこうに状況はよくならなかつた。

いつのまにか、日は沈みかけている。

どうしよう、もうかえれない。

「わいあくまがでてきたら、どうよりどりひじりひじりよひ。

「うう、ぐすっ・・・ふうっ・・・え」

泣きながら、それでもとほとほと彼女は歩く。

けれど、もうどこに向かつて歩いているのか見当もつかない。

「・・・かえ、りたい、よひ・・・ぐすっ。」

涙でぐしゃぐしゃの顔を、手で拭する。

視界がふさがり、

「うわあっ！」

それでも歩き続けていた彼女は、木の根に足をとられて転んだ。寂しくて、不安で、もう立ち上がる元気もなく、少女はそのまま本格的に泣き出す。

「うるさい。」

すぐそばで、低く恐ろしい声が聞こえた。

彼女の体の下にあつた、木の根と思えたものが動く。

薄暗い森で、木によりかかりながら地面に座つていてその人の顔は、あまりに白く、ほんのりと発光しているように見えた。

「・・・あ、・・・あくま！」

黒い衣服に身を包み、青白い顔のその男は、長い黒髪を振り乱し、人間の姿をしてはいたがひどく不気味だつた。

「だったら、なんだ？ 食つてやろうか。」

彼が伸ばしていた脚を折り曲げると、彼の足の上に倒れこんでいた彼女は引き寄せられる形になつた。

「いっ・・・ひい、やだよお・・・

驚いて涙も引つ込んでいた彼女だが、また泣き出しそうになる。

おおきな手が彼女の頭部をつかむと、上を向かせる。

男の目がぼんやりと光っているのが見えた。

食べられる、食べられるのはやだつ！

そう思つた彼女は、身代わりを思ついた。

「いれつこれあげるつー食べるならいっつちー

せつきたくさんつんだ甘い木の実だ。

赤くつやつやした、かじいippaiのそれを、悪魔に見せる。

だめかもしけないけど、神様お願ひ！

彼女は口を開けて、悪魔が何か言つのを待つた。

・・・ふちゅつ。

水気を含んだ音がして、おそれおそれの口を開けると、悪魔が木の実をぱくついていたところだつた。

長い髪の間からのぞく顔に、表情はない。

いつすりと発光する目が、彼女にその視線をよこす。

「お前・・・

悪魔が恐ろしい声で話しかけてくる。

「今まで俺の脚の上で寝てるんだ。」

「あつ！」

彼女はあわてて立ち上がつた。

ふちゅ、ふちゅ・・・。

悪魔は次々とかごの中の実を食べてしまつ。

全部食べ終わつたらあたしの番かもしれない、そう思い、彼女は

音を立てないようにして、そつと悪魔から離れようとした。

(続)

「どうちへ行くつもりだ。」

「……！」

言いながらも悪魔の視線はかごの中の木の実に注がれていて、こちらを見てはいない。

彼女が凍りつくように突つ立っている横で、見る見るうちにかごの半分くらいを悪魔は食べてしまった。

満足したのか、指についた汁をなめ取っている。

「で？」

と、彼は言った。

「で？」

意味がわからず、彼女は問い返した。

「なんか俺に願うことはないのか？たとえば……どうちへ行けば帰れるのか、とか。」

また、あの光る目で彼女を見ると、かすかに口元だけで悪魔が笑つた。

「え……でも、イケニエ……」

悪魔は願いをかなえるときに、イケニエを必要とする。

その『イケニエ』の意味は幼い彼女でも知っていた。

「別にイケニエじゃなくても、俺を満足させる代価があれば願いはかなえてやるさ。森から出してやるくらいなら、この木の実でもかまわない。」

かごには、まだ半分木の実が残っているが、悪魔はもうそれに興味はないようだった。

森から生きて帰るとわかつたとたん、彼女は元気をとりもどしそのかごをしつかりと手に持つた。

「あの、ありがとう。」

同時に、彼女をここから出してくれる、といつ悪魔への恐れもだ

いぶくなり、彼女は笑みすらうかべていた。

「・・・」

答えずに立ち上がった悪魔は、彼女が今まで見たこともないくらい大きな体をしていた。

声を失い、彼女は再び恐怖で凍りついた。

固まってしまった彼女を、悪魔は体のわりに細い、長い腕でひよいと抱えると、どこにかくしていたのか、恐ろしく大きいコウモリのような黒い翼を羽ばたかせた。

森の入り口までは、ほんの一瞬でついたように感じた。

もうすっかり日は沈み、あたりの景色はすべて夜の顔をしていた。地上に降りしてもらうと、彼女はさつと悪魔から距離をとる。黒い森を背景にして黒衣の悪魔が立つ様子は、白い顔だけが闇に浮かんでいるようにも見えた。

もうここからなら帰れる、と彼女は安心した。

不意に白い顔が消える。

悪魔が森へ帰ろうと、背を向けたのだ。

少し気持ちが落ち着いた彼女は、怖いけれど、帰れることがうれしくて、もう一度悪魔にお礼が言いたくなつた。

「ねえ！」

表情のない、白い顔がふたたび現れる。

かごの中から、ひときわ大きな実をいくつか取り出すと、彼女は悪魔に近づく。

「ありがとう！これあとで食べて！」

差し出されたそれを、悪魔は大きな手で受け取ってくれた。

声も、見た目も、確かに恐ろしいが、彼女にとつて悪魔は恩人だつた。

「じゃあね！またね！」

別れ際、そんな言葉をかけてしまつくりこむ。

その後、どんなに森の奥深くへ分け入つても、彼女は悪魔に出会うこととはなかつた。

なぜだか、迷うことも。

(続)

時がたち、少女はもうすぐに泣いてしまつ小さな子供ではなくなつていた。

もうそろそろ、大人に近づく年齢だ。
けれど、彼女は泣いていた。

「母さん・・・」

彼女は、もう何日も床についたまま、今ではほとんど意識のない母のそばで家族とともに泣いていた。

原因のわからない病氣で、ある日突然母は倒れた。
家族がかわるがわるに一日中そばについて看病しつづけたが、だんだんと眠っている時間が増えていった。

村医者もとうに、さじを投げていた。

彼女のうちには貧しい村の一般家庭で、高名な医者を呼ぶ余裕などあろうはずもなく、家族さえ母のことはもうあきらめていた。
けれど、彼女はあきらめられなかつた。

今まで育てくれた母、たくさん思い出、母がいなくなることなど考えたくもなかつた。

父や、兄弟たちの悲しむ顔も見たくない。
そのためなら、自分の命をひきかえにしても。

彼女は、森へ向かつた。

今こそ、悪魔に命を差し出すときだ。

会えなくとも、何日でも探す気だつた。

そんな覚悟をし、森に入つていぐらも歩かないうちに、彼女は転んだ。

「いたつ！」

体をおこして、自分がつまびいたものを確認すると・・・いつかのように、あの悪魔がいた。

毎間の、まだ明るい森の中、そこだけに夜が広がる。

黒い服と黒い長い髪に囲まれて、青白い月のような顔があつた。

あの時と同じく、木によりかかつて座っている彼が伸ばした足に、

彼女はつまづいたらしかつた。

黒い髪の間から禍々しいほどの鮮やかな紅色をした唇が、うつすらと笑つているのが見える。

わざと足をかけたのかもしれない。

「何すんの！」

彼女が強気なのは、大きくなつたせいもあるが、面識があるため、必要以上に悪魔を恐れていらないせいでもある。

「・・・ぐく。知ってるだ。」

それでも、その低く耳にまとわりつく声はやはり少し恐ろしかつた。

「何を…」

ひつこみがつかず、勢いだけで彼女は言い返す。

「・・・さつきまで、泣いていた。」

なぜ知つているのか。

これも、悪魔の力なのだろうか。

「お前の、母親かあ。命までとるような願いじゃないな。」

彼女がその命をささげる氣で来たことも、彼はわかっていないようだつた。

「あれはなあ、よわーい、魔だ。俺が食つてやろう。」

「え・・・じゃ、じゃあ、あたしは、どうしたらいいの？」

命までとらない、とは言わたるもの、それをさせざる氣で来た彼女は、代わりのものなど何も持つていらない。

悪魔が白い手でゆつくりと髪をかき上げた。

さえぎるものが何もなく、明るい日の下で見る彼の顔は、病的な印象ではあつたが、恐ろしいというほどのものでもなかつた。

逆に、その不思議な色の瞳、何の感情も読み取れない目つきが彼女の気を引いた。

視線が交わると、なんだか彼女は少しだけ鼓動が早くなるのを感じ

じた。

怖くなどないつもりでいた、けれど、あたしは、やっぱり怖がっているのだろうか、と思つ。

あの時、森から帰してもうひとつ見た、黒い巨大な翼を思い出していた。

「あの赤い実。かゞにいつぱい。」

彼女は拍子抜けした。

「そんなことでいいの？」

あの実の季節はちょうどいまが。

難しいことではないが、覚悟してここまで来た自分はいつたいどうなるのだ。

「夕方までにここへ持つて来い。」

そういう残すと、悪魔は立ち上がり、木陰へ消えた。

文字通り、一瞬で、あとがたもなく。

彼女は言いつけどおりに木の実をつむと、悪魔と会つた場所で彼を待つた。

すっかり日がくれ、夜になつても彼が現れないでの、彼女は木の実だけを置いて、母の様子を見に家へと戻つた。

母は夕食を用意し、家族とともに元気な姿で彼女を待つていた。

彼女は、次の日も森へ足を運んだ。
まだちゃんとお礼を言つていない。
どうしても、もう一度、会いたい。

「悪魔ーついるんでしょう？ ねえ、あーーーまーつーあーーーく
うーーーまあまあまあー！」

森の奥深くで、彼女は声を限りに何度も叫ぶ。

鳥や、小動物がその声におびえ、がさがさと散り散りにどこかへ逃げていった。

「くらーつあくまーつでてこーい！あーーーくまーつー！」

「つるむたこ。熊に出てきてほしーのか、お前は。
背後から、低い声でだるそうなツツコミが入った。
どうやら悪魔は騒がしいのが嫌いなようである。

(續)

振り返り、見上げる。

むかし見た彼が、異様に大きく感じたのは自分が小さいからだと思っていたが、成長した今見ても、やはり彼は十分すぎるほど大きかった。

けれど、その体は大きさのわりに妙に細く、

「枯れ木みたーい・・・」

そんな感想を彼女は持ち、同時に口に出していた。

「・・・」

長い黒い髪の間からわずかにのぞく顔を見ると、その感想は明らかに悪魔の機嫌をそこねていた。

「あああっ、『めんね！違うの、今日はお礼いいにきたのにー・・・

ぱたぱたと手を振り、失言を取り消す動作をすると彼女は慌ててそう言った。

悪魔の表情から不機嫌さが消え、なんの表情も浮かんでいない状態に戻った。

いくらのぞいても、冷たい石のようなその瞳には、一かけらの感情もみあたらない。

その肌は、死人のように青白く、紅い唇は、固まりかけた傷口のように不吉な色。

振り乱した長い黒髪、人並みはずれた大きさの、やせすぎた体を覆う服は上から下まで黒一色。

彼の姿は、たしかに異様だ。

けれど、もう一度も、彼に助けられた。

それに、なんの感情も読み取れないその瞳は、なにかを失くした、喪失感そのものの色に見えた。

涙が枯れて、それが血に変わつて、それすらも体中からぜんぶ絞

り出してしまったそのあとのような、そんな底知れない空虚さがそこにいる。

その目を見ていると恐ろしさよりも、何かしてあげたい、その瞳に少しでも明るさを取り戻したいという気持ちがわいた。

改めて彼に向き合い、彼女は確信した。

自分の胸にある、彼に対する感謝と、少しの恐れ、そして、それ以外の別の感情を。

「礼ならもらった。」

「違うよ、ちゃんと、ありがとう、つていいたかったの。」

彼の目を見て、彼女が笑った。

悪魔は、表情を動かすことなくただ彼女を見ていた。

「ねえ、あのね、あたし、なんかもっとできることないかな？」

「・・・」

彼女の言っている意味がわからないのか、悪魔は何も答えない。

「あんたの目、不思議な色だね。」

答えを待つ間ずつと見ていた彼の目は、見れば見るほどフシギで、
淡いグレイにも紫色にも見えた。

「何が言いたい？」

確かに彼の言うとおり、今は目の話をしていたわけではない。

「たとえば、・・・たとえばね？ あなたの身の回りの世話とか、あたしがしてあげようか？ ご飯作ったり、掃除したりさ。ずっと・・・ずっとそばにいて、さ。」

「いらん。どうしても何かしたいなら、・・・そうだな、あの実がなる場所。教える。」

「え」

恥ずかしさを押しての告白を、速攻で拒絶された彼女は、落胆と驚きのまじった声をあげた。

案内してやると、その場で悪魔は実をもいで、一つ口にふくんだ。

赤い実が、彼の紅い唇の中に消えてゆくのを彼女は目で追う。

「で？」

悪魔は、いつかのようになつて言つた。

「で？」

意味がわからず、彼女も、いつかのようになつて繰り返した。

「俺の世話を必要ない。それ以外に用は？」

面と向かつて一度もハッキリ拒絶されると、氣分が悪いのも通り越し、彼女は開き直つた。

「あんた、あたしのこと嫌いなの？」

スネた言葉は、一應質問の形をとつてはいたが、なんとなく嫌われているのではない気がしていた。

嫌いなら、多分相手はしない。

「の悪魔は、突然現れたり消えたりできるくらいだから、そうしよつと思えば彼女に見つからず、もっと静かな森の奥で呼び出しを無視することもできるはずだ。

それが、こつこつ出てきて話に応じてくれる、といつことは少なくとも自分を嫌つてはいないだろ？、と彼女は考えていた。
果たして彼の答えはこつだ。

「別に」

無表情なまま吐き出されたその答えを、だいたい予想はしていたものの、彼女には淡い期待もあつた。

もしかしたら、少しくらいは気に入ってくれてたりするんじゃなかつた。

その期待は裏切られてしまつたが、とにかく嫌われていなければ、まだ望みはある。

「じゃあ、うーん・・・またあんたに会いたい時は、どうしたらいいか教えて？つむせいの、ヤなんでしょう？」

楽しそうにそう言つて彼女は悪魔の顔をのぞき込んだが、同時にゆつたりと、じく自然な動きで横を向かってしまった。

顔のほとんどを不気味に垂れ下がる前髪に隠され、鼻と口の一部しか見えなくなってしまった彼の表情は、よくわからない。

「呼べ、ここで。」

「それだけ?なんて、呼べばいい?あなたの名前、教えてよ。」

「悪魔、でいい。」

「悪魔つて、だつてそれ名前じゃないでしょ?」

「俺に名前はない。ただの、悪魔だ。」

個の名前がない、というのはちょっと人間では考えられない。けど、悪魔つてそういうものなのかも、と彼女は考え、なんとなく納得した。

「わかった、悪魔つて呼べば、来てくれるんだよね?」

肯定の意味なのか、彼は答えない。

「絶対来てよ?あたしはね、レイアつていうんだ。」

何も言わず、どこを見ているのかもよくわからない悪魔に向かつて明るく笑う彼女は、彼に惹かれ始めている自分を自然に受け入れていた。

(続)

だが、彼女、レイアのまわりはそうではなかつた。
仕事の合間をみつけては、毎日のように一人で森へ消えるレイア
を、あるとき女の友人がこつそりと追いかけた。

きっと恋人とでも会つているのだろう、顔を見てやれ。

そんなイタズラめいた気持ちで後をつけた友人は、その光景を見
て自分の行動を悔いることになる。

黒く細長い影に寄り添うレイアは、その異様に大きな影を、こう
呼んでいた。

「ねえ、悪魔？」

逢瀬の相手は、悪魔。

自分の友人が悪魔に魅入られてしまつたなんて！

そつとその場を離れると、友人は村へと帰り、一人悩んだ。

その彼女に、声をかけるものがいた。

「どうしたの？ そんなところで一人でいると、寂しいでしょ？」

「ラファエル・・・」

天使の名をもつその青年は、彼女たちの共通の友人の一人だつた。いつでも明るく笑つていて、誰よりも優しく誠実で、整つた容姿をした、まるで神に愛されているかのように出来すぎた彼は、村の人々から、老若男女を問わず好かれていた。

彼女もその一人だつた。

彼になら、話してもいいかもしない、と彼女は思う。

優しい彼なら、きっとみんなには黙つたままで力になってくれる
だろう。

一緒にレイアを説得して、悪魔からとりもどすのだ。

「んー、それはちょっとまって。」

彼女が見てきたことをひとつおり話し、一緒に説得を頼むと、ラ

ファエルはそう言った。

「え・・・なんで? だつてこのままじゃレイアが悪魔に」
異様に背の高い体に、上から下まで黒い衣服をまとつた妙に細い、
氣味の悪いシルエット。

あれは、あの恐ろしい姿は本物だ。
なにより、悪魔と呼ばれていた。

救わなければ、彼女たちの友人、レイアは殺されてしまう。

「怖かつたのはわかるけど、何もしてないんだからそれが、その
人が本物の悪魔かどうかわからないでしょ? • • • 別にレイアだつ
て何ともないし。」

そうなのだ。

ちよくちよく森にでかけるレイアに気づいてからもう数週間はた
つていて、けれどレイアに前と変わったところは何も無い。
元気な姿は、命を吸い取られているようにも傷つけられているよ
うにも見えない。

いつでもはつきり自己主張する彼女は、操られていのつにも見
えなかつた。

それに、そう呼ばれているだけでホンモノの悪魔がいる、などと
はすぐに信じられることがではない。

なにかの目的で、悪魔を名乗つているただの人間かもしけない。
とはいって、相手が本当に悪魔なら、放つておいていいはずがない。

「でも・・・」

なおも何かいおうとする彼女を制して、ラファエルは言う。
「僕が確かめてくる。」

黒々と茂る森。

木々の間から、細く差す陽の光。

時折、鳥の声と、どこかで動物がたてる葉音がかすかに聞こえて
くる以外は静かなその場所で、男女の話し声がする。

「・・・で、結局何の用だ。」

「会いたかつたんだもん。」

「うつとうしい・・・食うぞ。」

「悪魔は、そんなことしないよ。アハハ。」

わかりきつたことだ、というよつに笑う少女の声。
脅すような口調で話していた低い声は、あきらめたよつに黙り込んだ。

かさり、と、彼女たちから少し離れたところで茂みが揺れる。

悪魔がそちらに目をくれた様子は、その長い髪に隠されて見えない。

「ねえ、悪魔。」

レイアが悪魔の髪に手を触れる。

悪魔はされるがまま、動かない。

彼女の手が優しくそつと髪をかき分けると、彼の白い顔があらわになる。

「・・・あたし、あんたが好き。」

ゆつくじと顔を近づけ、彼にくちづけようとしてみる。
かせれ・・・またどこかで葉音が聞こえた。

もう少しで唇が触れる距離、けれど微動だにしない悪魔。
その表情は、何も感じていいかのように動かない。
無反応なその姿に、レイアは逆に恥ずかしくなった。
相手にされていない気がして。

さつと体を離すと、もう顔をみているのも恥ずかしくて横をむく。

「・・・いやならこやつていいなよ。」

「別に。」

ヤじやないつてこと、は。

パツと悪魔のほうに向き直る。

「そう、なの? ヤじやないの?」

悪魔は黙っている。

嫌じやないなら、と一人で舞い上がったレイアは、彼に顔を近づけてそつと目を閉じる。

「じゅ、悪魔がして。」

「したら何かくれるのか？」

やはり無機質なその声と、まったく空気を読まない問いに、ムツ
とし、言い返そうとレイアは閉じていた目を開いた。

「！」

すぐ目の前に、悪魔の目があった。

灰色か、淡い紫色か、どちらともつかない薄い色の瞳。
長いまつげと、くつきとした一重。

ほんのわずか、うつとりしてこのよひつな、眠たげにも見えるその
目つきが優しく感じられる。

もつと見ていたいけれど、彼女は目を閉じる。

こんなに近づいて初めて、かすかに彼から感じじる、花のよがない
い香り。

唇が、触れて・・・離れる。

「これでいいか？」

さつきの優しげな目つきが幻だつたかのよひに、悪魔の表情には
何の変化も見られない。

一方レイアは、胸に広がる幸せを感じられんばかりに抱きしめて微
笑んでいた。

悪魔の腕を両手で軽く抱くと、そこへ額を押し付けよひにして
小さくうなずく。

「何をくれるんだ？」

興味もなさそうに悪魔が訊く。

「なんでも、あげる。あたしが持つてるものなら、何でも、命で
も。」

甘えた声で、レイアは小ちやかでした。

「こんなことで命まで取るか。どうせたいしたものなど持つてな
いだろ？、おまえは。」

彼の腕にくつこたままの彼女の方を見る「ともなく、けれど特
に振り払いもせず悪魔が言った。

人の心の暗い側面から生まれた彼と、そんな彼を愛することもためらわざ受け入れる、暗さなど持たぬかのような、光そのもののような彼女。

正反対であるがゆえに、光と影のように、一人が共にあることこそが真理だとでもいうように、“悪魔と人間”という特殊な関係ながら、一緒にすごす時間は彼らにとってごく自然だった。

(続)

ただの幸せカップルじゃないか、もう！

レイアが悪魔に顔を近づけたあたりで見ていられなくなつたラフ
エルは一人、心の中でぶつぶつと文句を言いながら帰つていく。
あの“悪魔”と呼ばれていた男が本当に悪魔なのだとは思えない
し、何者であるにしても、彼女になにかしそうには見えなかつた。
それに、裕福な家庭に育つたわけでもない彼女を口説き落とした
ところで、その心以外に奪えるようなものなどない。

彼にくちづけようとしたレイアの、今まで見たことのないような
女性らしい表情。

くやしいけど、見守るしかないかな。

ひつそりとレイアに想いを寄せていた彼はそう思った。
幸せそうな、彼女の笑顔。

大好きなきみの笑顔。

僕の想いは叶わなくとも、きみの笑顔だけは守りたい。

だから今は、まず一人でいられる時間を守つてあげないと。

彼は、村へ戻ると、レイアの友人に、彼は悪魔ではない、と告げ
た。

彼女を勇気付けるように微笑んで。

けれど、本当に大切だったから。
見過ごすことなどできなかつた。

友人は、レイアのいないあいだに、こつそりと彼女の家族に会い
に行つた。

「レイアは、森の悪魔に魅入られてるんです、本当なんです！」
家族も最初は信じず、笑つて彼女を帰した。

心配してくれるのはありがたいけれど、めったなことを言つもの
じゃない、と。

けれどある日、レイアの兄が一人で森へ入つていく妹を見てしまつた。

何の用もないはずの森へ、一人で入つていく妹。

「レイア！どこへ行くんだ？」

「おにいちゃん！」

森へ入るのを止めようとする兄に、レイアは悪魔が自分を救つたこと、母の病気を治してくれたことを懸命に訴えた。けれど、兄にとって、彼女の家族とて悪魔は悪魔でしかなかつた。

結局、無理やり家に連れ戻され、一人でいることは許してもらえないくなつた。

いつも家族が、友人がそばにいて彼女を見張つた。

「ごめんね、レイア、ごめんね。」

外で仕事をしているとき、彼女を見張る友人はそう言って謝つたが、レイアは力なく笑うだけで答えなかつた。

明るく快活だった彼女は、ほとんどしゃべらなくなり、その笑顔は失われていつた。

そんな彼女の様子に、家族や友人は心を痛めたが、それでも悪魔などにレイアを渡すよりはましだと考えていた。

友人の中には、あのラファエルも当然含まれており、彼だけが皆と違うことを思つていた。

“悪魔”といったときの彼女、今の彼女。
生き生きとしていたのは、どちらか。
本来の彼女の姿は。

彼には、どうすべきかがわかつっていた。

それでも、いつでも見張られているレイアを、ラファエルはどうしてやることもできなかつた。

会いに行かせれば、彼女はもう戻らないかもしけない。

それは、家族にとつては彼女の死を意味する。

二度と会えない、というのは彼にとつても辛すぎで、その手伝いをする決心はどうしてもつかなかつた。

彼女の笑顔を守ると決めたのに、そうすることができなかつた。

もしもこれが彼の罪となるならば、それはあまりに厳しい。けれど運命はそう告げ、彼を責め立てた。

(続)

木々の間から、月の光が射す。

ふらふらとした足取りで、深い森の中をレイアが歩いてくる。家族も、友人も、帰るべき村も何もないらしい。

ただ、会いたい、そばにいたい、ううん、いてほしい。

魅入られているのかもしれない、魔物でもいい。

死んじゃうかもしないなんて、もうずっと昔に覚悟したことだ

もの。

彼女は、家族が寝静まったところをそっと出てきたのだった。二度と戻らないつもりで。

大切な家族たちと、少しだけ心が通い始めた魔魔と。

選べなくて、迷い続けて、疲れ果てて、それでも、虚無感を抱いたその瞳が、一瞬だけ優しく見えた瞬間が忘れられなくて。

暗い森を彼女は歩く。

さよなら、母さん、父さん、おにいちゃん、村のみんな。

みんなは、あたしがいなくても大丈夫。

けど、魔魔は・・・あたしは、魔魔と一緒にいたい。

つかれきった顔に、置いてきたもの全ての重みをたたえた涙が光つた。

ふわりと、花のよくな、なんだかい香りがする。

そう感じた瞬間、体の自由が奪われた。

まだ呼んでもいないのに、魔魔が柔らかく彼女を抱いていた。

「泣くな。不快だ。」

冷たい言葉とは裏腹に、大きな薄い手のひらが、ぎこちなく彼女の髪をなでる。

「う、ふつ、うええええん！」

その、ほんの少しの優しさは、彼女の涙をとめどなくあふれさせ

た。

「うるさい。」

優しい声で、悪魔は腕の中の彼女にそう言った。

長い時間、彼女は泣き続けたが、深い森がその声をすべて呑み込んだ。

いつの間に眠り込んだのだろう、あれは夢だったのか、彼女は自分がベッドで目を覚ました。

悪魔は、見当たらない。

彼のいない、どんよりとした、よどみの中をただよつた毎日。ため息について身を起こした彼女は、あきらめと絶望に満ちたそこへ戻つていった。

深い緑。

暗い森の奥、空気は重く沈み、動物たちさえそこにはいない。その、森の奥にただよう空氣そのものが彼だつた。

昨晩、泣き疲れて眠つたレイアを家まで送り届けた彼は今、人の形をほどいて、霧のように森に漂いながら休んでいた。

人間であれば、眠つている状態。

けれど彼は、完璧には眠つていなかつた。

まどろみの中で考え方をしているが、そうしたくてそういうものでもない。

すべて忘れて、眠つてしまいたいのに、聞こえてくるのだ。

泣いているような、震える彼女の声、彼を呼ぶ声が。

だから、当然考えているのは、その彼女のこと。

腕の中で泣いていた彼女、彼女の涙が流れるたびに襲つてくる、氷よりも冷たい手ではらわたをかきまわされる不快感。

心は幾度もとがつた爪をつきたてられ、いまにもバラバラになりそうだ。

その涙が、なぜこんなにも不快なのか。

彼女の笑っていた顔ばかりが、心によみがえつてくるのはなぜなのだろう。

その涙をすべてこの胸にうけとめてやりたい、できるものならすぐにも笑顔に変えてやりたいと、強く思った。

なぜ泣いているのか、あのとき彼は彼女の心を探った。

彼女が今考えていることも、記憶も、魔物である彼には目の前でおきたことのように理解できた。

そして、彼女が泣いているのは、ほかの何より自分のせいなのだと知った。

ならば、自分が消えれば、彼女はもう泣かずにする。

それは、彼女の心を探るのと同じく、魔物の彼にはなんでもないことだ。

彼女の記憶を消し、一度と姿をあらわさなければいいだけ。

意識しなくともその熱を肌で感じるほど、彼女が彼に寄せる想いは強かつた。

けれど、その想いも、共にすこした短い日々の思い出も、初めから無かつたように綺麗に消してしまったことが、彼にはできる。できるはずだった。

そうしなければ、どうなるかは分かりきっている。

悪魔と人間の恋など、不毛だ。

何も生み出さない。

生み出すどころか、壊し続けるだけだろう。

彼女がどんなに求めていようと、悪魔は悪魔、人に害をなすもの。ほかのなにかに変わることなどできない。

それゆえに、待っているのはきっと、想像もつかないくらいの悲劇。

それでもそうしなかった、いや、できなかつた。

それが自分にとってのタブーであるかのように、彼女の中の自分を消してしまうことで、自分自身が消えてしまつてしまつよつ。

それでも、そうしておくべきだつた。

悪魔・・・ねえ悪魔。

彼女の声がきこえる。

やはりそうしておくべきだった、でもできなかつた、それでも・・・

思考は堂々巡りを繰り返す。

けれど、人は忘れることができるから。

きっと、今のこの時を、何ヶ月か、もしかしたら何年間か、やりすごしてしまえば、彼女は、レイアはいつか俺を忘れる。

そしてこの声もいつか聞こえなくなる。

この声を聞くことは、呼びかけを無視し続け、耐えることは自分に課せられた罰なのだと、彼は思う。

いつか聞こえなくなるであろう声。

彼女の意識がある間、絶え間なく聞こえてくるそれは彼を休ませてはくれなかつたが、けれどそれは彼女の想いそのもの。

聞こえなくなるときを思うと、神経がすり減つていいくこの責め苦さえ、なにか大切なもののような気がした。

ねえ、悪魔。

聞こえ続ける彼女の声は、今にも泣き出しそうで、いつかのよつな愉しげな響きは、どこにもない。

どこにも。

広い空間を霧のように漂つていた彼は、人の姿を取り一箇所にまとまる、みずから肩を抱き、うずくまつた。

泣いている小さな子供のようだ。

涙は、流れていない。

きつくつかんだその肩が震えることもない。

石のようにぴくりとも動かず、ただ、かすれた声で一度だけ、彼女の名を呼んだ。

「・・・レイア」

そうして自分自身を抱きしめていなければ、散り散りになつたまま消えてしまう気がしていた。

(
続)

満たされない愛しさは、狂氣を呼び、心を壊す。

「のままじや、あたしは壊れてしまつ。

どうせ壊れてしまうなら、もう何もいらない。

痛いだけの心も、あんたのいない時間も、何もかも。

一度は戻ったものの、その後何度も、彼女は夜中に家を抜け出し、森の奥深くで座り込んで泣き続けた。

そのたびに魔物は姿をあらわすことなく、気づかれぬよひに、その力で彼女を眠らせてはそつと部屋に帰した。

そうするうち、家族が彼女の奇行に気づいた。

恐ろしい魔物が、とうとうその本性をあらわしたのだ。

いよいよ彼女をイケニエにするつもりなのだ。

そう思い彼女の身を案じた家族たちは、夜になると、ドアと窓に外からカギをかけた。

自力で外に出られなくなつた彼女は、窓にすがつて毎晩弱々しい声で泣いた。

確かに彼は、魔物なのだと、泣きながら彼女は思う。

もうずっと会つていないので、それでも自分をこんなにも惹きつける。

あの瞳、うつろな瞳で今も彼はあの森にいる。

そばにいて、笑つて、いつかその瞳にいろんな表情を見る日がくると思っていた。

笑う顔が見たかった。

自分が、彼と一緒にいて幸せだったよひに、笑っていたよひに、いかを無くしたようなその瞳、とりもどしてあげることができないなら、満たしてあげたかった。

はかなげな花を思わせる、ほんのかすかな彼の香り、夜空から降りる月の光をまとったような、熱を感じさせない肌の色、夜そのもののような、柔らかい黒髪。

彼といた、あの森、深い緑。

薄暗いそこに射す、木漏れ日の輝き。

何を思い出しても、涙があふれた。

その泣き声は遠く、森の奥の悪魔に直接届き、人の苦しみや悲しみを糧にしているはずの彼を毎晩さいなんでいた。

彼女の頬をつたう涙の一粒一粒、その感触までわかる。

忘れろ・・・忘れてくれ。

彼自身が面向いて彼女の記憶を処理してしまえば、こんな苦しみはもうやつてこない。

一瞬で、すべてがなかつたことになる。

けれど、彼にはわかつていた。

あの時できなかつたことが、今できるはずがないと。

彼女の狂おしい叫び、一秒たりともどぎれずにつながつたままのかなわぬ想いで千にも裂かれる心。

お互いの心は相手を求めるばかりで、今彼女の前に行けば、きっと彼は彼女を森へ連れ去つてしまつ。

けれどそれは、彼女から人の暮らしを奪い、今までの人生に別れを告げさせることになる。

人としての生き方を、人の幸せを彼女は永遠に失う。

だから、いまを、この時を乗り切りさえすれば、どんなに辛くともきっと、時間が優しく記憶を薄れさせ、荒れ狂う思いを鎮めてくれる。

その考え方まるで人間のようだったが、元はといえば彼は、人間の想いからできた怪物、人間の心そのものなのだ。

けれど、長い時間人を見てきた、その感情を糧とし触れてきた彼は、本当は知つていたはずだった。

人たちがたどつた、数々の悲恋の結末を。

その思いが強く、純粹なほどに、結ばれなかつた恋人たちが迎える最後が残酷であることを。

薄暗い昼の森で、久しぶりに見るその姿は、見る影もなくやつれ、ふらふらとした足取りは失つた心を探してさまよつてゐるようだつた。

すぐにでも姿をあらわし、はかなげにやせ細つてしまつた彼女を、レイアを抱きしめてやりたい、と悪魔は思つ。けれど、それはできない。

彼女のために。

本当は、そうではなかつた。
抱きしめてやればよかつたのだ。
今まで彼は、幾度も間違えた。
けれど、まだやり直せた。
これは、最後のチャンスだつた。

(続)

「ねえ、悪魔・・・」

いつも届く、泣きそうな声とは違う落ち着いた響き。

ああ、おまえの声はこんなに心地よく耳に響くものだつたんだな。
おだやかな気持ちが、彼によみがえつてくる。

彼女の声が、癒しを与えてくれていた。

「あんたが、好きだよ。だから、あたしを・・・あげる。」

愛しいものに語りかける、優しい声が、悪魔の心を満たした。
何もいらない。

おまえさえも。

その声、今のその言葉だけでいい。

痛みも、悲しみも、愛しさも、すべてたつた今報われた。
お前の中から消えてやろう、だから、俺を忘れて笑え。
いつかみたいに。

やつと決心した彼が、彼女の記憶を操作しようとした、その瞬間、
彼女の手の中の何かが木漏れ日に反射した。

彼女がゆっくりと、前にむかって倒れていく。

彼は急いで人の姿に変わると、彼女を抱きとめようとした。

一瞬。

一瞬だけ、遅れた。

最後の瞬間まで迷い続けた彼の指の、ほんの数ミリ先をかすめて、
彼女は地面に倒れこんだ。

赤い色が、広がっていく。

突然世界が奪われた。

何も見えない。

何も聞こえない。

きつと、おまえの声が聞こえないからだ。

笑いながら、またおまえが俺を呼んでくれれば、きつと世界は戻つてくる。

違う。

お前は一度と俺を呼ばない。

動かない、笑わない。

なぜなら目の前でどんどん真っ赤に染まつてこゝれがお前だから。

ああ、そうだ、ちゃんと、見えている。

抱き起こす俺の腕の中で、どんどんどんどん真っ赤になるお前。ちゃんと聞こえている。

徐々に小さく、弱くなつていいく苦しそうな呼吸。

おまえは見えてるか、この俺が。

「ほり。

血の泡をふいているレイアの口元が、かすかに、ぼんやり。

おまえは聞こえているのか、俺の声が。

「レイア！レイア！…なぜっ？！…ダメだ死なせないぞ…！」

胸にささっている刃物をぬいて、傷口をふさいで、少し俺の力を

分ければ。

死んでしまう前なら。

彼女が、死にたくないと思つてさえくれれば。

けれど、彼女はただ死だけを望んでいた。

取り乱す彼を前にしても。

彼の氣づかぬうちに、彼女は自分を苦しめるだけの正気など、とうに手放していた。

傷口からは血があふれ続け、彼がそそぐ力は、彼女の中に受け入れられず、薄暗い森の空気に、淡い影となり薄れ、溶けていく。

「聞けつ！俺が、俺が間違つてた！もう離れない！そばにいるから！だから生きてくれ！頼むから…」

怒鳴る彼の声は、ところどころ悲鳴にも聞こえた。

「・・・

レイアが、何か言おうとするのに止り、彼は怒鳴のをやめ、それをやきよつ小さなその声を、きっと最後になる声を聞き取ることに集中する。

「・・・え、あくま・・・だいすき・・・あたしのいのち・・・もら・・・て?」

血だらけの彼女を、血ひも血にまみれながら彼は強く抱いた。

(続)

昼間であること、従つて人の目がある、とこゝに油断していった。

彼女が姿を消したこと、家族はしばらくして気づいた。が、同時に台所のナイフが一本消えたことまでは、誰も気がまわらなかつた。

気づいたとしても、まず彼女を見つけなればどうにもできない。彼女の母が、あわてた様子で走つていくのを見て、ラファエルは彼女が逃げたのか、とすぐに思い当たつた。

なんとなく、いやな予感がした。

見つかりやすい昼間に逃げ出す、後のことを考えていその行動。

そして、会いに行く相手は、悪魔。
ここで心配していくても何にもならない。

とにかく森に行くしかない。

彼は仕事を放り出し、全速力で森へ走つた。
前にレイアと悪魔が会つっていたあたりをめざして。

小さな彼女の肩に顔を押し付けていた。

抱きしめた彼女の呼吸が、耳元で聞こえる。
もう止まつてしまいそうな、弱々しいその音。

とまる瞬間が、怖い。

目の前にある現実を、この世界すべてを拒絶するように目をきつ
く閉じて、彼は彼女を抱きしめ続ける。

まるで、そうしていれば彼女が死ないと、信じてでもいるよう
に。

もうすぐきっと止まつてしまつながら、本当は聞いていたくない。

けれど、生きている彼女の音を、最後まで聞いていたい。

血のニオイがする。

血のニオイしかない。

まだあたたかい、やわらかなカラダは、もつだらんとしてほとんど動かない。

もうすぐ確実にやつてくる、彼女が自分から永遠に奪われる瞬間。かすかに、余韻のように残っていた呼吸が、完全になくなつた。

彼は閉じていた目をあけ、顔をあげた。

ぼうぜんとした彼の表情は、見ようによつては無表情にもとれる。彼女の命が、そのカラダを離れ、彼は唐突に幸せな気持ちが自分を満たすのを感じた。

苦痛だとか、悲しみだとか、言葉では言い表せない、彼を支配していたすべてを押しのけてしまつ、大きな波。

一番近くで見た、あの瞳を、笑顔を思い出す。

これは、彼女だ。

彼女が自分の中に入つてくる。

これで、ずっと一緒にいられるんだ。

一つになる意識を通して、最後に彼女がそう思つていたのがわかる。

そして、彼女の命が完全に彼に吸収されてしまふと、幸せな気持ちは幻だつたかのように消え、彼はまたもとのヌケガラに戻つた。

本当はあのとき、俺はお前を綺麗だと感じていた。

一番幸せそうに見えた彼女の笑顔が、胸によみがえる。

そのときを再現してみると、血でぬれた彼女の唇に、唇を重ねた。

なんだか別のもののように感じる。

なまぐさい血のニオイも、塩氣をふくんだその味も気にならなかつた。

ただ、笑顔がそこにはない事だけが彼をさらに打ちのめした。力なく、けれど手を放すこともできずに、だんだんと暖かさを失う彼女の体を抱いていた。

すがりついていた。

彼の耳に、遠い足音が聞こえる。

うずくまる黒い影がみえた。

あれは、悪魔だ。

抱いているのは、レイアだろう。

怪我でもしたのだろうか。

苦しい息をガマンして、ラファエルはさらに走る。近づくと、彼女は動いておらず、あたりは赤く。血だけの彼女を、無表情で悪魔が抱いていた。ついに悪魔が彼女の命を奪つた、だれが見てもそういうことだった。

「・・・・！おまえは、レイアを！」

悪魔に対する恐れよりも、レイアを殺された怒りが先に立つた。

悪魔が血の付いた顔をあげ、感情のない声で言ひつ。

「食つた」

口元にも血がついている。

彼女の血をすすつてでもいたのか。

「返せ・・・レイアを返せ！」

その亡骸だけでもいいから。

その叫びは、悪魔を責めるように。

「いやだ」

悪魔が死体を抱く腕に、少し力をこめたように見える。

「なぜ、・・・殺した？！」

理由を聞いても彼女は生き返らない。

けれど、理由がなければ、彼女が哀れすぎた。

愛していたのに、殺されるだなんて。

「こいつが望んだ。」

うそだ、とすぐに言い返せない。

確かに、森に行けなくなつてからレイアの様子は、そんなことを考えかねないものだった。

それでも、言つことはまだある。

「だつたら殺すのか！ レイアはお前を、お前なんかを信じて、愛してたんだぞ！」

「あい？ そんなものはない・・・どこのもだ！ ありもしないものをふりかざすな、人間。」

レイアの死体を抱いたままの悪魔が、光る瞳でにらんでくる。ラファエルは、負けじとにらみかえした。

「そりゃ・・・こいつが好きだつたのか。ならお前も、俺に食われろ。俺のなかでこの女と結ばれる、幸せだろ？？」

あの光る瞳で、心をのぞかれたからしかつた。

悪魔の力を見せ付けられ、じわり、と恐怖がわいたが、すでにケンカを売つてしまつている。

どちらにしろ死ぬなら、ここに引き下がるのは馬鹿馬鹿しい。

死ぬのは言いたいことを言つてからだ、とラファエルは覚悟を決めた。

じゃなきやレイアがかわいそうだ、と。

「お前は、・・・レイアを、どう思つてたんだ？」

無表情だつた悪魔の顔が、ピクリと反応した気がした。悪魔が何を思つたかはわからない。

けれど、少しさは後悔すればいい、してほしい。

彼女の気持ちが届けば、とラファエルはたたみかける。

「なぜ今まで食わなかつた？ 僕は、見たんだぞ！ あんなに親しそうにしてたじゃないか！ 僕は・・・僕は、だから・・・信じてなんだ！ あの子はお前を悪魔と呼んだ、けどおかしくなることもなかつた、すぐ殺されることもなかつた、だから・・・お前は本当は悪魔じやないんじやないかって・・・お前もレイアを・・・」

かすかに、悪魔が眉を動かす。

「うるさい！・・・悪魔が、人を？愛・・・なんてない、ありもしないものをふりかざすなど、いつていいだろ？？」

声を荒げた悪魔の顔は、怒りよりも、嘆きを感じさせた。

ラファエルはなおも言葉を続ける。

「じゃあ、なぜずっと彼女を抱いてるんだ？なぜそんなに苦しそうなんだ！なぜ・・・なぜ・・・泣いてるんだ・・・」

(続)

頬を伝う感触。

なぜ・・・？なぜ・・・それは・・・
おまえが いない。

はつきり意識した瞬間に感じた、自分が内側から裂かれる感覺。硬く、冷たい骸はもう、彼女ではない。

彼女は死んだ、永遠に失われたのだ。

その、一度と戻らぬ彼女を、自分がどう思っていたか。叫んだ。

そして記憶は途切れた。

「お前は、ラファエル、なのか？」

そう言つた零に、微笑んで、スズキは、ラファエルはゆっくりとうなずくと、問いかける。

「じゃ、きかせてもらおうか。ずっととききたかったこと。・・・
ねえ、君は、・・・君は彼女を愛してた？」

ラファエルの青とも緑ともつかない、不思議な深さを抱いた瞳が、零をまつすぐみつめてくる。

零は無表情なまま、ゆっくりと答えた。

「わかつてんんだる。」

肯定するように、ラファエルが笑顔を浮かべた。
愛していた。

悪魔でありながら、人を。

そして、愛されていた。

俺はずっと前から、知っていたのだ、
愛を。

その感情が、本当に存在していることを。

それは確かにエゴででき正在して、錯覚を呼ぶもので、その概念は妄想めいている。

それでも、それが一人をつないでいるなら、共有しているその想いが、ほとんど一つになつていてるなら、相手を自分自身よりも大切に思えたなら、それは愛と呼んで間違いないのだ。

「今せ・・・レーベルをのじるがめいひなの? ねえ? 」――
「なーーー。」

続く言葉は、さつままでとうつて変わって、軽いノリでレイへの
気持ちを問う。

すゞかり晉段よりの“ススキ”た

とくになんたるに

似ているけれど、同じじゃない！

レイのために、俺はあんなふうに泣けるだろうか。

新宿の夜景が見えて、また、おもしろい。

とりあえず、考え込む俺をしたり顔で見つめていたラファエルの頬を、色がかわるまでつねりあげてやる。

「いたたついたいいたい——。ああやの（気軽）にやうべく（暴力）ふるわにやうでつ！」

本当に痛いらしく、目には涙がにじんでいるが、口元は笑っている。

なぜ、笑えるのだろう。

あの時こいこにはまだ
ただの人間たてたクセは俺に向かってきだ
俺が喰つたレイアを、コイツも愛して
いたからだ。

愛するものを奪われて憎いはずの、その相手になぜ。

「なぜお前は、そんな顔ができるんだ?」

何百年も前だから？

時間が、想いをうやむやにしてしまったのか？

人が悪魔に立ち向かうなら、きっとそれは死を覚悟している。目の前で一人死んでいるのだから、なおさら強い意志が必要だつたはずだ。

そんな強い想いも、時間とともに風化するのだろうか。あんなに俺たちを苦しました、愛とは、そんなものか。

考え込むあまり、ラファエルの頬をつねっていた手の力が少しゆるむ。（が、放すことはない。）

「僕、そんな変な顔？」

どう聞こえたのか、ショックを受けたようにラファエルが返す。

「俺が、憎くないのか？」

零は、彼の言葉にかまわず自分の疑問だけをぶつける。

「ああ、・・・そのことが。ん・・・まあ、ちょっとは、憎らしいかな？」

言葉とは裏腹に、やはり笑顔（涙目）のまま。

「でもねえ、君、あのとき泣いただろ？ 悪魔の、くせにさ。おまけに倒れこんで動かなくなっちゃってさ、死んじゃったかと思つたよ。でも、だから、気持ちは、彼女の気持ちは届いてたんだって、ちゃんとわかつたんだ。なら仕方ないじやない？ そしたら直接手にかけた、とはちょっと思えないし、そうだとしても、君は彼女の願いをかなえただけ。そして、彼女にとつては、好きな人とひとつになるほうが、残りの、君のいない人生よりも大事だったんだもの。・・・あの子が好きになつた君を、悪魔のクセに人を愛せる君を、僕は信じてみたい。彼女の愛した君は、僕にとつても大事なんだ。今は・・・とても。」

よどみなく言い切る。

想いは、消えたわけでも、うやむやになつたわけでもなく、変わらずそこにある。

何百年という時を経ても、ずっと生き続けていた。

そうだ、それは、ここにも。

「ねー、そろそろ手ぇはなしてよーほっぺたのびちゃうよー・・・あれ？君・・・」

零は、あのときの涙の続きを流していた。

音もなく泣き続ける彼は今、あの森にいるのだろう。

まだ人間だったあの時、ラファエルは確かに、あんな結末をもたらした悪魔を残酷だと感じた。

死を選ばせるくらいなら、そして少しでも彼女を想っていたなら、どこか、家族の手の届かない場所へ連れて行つてくれればよかつたのだ、と思った。

一瞬だが、憎みもした。

けれど、その後長い長い時間をかけて、彼の考えは変わつていつた。

変わつたその考えは、零を見守るつち、だんだんと確信めいたものになる。

そして今、声ひとつあげずただ涙を流し続ける彼を見て、レイアの願いこそが残酷だったのではないかと思うのだ。

なぜなら、あのときすでに悪魔は、その身を滅ぼしかねないほどに彼女を愛していたのだから。

愛していたから、人間としての彼女の人生を奪つてしまふことができなかつた。

人間である彼女を、モノのように、奪つてしまふことができるなかつたのだ。

けれど、その愛が彼に負わせた傷は、記憶を封じてしまつほどに深かつた。

そうしなければ、生きていけないほどに。

あの時彼があげた叫び声は、今でも耳に残つていて。

生きたまま体を裂かれているような、聞くだけで身がすくむ叫び。自分の気持ちと、その行き場が永遠になくなつたことに気づいた

あの瞬間、彼は、自分で自分を殺そうとしたのかもしれない。
まるで後を追うように。

けれど、それはかなわず、ただ記憶だけが、開くことのない扉の
奥へ閉じこめられて。

それをこじ開けたカギは、きっと・・・。

「だいじょうぶ、今度は、今度こそ何があつても僕が守るよ、キ
ミも、あの子も。」

ラファエル、大いなる天使の名を持つ彼は、涙を流し続ける悪魔
のそばで、自分に言い聞かせるようにそうつぶやいた。

「零さんオネガイ。チャンネルかえて。」

ベッドの上から、フトンでできた芋虫が俺に指図した。

時刻は夜11時半を少しそぎたところ。

すでに部屋は暗く、TVを見ている俺を放置しレイは明日の仕事にそなえて寝る所だ。

ボリュームは抑えあるが、やはり悲鳴と不安をあおるBGMが気になるのだろう。

「お前も一緒に見ればいいじゃないか“いけにえの味”」

少し古いホラー映画だ。

チープな作りだが、その分ダイナミックすぎる効果が俺的にはストレートに笑える。

レイが無視して寝れるならそれでもよかつた。

気になるというのなら隣で一緒に見させてつもりで、あえてイヤホンをつけたり録画に回したりはしなかった。

少々遅くなるだろうが、別に朝まで寝かせないとこいつもりはない。

俺は遠慮なくレイに声をかけた。

彼女の答えにも遠慮はない。

「イヤに決まってるでしょ？他のみなよー。」

眠たげな声は、甘えているようにも聞こえる。

「俺はどうしてもコレが見たい。

音だけ聞こえる方が怖いんじゃないかな？

実際はそんなにキツくない、来いよ。

なんて、俺の言つことを信じて素直に・・・でもないが隣に座るのがレイのバカな所で、可愛いところだ。

思つても、言わない。

今までそう思っていた。

ふと思つた。

言えない、なのかもしれない。

何度ダマされても引っかかるのは、疑いながらもまた信じようと

するのは、それが願いだからだ。

悪魔の俺なんかを、レイは信じたいんだ。

自分が何者であるかなんて捨てて、それに応えたい。

今の俺は、その考えを否定しない。

だが、行動する勇気もない。

失った笑顔が胸によみがえりかけ、もう失くしたくないと恐怖し・

・動けない。

判断がつかない。

何もしなければ、少なくとも今までと変わらないでいられる。

ここに、いられる。

居たい、などと本当は言えない。

そんな立場じゃない。

なぜなら俺は、今 彼女が目を閉じ怯え否定しようとしている“モノ”なのだから。

人殺し、バケモノ、悪魔。

だけど同時に俺は、レイのそばにいる零だ。

そのレイは、せっかくベッドから降りてきたのに俺にしがみつき、身体をこわばらせ目を固く閉じてしている。

TVの音に反応し、震えたり、時折ちらりと泣き声を漏らす。

「・・・ムリー」

あまりに情けないその声に、俺はふきだした。

「ふつ・・・おいおい、それじゃ寝てても同じだ。

ちゃんと目を開けて見ろよ。」

「だから、ムリー・・・」

TV画面の中、悪魔は血しづきあげて哀れなイケヒコをむかせ

つている。

俺はレイにしがみつかれていなしの方の手でそつとリモコンを取る

と、やたらにボリュームを落とした。

「ほら、もう大丈夫だから少しつきあえ。」

「・・・う、うん？」

おそるおそる、レイが目を開けた瞬間ボリュームを元に戻す。
ギヤアアアアアアッ！

グチャツボギメギベリツ ブヂュツ

びしゃあああああ・・・

画面は半分くらい赤系統の色で埋め尽くされている。

「~~~~~！」

悲鳴を上げかけたレイだが、時間は忘れていなかつたらしく、口を必死で押さえて声が出ないようにしていた。

別人に見えるくらいカオスな表情が面白い。

恐怖も充分濃く流れ込んでくる。

他の何にも代えがたいその味わいは、映画がほとんど終わるまで続いた。

「ふう、楽しかった。な？」

声をかけると

「そ。よかつたね。」

少しじれた涙声が答えた。

「怒つてんのか？」「

「怒つてないけど・・・怖かっただし。」

思えばいつもこうだった。

一方的にガマンさせて、放つたらかし。

少しぐらいの見返りを求める権利が、レイにはあるハズだ。

こんなふうに思つのは、つまり、逆に俺が彼女に何かしてやりたいのだろう。

悪魔らしくはないが、もし俺がただの男ならそう考えても何も不思議じゃない。

今だけ、ただの男でありたかった。

自分が何者であるか忘れない、たまに忘れる瞬間があつてもいい。

それで自分が無くなるわけでもないだろ。誰にしてるのかわからない言い訳を一瞬のうちに巡らしながら、きっと俺はその時 勇気を出したんだと思ひ。

(続)

「なあレイ」

何気ないそぶりで

「ん?」

耳に心地よい響きは、あと半歩踏み出すだけで抱きしめられそうな距離感。

俺は、踏み出そうとする。

「最後まで付き合った」「ホウジに、キスしてやる? が?」

「え?」

半分笑いかけたフクザツな表情で、レイが固まる。

こういうからかい方をすると、本当に怒らせてしまつ事がある。それは今までの経験からわかっている。

だが俺は今 彼女をからかってはいけない。

その気持ちは、伝わっていない。

それも、今までの事を思えば当然だ。胸の内すべてを吐き出してしまえば、俺の望みは叶う。迷いながら、彼女の頬にキスをする。踏み出しきれずに。

レイはそれに驚いて小さく声をあげた。

「ひゃ」

「オツカレさん。また つきあえよ。」

他意はない、と軽く笑つて見せる。

安心した笑みがレイの顔に広がる。

「ええつ? やだもー、えへへ、えへえ・・・」

それが仮面とも知らずに。

嘘だよ、これも嘘。

俺は結局悪魔で、彼女の笑顔を引き出すには嘘をつくしかない。

その日の前で、いくつか悪魔らしい行動を見せたことはある。

それでも、俺が人を殺すところも、ふだんの契約のありかたも、
契約した人間が俺をなじる場面も、レイは本当の俺らしい俺を何一
つ知らない。

愛想の悪い同居人ぐらににしか思っていない。

「じゃ、そろそろ寝るか。」

“仮面”がしゃべる。

「うん・・・ふあ、ふつ。」

レイが眠そうにあくびをする。

“仮面”を“子供”から“彼氏”に変えて、レイを抱き上げてベ
ッドに寝かせてみる。

「ふあつ？」

レイの驚く声。

フトンをかけてやめりとするといちなりを見つめてくる。

「何だ？」

「ううん、・・・じゃ、なくて、あのね？」

俺はその先を黙つて待つ。

何か気付かれたのだろうか。

「零さんって、悪魔なんだよね？」

「ああ。」

レイの表情が少し困ったように変わる。

「・・・イケニエ、やっぱ食べたりしたことある？」

俺は、あきれた。

「だったら出会った時点でお前は喰われてる。」

「あ。そか、そーだよね？ あは、あはは。零さんがそんなことす
るわけないよね。」

別にイケニエとしてではなく、なら人を殺すし、喰うがな。
俺は子供の姿に戻らないまま、TVを消しながらレイの隣にもぐ
りこんだ。

「そうだつたとして」

「そだつたとして？」

「そだつたとして？」

疑問形で俺の言ったことをくづかえしたレイの肩をかるく抱く。

「え？え？」

戸惑うレイに、俺は意地悪く笑つた。

「お前を最初の犠牲者にすることもできる。」

鼻先で柔らかく甘い香りのする髪をかき分けて、耳に噛み付く。甘噛みに、笑いの混じつた悲鳴が上がる。

「きやあつは、あははーくすぐつた、いたつきやつ、わやはははは！」

ふざけているフリで、抱きしめる。

「逃・げ・る・な。本気だつたらどうする？..」

喰われて、くれるか？

「えー、だから、そんなこと思つてないクセに、あははー信じてるもん、零さんのことー。」

抱きしめていたい衝動と、苛立ち。

俺のことなど、ろくに知りもしないで。

全てを知られたとき、レイは自分から離れて行つてしまつかもしれない。

誰だつて、死にたくはない。

駆け抜けて行く動搖を、一瞬目を閉じてやりすゞす。

彼女を放してやり、あえて笑う。

皮肉たっぷりに聞こえるよう、俺は言つた。

「だと、いいな？」

そうだとしたら、どんなにいいか。

イケニHでなくとも、自分が奪つた命は数知れないといつ事実。目の前の笑顔は、それを知らない。

頬には土のざらざらした感触があった。

手に触れているのは、たぶん草だ。

地面に倒れていることに気付き、俺はゆっくりと身体を起した。

木漏れ日のさす森にいた。

遠くで鳥が鳴ぐ。

他の音はほとんどない、静かな森。

そうだ・・・俺は血だまりの中で目を覚まして、・・・逃げなければ。

この血が何だったか思い出せば、逃げなければ俺は死ぬ。

なぜかはわからないのに、それが事実だということだけはわかつていた。

いいや、“今”はわかる。

なぜか。

あれは全て、彼女のものだからだ。

身体は、ラファエルが連れ帰ってくれたのだ。いつ。

だから、ここにはない。

あつたはずのそれを思い出す前に、記憶が混乱してこらへり逃げなければ。

違う、・・・違う違う違う。おかしい。

混乱などしていなじじゃないか。

そうだ、俺は全てちゃんと覚えている。

もう思い出してしまうんだ。

あれは過去だと、“今”的俺は思い出して、知っている。

その証拠に、ここに血だまりはない。

あの時の血だまり、あれは俺が殺したレイアのものだ。

そこから逃げてまで、俺は自分を守った。

自分なんかを。

本当は俺が代わりに死ぬべきだったのに。

俺が全てを捧げ彼女に代わり、それで彼女がよみがえればどんなによかつたか。

忌まわしい・・・俺の記憶を全て失つて、何も知らない彼女が目を覚ます。

そうなれば、そうすれば誰も苦しまなかつた。

彼女のそばにはラファエルがいた。

きっと俺よりもずっとよく彼女を守り、誰より幸せにしたはずだ。なのに、俺が生きていて、彼女がいない。

あれから何百年が経つたのか。

俺はレイと出会い、愛され、自分も彼女を愛そうとしている。しようこりも無く。

不幸にするかも知れないのに。

いいや、そうなるにきまつている。

俺は、悪魔なんだ。

レイアを殺して、レイも不幸にするとかつていながら自分の中のにしようとしているんだ。

「そうなの？」

不意に隣から声が聞こえた。

その顔を見たとき、俺は自分の胸のなかに何かがあふれるのを感じた。

あたたかい、なのに痛い、優しい、甘い、苦い・・・。

「レイア。」

手を伸ばすと、かわされた。

許していいのか。

あたりまえだ。

わかっていても辛い。

そのまま硬直した俺に、レイアは微笑んだ。

「ねえ悪魔、あたしが確かめてきてあげるよ。」

(続)

誰かに呼ばれている気がして、レイは皿をさました。

「ん・・・零さん?」

まだ室内は闇といつていいほどに暗い。

おかしいな、と思う寝ぼけた視界に、ちらにおかしなモノがうつる。

ひゅあっ。

自分のノドが息を飲む音がした。

女の幽霊がいた。

それが外国人だとからうじてわかったのと同時に、レイは氣を失つた。

次に目を開けたときも、部屋は暗かつた。

浮かび上がる白い女の顔。

まだいる。

もう一度 気絶してしまいたい。

レイの願いは叶わず、幽霊はこちらの顔をじっと見ている。にっこりと笑う。

幽霊なのに、陽気な笑顔だつた。

怯えていたハズが、拍子抜けする。

「 ム シ シ エ 」

幽霊が話しかけてくるが、どうやら外国語でレイには理解できな

い。

「え?え?」

首をかしげてみると、

「『 # # * ? ? 』

さりに何か言つてくる。

「わ、かんないよー・・・ノーアイングリッシュ、オケー?」

英語がどうかもわからないが、とりあえず話せないと伝えてみる。

幽霊は少し困った顔をした後、固く目を閉じた。
集中していよいよ見える。

突然、レイのアタマの中に大きな声が響いた。

“きこえるー？！”

「きやつ」

レイは思わず短い悲鳴をもらした。

隣で寝ている零は、幸い起きなかつた。

彼らしくもないが、かなり熟睡しているのか。

また、声がする。

“あ、ごめんね？ 集中しそぎたみたい。”

幽霊は言葉が通じないとわかり、テレパシーを使うことにしたらしい。

できることはできるが、慣れていないのだろう。

「だ、ダイジョブだいじょぶ。」

レイが笑つて見せると、こちらの言いたいことはわかるのか、幽靈もへろりと人の良さそうな顔で笑つた。

怖い幽霊ではなさそうだ、と思うとレイは少しづつ落ち着きを取り戻すことができた。

幽霊が、おもむろに寝ている零へ視線を落とす。

“ねえあんた、これと付き合つてるんだよね？”

レイは大人で、隣に眠る零は子供だ。

しかし、子供なのは外見だけ。

幽霊はそれを知っているのだろうか。

「え？いや？えつと、どうなんだろ。」

それにして、関係を問われるとそこはどう表現していいか迷う。付き合っている彼女、だとするならもっと大事にされるはずだろ

う。

その答えをどうとったのか、幽霊は話し続ける。

“これが、何なのか・・・知ってるよね？”
「人間じゃない、ってこと？」

さつきから零をさして幽霊が、“彼”や“この人”でなく“これ”と表現しているのは、そのせいに違ひなかつた。

“そうだよ。こいつは悪魔なんだ。そしてあたしはその犠牲者。”
「犠牲・・・？零さん、の？」

“零、か。あたしにとっちゃ、ただの・・・悪魔。”

幽霊はもう一度、ゆっくりと彼の名を呼んで透き通つた手をその頬に重ねた。

言い分は恨み言ふものなのに、悲しげな瞳にはいとおしさが見えた気がした。

その瞳が、レイの瞳をのぞきこむ。

“教えてあげる、こいつのしたこと。隠してた全部。”
レイの頭の中を、幽霊の記憶がイメージとなつて駆け抜けた。
自分の記憶でもあるかのように、胸いっぱいに感情があふれはじけ流れた。

深く暗い森、幼い自分、大きな悪魔の大きな手。

悪魔は自分を助けてくれた。

恐れるべき存在ではない。

木漏れ日の下で見る悪魔の瞳、そこに受け入れられたような感覚。お互いの気持ちが重なつた瞬間、会うことを探しられた。心は渴き、枯れゆく。

枯れて、完全に朽ちてしまう前に、駆け出す。

束の間、夜の闇に愛しい影を見る。

幻と思える一瞬だけで、気づけばまた渴きのただ中に戻されている。

何度会いに行つても。

苦しい・・・狂おしい。

会いに行くだけではだめなら、一緒にいられないのなら一つにねればいい。

魂を捧げよう、悪魔に。

願いは、一つになること。

離れなくてすむのなら、他にはなにも。
胸に突き立てたのは、自由の鍵だ。

痛くなんかないはず、一つになるだけ。

倒れこめば鍵は深く突き刺さり、大きな手が伸びてくる。
迎えに。

“あたしは、そうして死んだ。

あいつは、あたしの魂を食つた。

もしかしたら最初からそのつもりで、少しだけ優しくしたのかも
しない。

自分から魂を捧げるようにするためには。

これでも、あいつが好き？そばにいたい？”

真顔で恨めしげな言葉を吐き捨てる幽霊は、少し恐ろしい感じが

した。
(続)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3362s/>

居候日記

2011年12月21日19時56分発行